
アニメのお仕事

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニメのお仕事

【Nコード】

N7465C

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

五人のアニメ・スタッフが迷い込んだのは不思議な異世界。そこでかれらが体験する奇妙な冒険。なぜアニメのスタッフが異世界に連れ去られることになったのか？そこでのかれらの役割は？でも、これってファンタジー？それはあなたが判断なさってください。

ブログ 召喚（前書き）

都内某所にあるアニメ・スタジオでは非常事態がおきていた。打ち合わせのため集合した五人のアニメ・スタッフは、そこで奇妙な出来事に遭遇する。

プロローグ 召喚

「おい、三村くん。時間だぞ。起きてくれ」

美術監督の山田栄治の声に三村健介はおきあがった。

キヤスターつきの椅子を三つ並べたうえに三村は横になり、毛布をあたまからかぶり眠り込んでいた。

「ああ、どうも。そんな時間すか……」

ふああ、と三村はあくびをすると、背中をのばし肩の関節をぽきぽきと鳴らした。すっかり全身が凝っていた。監督の山田はそんな三村をあきれたように見下ろした。

「よくそんなところで寝られるなあ」

「いやあ、なれですよ」

じつさいなれというのはおそろしい。こうしてスタジオの制作室で、とまりこみ寝るところがないため椅子をならべてそのうえに眠り込むようになってかなりの期間がたっている。最初は眠り込んだ瞬間、椅子を無意識にずらして床にころげおちていたが、いまではすっかり熟睡することができ、椅子をずらすこともない。アパートはあるにはあるが、せいぜい一月に一度か二度帰るだけで、たまに布団をしいて寝るとかえって目がさえてしまうくらいだ。

まったくアニメの制作進行というのは因果な商売だ。

ここは都内某所にあるアニメの制作会社「タップ」の制作室である。会社がいっている建物はもとは倉庫としてつかわれていたらしく、一階の天井はやけに高く、二階と三階にあるスタッフの部屋はプレハブに毛がはえたようにつくりになっている。

「タップ」は中堅のアニメ制作会社で、おもにテレビ・シリーズの制作を請け負っている。一階の制作室には制作進行のデスクとコンピュータがならんでいる。最近のテレビ・アニメはほとんどコンピュータで制作されるので、数年前スタジオはかなり無理をしてそれに対応したのだ。

立ち上がった三村は山田を見下ろす格好になる。三村は身長百九十センチかい長身で、山田は百六十センチあるかないかで体重は八十キロというデブなのでどうしても映画の「スター・ウォーズ」にでてくるC3POとR2D2のコンビのようになる。

三村は手首の腕時計をながめた。

夜中の十一時すぎをまわっている。

「木戸監督は？」

「まだうえだよ」

山田は天井を見上げた。三村はうなずいた。

「そうですね……。それでほかのみなさんは？」

「打ち合わせ室でまってるよ」

「すいません。それじゃそろそろ監督をよんできますんで……」

三村はもうろうとした意識のまま階段をのぼっていった。その背中に山田は声をかけた。

「あのさあ、言いたくないんだが。今日中にほんとうに打ち合わせできるんだろうね？ みんな待ちくたびれているんだが」

すみません、待つてくださいますとつばやいて三村は階段をあがっていった。

一階から二階への階段はやけにながい。一階の天井がひどく高いので、階段もながくなる。三村は階段のさきのドアを見上げた。

「演出部」とある。

そこには総監督の木戸がとまりこんでコンテをきっているはずだ。コンテとはアニメ映画で基本的な設計図にあたり、シナリオをもとにカットごとの画面を設定し、あるいはキャラクターの動きを指定するものだ。それがないとアニメの制作ははじまらない。

制作会社「タップ」は来春放映予定のテレビ・シリーズ「バックの冒険」の製作にはいつていた。いまは年末で、放映までは三ヶ月とすこししかない。

ふつうはこういうスケジュールではすでにストック用に数本できあがっているはずなのだが、ずれにずれていまだに第一話の制作に

もはいつていない始末だ。

原因は総監督の木戸純一にある。

木戸がテレビ・シリーズの総監督に就任したのはこの「パツクの冒険」が最初で、しかも原作は木戸のものであった。

もともとかれは作画監督だった。

木戸が学生時分、自費出版の漫画を発表したことが発端である。

その漫画が「パツクの冒険」の原作である。そのとき発表した漫画は冒頭部分だけで結局しりきれとんぼに終わったが、その画力に注目したのはアニメ業界であった。

そのころ木戸はじぶんの漫画の能力に疑問をもっていたこともあり、アニメのキャラクター設定などでアニメ業界に飛び込んだ。それが大成功だった。木戸は画力はあったが、ストーリーをつくる能力はなかったのである。

そのうち木戸の名前が専門誌で知れ渡るようになって、かれが学生のときに発表した漫画を再発見したマニアのなかでその漫画をアニメにしてほしいという声が澎湃とあがってきたのである。

その声に専門誌がこたえ、数社のスポンサーがなのりをあげ制作が決定された。

総監督には原作者の木戸が就任した。

最初のうち制作はほとんど拍子に進行した。なにしろ総監督が原作者をかね、しかももともと作画監督でもある。キャラクター設定から美術設定、色指定など制作のかなめとなる絵はほとんどあがっていた。

ただしストーリー構成になるとそれが暗礁にのりあげた。

木戸はさきにのべたように画力はあるがストーリーをつくるという力はあまりない。しかし原作者であるというプライドはあり、そのためシナリオ・ライターと何度もストーリーについて衝突することになる。

ライターがあげてくるシナリオの案を何度も何度も木戸は書き直させ、ついにはメインのシナリオ・ライターが腹をたてこのシリ

ズからみずから降板を申し立てる騒ぎになってしまったのである。
木戸はとびきりのトラブル・メーカーであることを証明したのである。

何度もプロデューサーと話し合いをもうけ、ついに木戸はじぶん
でシナリオをかねると宣言することになった。

その時点で制作をまかされていた三村は不安になっていた。

これはスケジュール通りにあがらないのでは？

その不安は的中した。

シリーズの第一話となるシナリオがいつまでたってもあがらず、
木戸はついにシナリオなしでいきなり第一話のコンテをきると言い
出したのである。

それが二ヶ月前のことだ。すでに制作スケジュールはどうしよう
もないほど遅れていた。「タップ」の社長であるプロデューサーは
八方手をつくしてようやく放映予定をのばすことにスポンサーや代
理店の同意をもらっていた。

そして今夜、第一話の打ち合わせがメインとなるスタッフとおこ
なわれるはずであった。そのため、今夜はどうしても第一話のコン
テが必要なのだ。

念を押した三村に、木戸は大丈夫。絶対今日中までにコンテをあ
げるからと約束した。その約束をあてにして三村はかれをおこしに
きた美術監督の山田、作画監督の市川、色指定の宮元の三人を招集
したのである。

演出部のドアのまえにたった三村はノックをした。

「監督……。三村です。木戸さん。どうですか、コンテをいただき
にあがったんですが」

返事はない。

三村は眉をひそめた。

まさか。

いやな予感がした。

ふとほかの作品で、絵があがらず回収直前に逃げ出したスタッフ

のことを思い出した。

まさかそんなことあるわけないよな……。

ほんと三村はやや強めにノックした。

ドアの向こうでくぐもった返事がした。

ふうふう、と三村は安堵のため息をついた。

大丈夫、逃げ出したりはしていない。木戸はいる。

「監督、はいりますよ!」

ドアノブを握る。

動かない。

え?

なから鍵がかかっていた。

「雨になるかなあ」

作画監督の市川はつぶやいた。

窓の外は闇である。

空は雲がたれさがり、星はみえない。その雲間から稲光がときどき遠く光っているのが見えている。音は聞こえていない。

一階の会議室である。

ここに「パツクの冒険」のメイン・スタッフが第一話の打ち合わせをおこなうため集められていた。

十畳ほどの部屋に会議用の机と椅子。それに完成したアニメを鑑賞するための三十インチのモニター。資料がおさめられているスチール棚。

机のうえには「パツクの冒険」の設定資料のコピーが人数分用意されていた。

キャラクター表は中世ヨーロッパ風の衣装に身を包んだキャラクターが精緻な線で描かれている。そのキャラクターにコンピュータで着色された色指定表がプリント・アウトされてならべられていた。

作画監督の市川努。二十二才。一般にアニメのスタッフは若い人

間でしめられているがかれはそのなかでもとびきり若くて作画監督になった。なにしろアニメ業界にとびこんだのが中学を卒業してすぐである。若くてもこの業界ではベテランといわれる年数をすごしている。身長百七十センチそこそこで体重は五十キロあるかないかで、いまにも餓死しそうに見えるほどやせている。気が短く皮肉屋である。

「雨になるって……ほんとう？」

それまで漫画を読んでいた宮元洋子は眉をひそめた。

彼女の仕事は色指定である。年令は三十二才。そのわりに小柄で童顔ということもあり、へたをすると中学生に間違えられることもある。アニメがセルとよばれる透明のシートに特殊な絵の具で色を塗っていたころからアニメの仕事をしていて、いつも場違いなほど少女趣味の服を身につけている。その見かけからつい人は彼女の性格を見誤るというあやまちをおかす。じつは彼女は男勝りというかなんり勝気でどんな相手にもつつかかる猪のような性格の持ち主である。彼女に怒鳴りつけられたスタッフは数人どころではきかない。三村もまた彼女に怒鳴りつけられた経験がある。

「まいったなあ。帰りの電車あるかなあ」

ぼやいた山田に市川はふりむいた。

「あれ、山田さん。今日は車じゃないんですか？」

「車検でね……。こんなことなら代車を借りるんだった」

山田はため息をついた。

椅子にすわる山田はあごひげをのばし、長く伸びた髪の毛の後頭部でむすんでいることもあってファンタジー小説に登場するドワーフのように見える。

と、かれのポケットのなかから携帯電話の呼び出し音がきこえてくる。あわてて山田は携帯をとりだし、画面を見つめた。

「かみさんからのメールだよ。やれやれ」

こつ指で返信をしている山田を市川はおかしそうに見つめた。

「山田さん、すっかりメールを使うことになれたみたいですね」

山田は肩をすくめた。

「しょうがねえよ。おれはこんなの好かんのだがな」

山田は四十二才。このなかで最年長である。

ごろごろごろ……。

遠雷が聞こえ、三人はおもわず顔を見合わせた。

「おい、ほんとうに降ってきそうじゃないか」

「いやだあ。あたし傘をもってきてないのよ」

喝っ……。

一瞬、あおじろいひかりが会議室をみたした。

「きゃあ！」

洋子が悲鳴をあげた。

どーん……。

雷鳴がとどろく。

「おいおい……」

山田と市川が心配そうに窓にかけより空を見上げた。

どんよりとたれこめた雲間から稲妻が光っている。

風もでてきたようだ。街路樹が風でなびき、電線がひゅうひゅう

と風きり音をたてていた。

「じょうだんじゃないぞ。こんな夜中までひきとめられて、帰れな

くなったらどうするんだ！」

市川がつぶやいた。

「木戸さん！ いいかげんにしてくださいよっ！」

天井から三村の怒鳴る声が聞こえてきた。市川は上を見上げた。

「なんだあ？」

「三村くんだ。さっき監督のところへあがっていったんだが」

山田の言葉に市川は反応した。

「行っって見よう」

「行っって、上かい？」

「そうさ。なにか妙だと思いませんか？」

うん、と山田は生返事をした。なににしても山田は決断がおそい。

「行きましょうよ。ここにいてもしょうがないわよ」

洋子が立ち上がり、会議室のドアを開けて出て行った。彼女のあとを山田と市川はあわてて追いかけた。

「どんだんだん……」

「どんだんだん……」

三村が必死になって演出部のドアを叩いている。

「監督！ 開けてくださいっ！」

ドアを叩きつつ、三村はドアノブをがちゃがちゃと音をたててまわしている。すっかりとりみだしているようだ。

そこへ洋子を先頭に三人が階段を登ってきた。

「おい、三村くん。なにしてんの？」

「あ、山田さん」

ふりかえった三村の顔は蒼白になっていた。

「たいへんです！ 監督がなかからドアに鍵を……」

「なにい？」

市川がそのやせた体を前に運んだ。

「鍵をかけたって、つまり立てこもりってことが」

「ええ、まあ……」

「どういうことなの？ 今夜の打ち合わせはどうなるのよ」

洋子が足をふみならしてさげんだ。

「こうなったらドアをぶちやぶるんだ」

市川の言葉に全員が目をまるくした。

「ちよつと市川くん……」

眉をひそめた山田に市川はかみつくように話しかけた。

「しょうがないでしょう。このままじゃ打ち合わせなんかできっこないし、へたすりゃ放映すらあぶない。つまりこの作品がお蔵入りする可能性もあるってことだ。それならそれではやく結果を知りたいし、あとのこともある。そうだろ、三村くん。こうして手をこまねいてもなんにもならないよ」

三村はゆつくりとうなずいた。

「そうですね……。ドアのことはあとで社長に言つときますから…

…」

「よし、それじゃ決まりだな！」

市川が身構えた。

そのわきに洋子、山田、三村がならんだ。

「ようし……それじゃいち、にい、さん、で行くからな」

そう言つと市川は息をすうと「いち、にい……」と数をかぞえはじめた。

「さん！」

市川がさけんで全員ドアにむけて体当たりをする。

ばあんっ！

ドアがはじけとび、四人は演出部屋になだれこんだ。

「木戸さんっ！」

三村が悲鳴をあげた。

演出部屋は事実上、木戸の個室といつてもいい。もともとおおきな部屋を木戸のためにパーティションをきり、約四畳半くらいのひろさをとっている。窓の傍におおきめの動画机があり、ドアのちかくには資料用のスチール棚がある。机の横にはカラー・ボックスがあり、そのうえに木戸が作品の参考にするためにビデオ内臓の小型テレビがおかれ、何本ものビデオやDVDが積み上げられていた。

監督の木戸は動画机を背に、椅子に腰かけていた。

年令三十六。

がっちりとした体型で、頭は五分刈りにしている。度の強いメタル・フレームの眼鏡をかけぼうぜんとした表情で部屋に乱入してきた四人を見上げていた。

床には一面に書き損じのコンテ用紙が散乱し、くずかごには反古になった紙くずがいっぱいになっていた。その紙くずだらけの部屋のなかを市川がずい、とばかりに足をふみいれて動画机に近づいた。手を伸ばし、書きかけのコンテをつかむ。ばらばらとめくり枚数を

かぞえはじめた。

「ひい、ふう、みい……なんだ、たった三枚しかあがってない」

「三枚ですってえ！」

三村が悲鳴をあげた。

「木戸さんっ！ 今日中にコンテがあがるからって約束したじゃないですか。どうすんですかつ？」

「え……」

ゆっくりと木戸は顔をあげ、三村を見上げた。眼鏡のおくのふたの目はなにも見ていないようだ。

「コンテですよっ！ 今日中に打ち合わせやらないと放映に間に合わないって、あんなに言ったでしょ。いままでなにやってたんです」窓が青白くひかった。

一瞬の静寂ののち、ばりばりばりと雷鳴がとどろいた。

ぴしゃーんっ……。

どこかに落雷があつたのだろうか。

みな無言だった。

あまりのことにどう反応していいのかわからない、といったところか。

壁にはホワイト・ボードが架けられそこにはスケジュール表が書かれている。何度も書き直されたあとがあり、真っ赤な字で放映日時が表のおわりに書かれている。その放映日時にむけ全員が作業を進めなくてはならないのだが、それもコンテあつての話である。その前提がすべて崩れたのである。

もうどうしようもない。

どうしようかなあ……、と山田は考えていた。この「パックの冒険」の話が来てかれはほかのシリーズの誘いを断っていた。とうぜん、「パックの冒険」は放映不可能と見てよく、そうなれば飯を食うためにほかの仕事さがさなくてはならない。かれは知り合いの制作会社のプロデューサーや、制作デスクの顔を思い浮かべた。このぎりぎりの状況の中、どの会社がおれに仕事をまわしてくれるか

なあ……。まあ美術監督の仕事がなくとも背景をやればなんとか糊口をしのぐことはできるか……。

まったくなんてこった……。

市川は腹をたてていた。この業界にはいつて七年、この木戸に市川は仕事を教えてもらっていると言ってもよく、その木戸が総監督になるということで作画監督をひきつけたのだがこんな無責任な男とは思わなかった。

いままで腕は認められていたがこの「パックの冒険」でステップ・アップできると目論んでいたのに木戸のせいで棒に振ることになるのだ。

あーあ、こんなことになるんじゃないかと思ってた。

洋子はひそかにひとりごちた。彼女は「タツプ」専属の色指定スタツプで、木戸とは何度もいろんな作品をつきあっていた。そのころ木戸は作画監督だったが、腕はあるが仕事について自分勝手な男だと思っていたから、こんどの総監督就任についてはあやぶんでいたのである。

「木戸さんっ！　どうするんですかっ！」

おろおろと三村は木戸につめよっていた。木戸はほうけたような顔で見あげた。その目からぼろぼろと涙がふきこぼれた。

「ど、どうしようもなかったんだよお……」

ふらり、と木戸は立ち上がった。その両手がわなわなと震えている。

え？　と全員が木戸の口元を見つめた。

なにを言い出すつもりか。

木戸はのめりこむような姿勢で喋りだした。

「最初はおれがシナリオを書くつもりだったんだ。その自信もあった！　だってそうだろ、おれの描いた漫画が原作なんだもの……。

そりゃ最初に同人誌で描いたやつはしりきれとんぼだよ。でもずーっとおれ、あの物語のつづきを考えていたんだ。それが……それが

……」

うう……、と木戸は両手で顔をおおった。

「でもできねえ！ おれにはシナリオ書けねえ……。なんともコンテを描き直したんだけど、どうしてもさきに進まないんだ……」
ぴかっ、と窓がまっしろに光った。

ぐわらぐわら……と、雷鳴がひびきわたる。

「どうすりゃいいんだ、だれか助けてくれよっ！ もっ、神でも悪魔でもいいからだれか助けてくれっ！」

もう一度窓の外がひかっった。

こんどはさらに強烈だった。

青白い光が部屋のすみずみまで照らし出した。

！

この稲光は奇妙だった。

一瞬の光のはずがまるで時間がひきのばされたようにいつまでも光っている。

全員の動きがとまった。

いや、とまったというより動けないのだ。

髪の毛一本、指先ひとつぴくりとも動かない。

どうなってる……？

みなその瞬間に凍りついたかのようにだった。一瞬が永遠に変えられていた。しらじらとした光が部屋に満ちた。

「あんたらの願い、かなえまひよ……」

と、奇妙な”声”が聞こえてきた。なぜかその”声”は大阪弁だった。

「あんたら困ってるんやろ。ほんならわてがなんとかしまっさかい、あんたらもきばりなはれ」

だれだ、だれが喋ってる？

身動きができないまま三村は必死に考えた。なにか異常なことがおきていることはわかるが理解ができない。その”声”はまるで三村の頭のなかで聞こえてくるかのようだった。

……どういうこと？ あたし、雷に打たれて死んだのかしら……？

洋子の声だった。

……洋子くん、きみか！

これは山田の声。

動けねえ！ どうなってる？

市川の声だった。

知らない、知らない……おれのせいじゃないっ！

木戸の切羽詰った声。

かれらの声が交錯しているが、全員彫像になったように動いてはいない。指一本動かせないまま、思考だけが独立しているようだった。

「静かにしなはれ！」

「いらいらしたような」声”があたりを圧した。”声”はつづけた。「まったく、あんたらのせいやで……。まあ、もともとはその監督はんのせいでもあるんやけど……。最初、監督はんがマンガを描いたあたりはよろしかったたんねん。尻切れトンボに終わっただけで、実害はあんまりなかったんやけどな。ところがファンという連中がどんな勘違いか、あれを持ち上げよってよってたかってとうとう”世界”を誕生させてしもうた……。それでわしが呼ばれたんですわ。ほんまに迷惑やで」

”声”にはうんざりしたといった口調があった。

「じゃあけど誕生してしもうた”世界”はどうしようもでけへんしな……。このままほっばいて黙ってみているのもでけるんやけど、それはあの”世界”で生きている連中があれや。あんたら、なんとか辻褄あわせというやつをやってくれんか？ ひとつの”世界”を救ってほしいんや。それがこのあんたらのピンチをチャンスに変える唯一の方法なんやで」

……おれたちになにをやれっていうんだ？

市川が虚空にむかつて怒鳴った。といってもかれの身体はぴくりとも動かず、口元も凍りついたままである。

「あんたらの仕事をつづければええんや。そうすれば、すべてうま

くいくんや」

山田はひとりごちた。

……おれたちの仕事？

……おれたちはただのアニメのスタッフだぞ。それがなんで世界を救うことになるんだ？

「そうや、あんたらはアニメのスタッフや……その職分をわすれんことや……」

あたしたちになにをやれっていうのよ！ それにあんたはいったい誰？

洋子の憤然とした思考。

”声”はつぶやくような口調でそれにこたえた。

「わてのことなどどうでもよろし。あんたらのせいでえらい迷惑や……。やれやれ、こんなことにわてが乗り出すのも、あんたらがぼやぼやしとるからやで……。さあ、楽にしなはれ……」

光がさらに強烈にかがやいた。その光は目の奥にさしこんでくるようで、視界は完全にうばわれてしまった。

わあああああ……。

声にならない叫びをあげ、全員は気を失った。

邂逅（前書き）

五人は奇妙な世界で目覚める。その世界とは……。

邂逅

光が踊っている。

ぼんやりとした光がちかちかとまたたき、市川は目を開けた。かれは仰向けになっていた。

その顔にうえから光が降り注いでくる。まぶしいことはたしかだが、目をさすほどではない。光はすこし緑がかっているようだ。ちちち……。

鳥の声だ。小鳥が鳴き交わしている。

ぱちぱちとまぶたを動かし、ようやく視界がはつきりとしてきた。そこで市川は自分が何を見上げているのかわかった。

樹だ。

かれの上に樹木が枝をのびし、その葉むらから日の光がさしこんでくるのだ。わずかな風が葉をゆらし、その葉のあいだにのぞいた空から日差しがこぼれてくる。

市川は上体をおこした。

まわりを見回すと、そこは森のなかだった。と、いつてもそうふかい森ではない。樹の間からひろびろとした草原が目が届く限り広がっているのが見える。

どこだ、ここは？

そこで市川は自分の足元を見た。

なんだこりゃ。

いままで自分が履いていたのはスニーカーのはずだが、どういふわけかいまはやわらかそうな革のブーツを履いている。足を動かすとちやりちやりという音がした。かかとのあたりに拍車がついている。

立ち上がるとがちやり、という音が腰のあたりで響く。

なんだろうと手をやるとなんだか硬くて、細長いものが手に触れた。

目をやると、なんと剣がぶらさがっているのが見えた。それも西洋風の、ファンタジーに出てくるような、ごてごてとした装飾がほどこされた幅広のものだ。

剣？

まさかと思いかれは柄をにぎってその剣を抜いて見た。

青白い刀身が鞘走り、日の光を反射してぎらりと輝いた。刃は諸刃である。刀身はぴかぴかに磨かれ、市川の顔が映っている。手に伝わってくる重みはそれが本物であることを主張していた。

かれは刀身に指をちかづけた。

痛っ！

刃はするどく、指をちよっと押し当てただけで皮膚にぶつくりとあかい血玉がふくれてきた。

そこで市川は自分が身につけているものに気がついた。背中に真っ赤なマントがひるがえり、腰にはふといベルト、ズボンのすそは革のブーツにたくしこまれている。まるで中世ヨーロッパの騎士といった格好だ。

なんでこんなもの身につけているんだ？

無意識にかれは手にした剣を鞘におさめた。

おさめたあとで気がついた。

じつに自分は自然に剣をあつかっている。かれは昔見た映画の一場面を思い出した。それは昔の武士が刀のあつかいを学習する場面で、真剣を鞘からぬくのも、おさめるのもきわめて危険な動作で、それを自然におこなうまで修練が必要なのである。うっかり真剣をあつかうと、刃で指を切ったりするのである。それをかれは無意識におこなっている。もちろんそんな練習などしたことない。

それにここはどこだろう？

市川は歩き出した。あてはない。

と、一本の老木の根本あたりにひとりの男が寝転んでいるのを見た。つけた。

太ったあの姿は山田らしい。

近寄るとかれもまた市川におとらず奇妙な格好をしている。

山田の頭にはバイキングが身につけている兜をかぶり、ベルトが肩から腰へたすきがけにまかれている。足元も市川の履いているような革のブーツだ。腰には剣ではなく両刃の斧がさげられている。

「山田さん、山田さん」

市川が声をかけると山田はかすかに身動きをした。

「ぱちぱちとまぶたが開くと、その視線が市川にとまった。

「市川くんか……」

のっそりとおきあがるとぼうぜんとあたりを見回す。

「なんだこりゃあ、いったいここはどこだい」

「それはおれが知りたいですよ。目が覚めたらここにいたんです。なにがあつたんだろう……」

山田は市川の格好を見てふきだした。

「市川くん、なんて格好しているんだ。なにかのコスプレなのか？」

「山田さんだつて……」

「おれかい？」

そこでやつと山田は自分が身につけているものに気がついたようだった。

「な、なんだこりゃあ!」

市川はつぶやいた。

「ほかの連中はどこなんだろう」

市川に言われ、山田もそれに気がついたようだった。

「そついや、そつだ。三村ちゃんと宮元さん。それに木戸監督のすがたが見えないな」

「さがしにいきましょうか。それともここにいますか」
「ちよつと考えて山田はこたえた。

「さがしに行こうよ。どっちにしろここにいてもなにもわからん」
ふたりは歩き出した。

やがてふたりは川のほとりに近づいた。水音が聞こえてそれを見つけたのである。水流ははやく、水の底まで見える透明さだった。

その水面を見つけて市川と山田のふたりはようやく自分たちがからに喉がかわいていることに気がついた。

歓声を上げ、ふたりは水面ちかくにひざまづくと両手の手のひらをつかつて水をすくって喉をうるおした。

「うめえ！」

山田がうめいた。そこで市川は川の近くに横たわる人影に気づいた。

「あれ、宮元さんじゃないすか？」

市川がゆびさした。山田は同意した。

「ああ、たしかにあれは洋子くんだ。それにしてもはでな格好だな」
彼女は草むらにあおむけになっている。彼女もまた中世ヨーロッパ風の衣装を身につけているが、それが身につけているといえるかどうか。なぜならその衣装は布地をぎりぎりまで節約しているもので、わずかな布切れが胸と腰をおおっているだけで、手甲とひざまである長靴を身につけていた。

「洋子くん、ちょっと……」

ちよつと、というのは変であるが山田は彼女が目が覚めたらどうなるか考えて起こすのをためらっていた。なにしろ横たわる彼女のすがたはどうにも刺激的で……。いや、そんなことを考えている場合ではない。ともかく起こさないとというわけで山田は彼女の腕をゆりうごかした。

「洋子くん、洋子くん。起きてくれよ」

そのうちようやく洋子は目が覚めたようだった。そこで山田は思い出した。彼女は低血圧で、おきぬけはひどく不機嫌になることを

「なによう……」

ひくい声でうめくとはった、と山田を見上げた。

「なんだ、山田さんじゃない……」

ぱちぱちとまぶたが動いた。ようやく頭がはつきりしてきたようだ。

「なに、その格好？ コスプレ？」

みなおなじことを言うなあ、と市川は感心した。

「きみもおなじような格好だぜ」

市川に言われ洋子はじぶんのすがたを見下ろした。

「なにこれ！」

たちまち彼女はまっかになった。さすがに自分のいまの格好が刺激的なのに気づいたのだろう。そのうち彼女の表情に怒りが浮かんできた。

「あんたたち……」

え？ と市川と山田は顔を見合わせた。彼女の怒りが自分らにむけられているのはわかるが……。

「あたしにこんなもの着せて、なに考えているのっ！ なんの悪ふざけ？」

「おれたち？ まさか、そんな……」

山田はたじたとになった。彼女は自分たちがいたずらをしたと思ってる！

洋子は立ち上がると背中の手をやった。

すらりと長剣をぬきはなった。そのまま山田と市川へ突進してきた。

「おい、待てよ！」

市川が静止したが頭に血が上っている彼女は耳をかさず、わあああ……、と喚声をあげて長剣をふりおろした。

「ちやりいいいん！」

思わず市川は自分の剣をぬいて彼女のふりおろしてきた長剣を受け止めた。剣がかちあい、火花がちった。鉄のやけるにおいがする。かん、かん、かん、とふたりは剣をかわした。山田はそんなふたりをぼかん、と口をあけて見つめていた。

「すげえ……」

ふたりの剣技は見事だった。

まるで舞をおどるように剣をふりおろし、横になぎ、ぎりぎりのところでかわす。

が、山田は思い直した。いけない、止めないと！

「おい、ふたりともやめろ！」

ふたりが剣をはっしとかわし飛び下がると同時に山田は割ってはいった。

それにもかかわらず洋子は無言で切りかかってくる。山田は無意識に腰の斧をぬき、刃をふりはらった。

ぎい　い　い　ん！

洋子の手から長剣が宙にとんだ。きらきらと日の光をつけて輝くと、草原に飛んでぐさりと地面につきささった。

洋子のはっ、と自分の両手を見つめた。

「あたし、なにやってたんだろ……」

ふう、と市川は息をはいた。

「殺されるかと思っただぜ」

そう言つとばちん、と音をたてて剣を鞘におさめる。

洋子は首をふっている。

「あたし、あたし……、市川くんを本気で殺すつもりだった……」。

剣道なんか、やったことないのにあんなことどうしてできたんだろ
う」

「おれだつてそうだ」

市川はどさりと地面にあぐらをかいた。

「おれだつて剣道なんて、高校の授業でちょっとかじったくらいだ。それなのに体が勝手に動いて宮元さんの剣をうけていた。まるで剣の達人みたいだった」

「山田さんだつてそうよ。あたしの剣をはじきとばしたところなんて、すごくその斧を使い慣れていたみたい」

洋子に言われて山田はあらためて手にしていた斧を見つめた。

「そっ　いや、そうだ。斧なんか握ったことない」

市川は口を開いた。

「なあ、おれたちの格好。どこかで見たことないか？」

え？　と山田と洋子は市川を見つめた。市川はためらいながらつ

づけた。

「そのう……、おれが描いた「パツクの冒険」のキャラクター表で、登場人物が身につけている服装にそっくりだ、ってことなんだが……」

あ、とふたりは顔を見合わせた。

「そうだ……。おれはあのシリーズに出てくるドワーフの親爺の格好そっくりなんだ。この斧もあれが持ってたやつだ」

山田は手にした斧を見つめた。

洋子もあらためて自分の服装を見下ろした。

「あたしもあのシリーズの女性主人公の格好だわ。そして市川くん……」

「そうだ。おれはパツクの親友の服装だ。どういうこつたい。いたずらにしては手がこみすぎてないか。だいいち、あのキャラクター表はまだこの雑誌にも発表されていないはずだぜ。だれかがおれたちをかつぐ目的でこんな服装を用意したってわけか……。なんのためだ！　こんなの作るには相当時間がかかるぜ。おれの着ているものはコスプレなんかで使われている衣装にしては本格的すぎら」

市川はそこまで一気にしゃべり、息をきらした。山田と洋子はそんな市川をあつけにとられて見ていた。

「でも、あとふたりがないわね」

そつえば、と山田がうなずいた。

「うん、三村さんと木戸さんだ。あの二人はどうしたんだ。やつぱりこのちかくにいるのか？」

そのとき、ぱかぱかかと馬の蹄の音が聞こえてきた。

なんだろうと顔をあげた三人はぼかんと口を開けた。

馬が近づいてくる。その馬には鞍がおかれ、ひとりの人物が手綱をとっている。

なんとそれは三村だった。

「三村くん……」

洋子が歩き出すと、馬上の三村はにっこりと笑いかけた。

「やあ、みなさん。目が覚めたんですね」

ぼうぜんと三人は三村を見上げていた。

三村もまた三人とおなじく中世ヨーロッパ風の衣装を身につけている。が、その趣向は三人とはちがい、どこかの王侯貴族の子弟、といった雰囲気だった。うすいブルーの絹の上着はそでがたつぷりとしていて、風になびくマントは裏地が赤にちかい紫、表地には手の込んだ刺繍でこみいった紋章が描かれている。かれもまた剣を腰にさげているが、かれのものは細いレイピアらしく、柄にほどこざれている彫刻や装飾は金や宝石をたつぷりとつかった贅沢なものだった。

ひらりと三村は馬からおりと三人に話しかけた。

「最初に目が覚めたんですが、みなさんどうやっても目が覚めなくて……、それでちよつとあたりを調べていたんです」

山田が口を開いた。

「その馬はどうしたんだ？」

「ああ、これですか。いや、あたりを歩いていたらこの馬があらわれまして、どういうわけかあとをついて離れないんですよ。それで歩くのも面倒なんで乗ってきたというわけです」

市川が手をのばして馬にさわろうとすると、馬はぶるる……、と鼻をならしてその手をさけた。かつ、かつ、と蹄で地面をかいて市川を威嚇する。

「こいつは、きみ以外の人間には馴れないみたいだな」

「そうですかねえ」

洋子は三村を見上げた。

「でも三村くん、あんた馬術なんかいつ習ったの？ 馬に乗れるなんて聞いてないわよ」

あ、と三村は頭に手をやった。

「そっぴや、どうして乗れたんだらう。馬術なんて習ったことないのに」

三人はやっぱり、といった表情で顔を見合わせた。

「あんただけじゃないわ。あたしたちだってこんな格好で目覚めたと思つたら、いままで持ったことない剣を楽々扱えたりしたり……」

「なによ……」

「いや……」

にやりと笑うと三村はさきをつづけた。

「宮元さん、けっこうスタイルがいいんですね」

洋子はまっかになった。

山田と市川もにやにや笑っている。

「ぱあん……、という音がひびいた。」

三村の頬を洋子が張り倒したのだ。

「まったく、あんたたちってそんなことしか考えられないのっ！」

「いや、失礼した」

山田はまだにやにやしながら顎鬚をしごいた。

「これからどうするか、ってことだよな。まずはここで井戸端会議をしてもしかたないから、できたら人家をさがしたいところだな」

「それならちかくに村がありますよ」

三村の声に三人はかれを見た。

突然の注目に三村は頭をかいだ。

「この馬に乗ってあたりを走り回っていたんです。そしたらちいさな村とお城を見つけたんです。行って見ようかと思つたんですが、みなさんのことが心配で戻ってきたんです。その村とお城はまだ遠くから眺めただけです」

「ふうん、それなら行ってみるべきかもな」

市川の意見にみな賛成した。

「それじゃこつちですから……」

三村は馬の手綱をひいて歩き出した。

「ちよつと待った！」

山田の声にみな足をとめた。

「木戸監督はどこにいるんだ？」

あ、と三人は顔を見合わせた。

「三村くん、あなた、監督を見なかったの？」

「いえ、最初に目覚めたときぼくが見つけたのはみなさんだけでした」

「ふむ……」

山田はゆつくりうなずいた。

「それが鍵かもしれないな。なぜここに木戸監督がいないのか？」

おれたち四人がいるのに……」

「どういことですか」

市川が問い詰めると山田は首をふった。

「いや……、まだはつきりしない。ただの推測だよ。それもひどくばかげた考えなんで言いたくないんだ」

そんなあ……、と言いかけた洋子はふと空を見上げ目をまるくした。

「ちよつと、あれ……！」

彼女が指差し、みなその方向を見上げ、あつ、とさげんだ。

「竜だ……」

市川がつぶやいた。

たしかにそれは竜だった。

と、いつても東洋の蛇のような竜ではなく、西洋のファンタジーに登場する竜である。どつしりとした四肢をして、背中に巨大な羽根がはえ、その羽根をうちふって空中を飛行している。高度は二、三百メートル上空だろうか、竜は悠然と飛行していた。

「すげえ……」

市川はどういことか口元に笑いをうかべていた。

「とんでるよ、なあ、あれ竜だよな！」

「ああ、たしかに竜だ」

竜を見つめる山田は反対に深刻な表情になっていた。

「あれはこっちへ来るんじゃないのか？」

山田の言つとおり、竜はかれらの方向を目指しているようだった。

その距離はみるみる縮まり、その細部が見分けられるようになった。

「わわわわ……！」

みなあたふたとあわてて逃げ惑った。

「ごおおおおっ！」

かれらの上空を竜はぎりぎりで飛びすぎた。

洋子はぽかんとそれを見送った。

「いっちゃったわよ……あたしたちが狙いじゃないみたい」

「じゃあなにが狙いなんだ！」

市川がどなると竜の狙いはすぐ判明した。

かれらの立っている川にそって街道が通っており、そこを一台の馬車が数人の護衛の騎兵とともに進んでいたのである。竜はその一行をまっしぐらに目指していた。

騎兵は竜が近づいてくるのを認めると、いつせいに槍をかまえた。きらきらとかれらのかざす穂先が日光を反射した。

ずしいん……、と竜は地面に激突するように着陸すると、そのままのしと馬車に近づいていった。護衛の兵は馬を馬車のまわりに密集させ竜をまちかまえた。

「ごおおおおおっ！」

竜はものすごい雄たけびをあげた。その咆哮で騎兵が乗っている馬は驚いて掉立ちになってしまった。さすがに騎兵たちは馬から振り落とされはしなかったが、それでも竜にむけていた槍の穂先がみだれた。竜はその間隙につっこむと、そのながい尻尾を思い切りふりまわした。

「わあ！」

騎兵たちは馬もろとも竜の尻尾になぎたおされた。かろうじてその攻撃をかわした兵は槍を水平にかまえ竜に突進した。

竜は大口をあけると騎兵の槍をがつきとくわえ頭を左右にふりまわした。騎兵の槍はその手元からもぎとられてしまった。槍をなくした兵はあわてて腰の剣を鞘からぬきはなしたがときすでにおそく、竜がすぐそばに接近していた。

がぶり！

「きゃ！」

洋子はおもわず両手で目をふさいだ。

かれらの立っている場所からでも血しぶきが見えた。

竜が兵の首をばつくりとくわえてしまったのである。兵の死体はどさりと地面に落馬した。

あとは殺戮だった。

竜は手当たりしだい、まだ生きている騎兵を襲い、つぎつぎとそのあぎとの犠牲にしていたのである。

ついに護衛の兵がいなくなり、馬車だけが取り残されていた。御者は竜が近づいてきた時点でとくに逃げ出していた。

「三村くん！」

山田はぎよつとなった。なんと三村が無言でひいていた馬に飛び乗ると、そのわき腹をけつて駆け出したのである。

「なにをするつもりなんだ」

「助けるつもりなんだわ」

洋子がさげんだ。

「ばかな！ あんな竜にひとりでたちむかうつもりか！」

「ど、どうすんだよ。山田さん。おれたちどうすりゃいい？」

市川はすっかりうろたえていた。山田もおなじだった。

「どうすりゃいいって……ええい！」

山田は斧をかまえた。そのまま走り出し、三村のあとをおう。

市川と洋子は顔を見合わせた。

「畜生！ どうにでもなれっ！」

市川も剣をぬくと走り出した。洋子もあわててそのあとを追った。
「わあああーっ！」

めちやくちやに剣をふりまわし、四人は竜に近づいた。

馬車にむかっていた竜はその声にふりむいた。

ぐるるる……！

竜は鼻先にしわをよせうなった。

からだを接近してくる四人にむけるとどすどすと地面をふみならして歩き出す。身をひくくかまえ、首を地面すれすれにして全力疾走になった。

ぐおおおおおつ！

竜はおめいた。

先頭で馬を駆けさせていた三村はきらりと腰のレイピアをかざした。

竜がその口をあけ噛み付こうとすると三村は寸前にかわし、竜の胸のあたりに剣先をぐさりとつきさした。

うがあつ！

竜は苦痛に顔をしかめた。しかし致命傷ではない。三村の攻撃はかえって竜の闘争本能を刺激したみたいだった。

怒りにわれをわすれた竜は三村ひとりに攻撃を集中させた。三村はたくみに馬を御し、竜の攻撃を寸前でかわすとすきをみて剣先をつきさす。たちまち竜の全身の数箇所から血がふきだした。が、どれも竜の動きをとめるにいたらない。

と、竜の口が三村の剣先をくわえてしまった。

ぼきん、と音を立て三村のレイピアは根本からおれてしまった。それを見て三村は蒼白になった。

「わあああつ！」

そのときようやく山田たち三人が追いついた。

三人の喚声に竜はふと気を取られた。そのすきに三村は虎口を脱した。山田、市川、洋子の三人は竜にむけ武器をふりまわしてけん制した。

と、馬車のドアがひらきなかから人影がとびおりた。女だった。

彼女はながいスカートをひるがえし、地面にたおれていた騎兵の死体から槍をもぎとった。

「これを！」

槍を三村めがけてほおりなげる。

「ありがとう」

三村は槍を手をのばして受けとると、脇にかまえてふたたび竜に立ち向かった。

「はあっ！」

三村は拍車をならして馬を突進させた。馬蹄の音に竜はふたたび三村にむきなおった。その動きが絶妙のタイミングで三村のかまえる槍をむかえいれることになった。

ぐさり！

三村のかまえた槍の穂先は竜のわき腹にふかぶかときささった。

……！

竜の瞳がいつばいに見開かれた。

口を開け咆哮しようとするのだが苦痛で声もない。

はっはっはっ、とあえぐとそのままぐらりと倒れてしまった。

ずばり、と竜のわきばらにつきささっていた槍を三村はひきぬいた。

その傷から噴水のように竜の血が噴き出しあたりにちらばった。

「きゃあ！」

洋子はおもわずとびのいたがそれでも竜の血をあたまからあびてしまった。

地面にたおれた竜はびくんびくんと四肢を痙攣させ、やがてそれもなくなりぴくりとも動かなくなった。

「死んだの？」

洋子はこわごわとのぞきこんだ。

「ああ、死んだみたいだ……」

あえぎつつ山田はこたえた。ふたりは竜の死体を見下ろしていたと、市川はぎよっとして飛びのいた。

「な、なんだこりゃ！」

横たわった竜の死体に変化が生じていた。

その皮膚にしわがよりみるみるミイラ化していく。緑色の皮膚の色が茶色にかわり、肉がおちて骨格があらわになる。やがてぼろぼ

ると剥離していき一陣の風でほこりになるとあとにはなにもなくな
った。

みなぼうぜんとなっていた。

「どういこうった……」

そばに立っている山田に市川は問いかけた。山田は首をふった。

「わからん」

「見ろよ」

市川が三村のほうを指さした。

三人がその方向を見ると、なんと三村に槍をなげた女がかれの馬
前にひざまづいて頭をさげていた。

「ありがとうございます。おかげで魔王の眷属に襲われるのを助
けていただき、感謝の言葉もございません」

「いや、そんな……いいつすよ」

彼女の礼の言葉に三村はてれてどうしたらいいかわからない、と
いった体である。

「お姫さまだぜ」

市川はつぶやいた。

たしかにそうだった。

三村の前にひざまづいている彼女のすがたは、どう見てもどこか
の王国のプリンセスといった格好だった。

あしもとまで達するながいスカートはたつぷりとした量感でふく
らみ、生地になめいつけられた無数の宝石がきらきらと彼女が身動き
するたび輝いた。上着の袖もまたふつくらとしていた。彼女のみご
とな金髪は背中までとどく長いもので、よく手入れをしているのか、
さらりと背中にながれている。頭にはながいリボンのついたちいさ
な帽子をかぶり、ひたいのあたりには大きな宝石をかざった金の環
をはめていた。

「わたくし、コーラ姫ともうします。父はドラン公国の太守で、公
爵でございます。どうかあなたさまのお名前をお聞かせねがいませ
んでしょうか？」

三村はあわててこたえた。

「あ、ぼく三村健介といます。アニメの制作進行で……ええと三村というのが苗字で、健介が名前です」

言いかけてアニメの制作進行というのが彼女に通じていないことに気づき三村は馬からおりると彼女に手をさしのべた。

「まあ、立つてくださいよ。とにかく馬車へ……」

さしのべられた手をじっと見つめた彼女はすつとその手を握りたちあがった。三村は手をかして、彼女が馬車に乗るのをたすけた。

「おいおい……」

市川はあきれた。

「映画みたい……」

と、これは洋子。そんな三村とお姫さまを山田は考え深げに見つめている。

お姫さまは馬車のなかから三村に話しかけた。

「ぜひわたしどもの国においでください。お礼もさせていただきますいし、父上にお話ししたら喜ぶでしょう」

三村は三人のほうを見た。

「いいんじゃないか。どうせあてはないんだ。それよりおれたちもお姫さまに紹介してくれよ」

市川の言葉に三村は舌をだした。

「すいません……。あの、こちらが市川努さん」

「よろしく」

紹介された市川はにやつとコーラ姫に笑いかけた。彼女は上品な笑みをうかべかすかに辞儀をかえした。

「そちらが宮元洋子さん」

「こんにちわ」

「そして山田栄治さんです」

「どうも」

全員と挨拶をかわし、コーラ姫は口を開いた。

「それではみなさんも一緒にいらしてください」

姫の言葉にみな頭をさげた。なんとなくそうするのが自然な気がしたのだ。

護衛の兵が乗っていた馬を市川はつかまえた。市川は鞍に身を落ち着け、目をまるくした。そんな市川を山田は見上げ声をかけた。

「どうした、妙な顔をして」

「おれ馬に乗るのははじめてだけど、どういうわけか乗りこなせることがわかるんだ。なんでだ？」

山田はうなずいた。

「そうだと思ったよ」

そんな山田を市川は不思議そうな顔で見つめた。

洋子はコーラ姫と一緒に馬車に乗ることになった。山田は御者台にすわり手綱をもった。こうして一行は馬車をはさんで移動をはじめた。

道はまっすぐで、景色はのどかだった。

どっしりとした老木が両側に立ち並び、枝が張って日陰をつくっている。

そのなかを馬のぼくぼく、ぼくぼくという蹄の音がつづく。

「ドラン公国のコーラ姫だつてさ」

馬に乗った市川は馬首をよせて御者台の山田に話しかけた。

山田はうん、とうなずいた。

「ああ、聞いてるよ」

「あれ、「パツクの冒険」に出てきたキャラクターの名前じゃないか。それにドラン公国つても企画書に出てきたぜ。いったいどういうこつた？」

「うん、ということはおれたちがいまいるここが「パツクの冒険」の世界じゃないかということなんだ。おれたちはアニメのなかにいるんだよ」

「冗談じゃねえ！ おれたちはそのアニメの仕事をしているんだぞ。それじゃまるで……まるで……」

そこまで口にして市川はつまってしまった。

「落語の「桜の花見」という話しを知っているかい？」

市川がかぶりをふると山田はつづけた。

「ある男がさくらんぼ^うを種ごと食べてしまった。種は体の中で芽をだし、ついには頭から桜の木がはえ、その桜を見に人があつまつて花見をはじめた。桜の木の根元には池がつくれ男はあまりに花見のひとが集まってしまいとうとうノイローゼになってその桜の根本の池に身投げをして死んでしまった……なんだかその話しを思い出すな」

「なんだかわかるような気がするけど、なんであなたおれたちがアニメの世界のなかにいると思ったんだ」

「おれたちあのお姫さまと話しをしたな」

「うん」

「なぜおれたち話ができたんだ？」

「そりゃあのお姫さまが話しかけて……」

そこで市川はあつ、と宙をにらんだ。

「そうだ。あのお姫さまの話したのは日本語だ。しかしあのお姫さまの顔はどう見てもおれたち日本人とは思えない。ヨーロッパ系のおれたちから見れば外人だ。あの馬車だって、あとお姫さまを護衛していた騎士たちだって身につけていたものや、いろいろなものから中世ヨーロッパを思わせるじゃないか。もしそうなら彼女たちの話す言葉はフランス語か、ラテン語か、どっちにしる通じるはずがない。ところが彼女の言葉はおれたちにもわかる日本語だ。アニメで中世ヨーロッパを舞台にしたからといって、わざわざ中世フランス語でアフレコするわけないだろ。だからここはアニメの世界なんだよ」

「なぜだ。どうしてそんなことになったんだ」

「おれたちが目覚ます前のことを覚えているか」

「目を覚ます前……あなたのいいたいのは演出部屋でおきたことか？」

「そうだ。あの奇妙な雷が落ちて、そのとき”声”が聞こえたな」
「うん、へんな関西弁だったな」

「ああ、あの”声”はおれたちになにかするよう命令してた」

「おれたちのせいで迷惑してるというようなことを言ってたぞ」

「われわれになにをさせるつもりだと思う？」

「さあ……」

「ここは「パックの冒険」の世界だ。市川くんは原作の漫画を読んだかい？ 木戸監督が学生時代同人誌で発表したやつだ」

「ああ、絵はうまかったな……。しかし途中で終わっちゃった」

「そうだ。あの原作はしりきれとんぼで終わってる。そしてまたアニメにしようとおれたちが集められた。しかし監督のせいで暗礁に乗り上げちゃった。物語ははじまってもいない……。もしこの世界に神様みたいなのがいれば困ったろうな」

「神様あ？ あの”声”は神の声だったのか？」

「そうだ。おれたちは「パックの冒険」の物語のつづきを演じるようにこの世界につれてこられたんだ」

「ど、どうして……？」

市川の問いに山田は馬車から首をのばし、馬上の三村のほうを見つめた。三村は山田の目つきに「え？」というような表情になる。

「三村くんの身につけているのは主人公のパックの装備だろ？ キヤラクター表にあったやつとそっくりだ。おれたちが身につけているものも、パックとともに冒険する仲間のものだ。どうしてそんなことになるんだ。結論としては、きみが主人公のパックなんだ。そしておれたちはその仲間さ」

山田の話しにいつのまにか馬車の中でお姫さまと同乗している洋子も、そして市川のうしろで馬に乗っている三村も耳をすませていた。山田はつづけた。

「あの竜にむかって三村くんは無謀にも突撃したな？」

自分の名前がでて、三村は顔をあげた。

「おれたちもついあとを追った。ふつうなら絶対そんなことするわ

けない。しかしからだは勝手に動いてしまった。なぜだ！　そして竜は死ぬと蒸発ししまった。あの……コーラさん、ちょっといいですか？」

コーラ姫は車内でびっくりした顔で山田を見上げた。

「なんででしょうか？」

「あの竜はどうして消えてしまったんです？」

「どうして、と言われても……あれは魔王の眷属ですわ。魔王の手下は死ぬと死体ものこさず消えてしまうものです」

「ははあ……それがあたりまえなんですわね」

「そうです。それがなにかあなたのさつきからおっしゃっていた、神様のことと関係するのでしょうか？」

「さあ……しかしわれわれは本来、この世界にいるべき者ではないということは確かです。だからわれわれがなにかこの世界でなしとげれば、もとの世界へ帰れるんじゃないかと思うんです」

「あの山田さん、ちょっといいですか？」

三村が口を開いた。

「なんだい？」

「これに木戸監督はどうかかわってくるんです」

「ここに監督はいない。目覚めたときもいなかった。そうだな？」

「ええ」

「ということは監督には監督の使命があるんだと思う。木戸さんもたぶんあの場にいたからおれたちと一緒にこの世界につれてこられたんだらう。しかしおれたちのなかにいないということは、べつのことをさせられるんだらうな」

「でもなんでこんなことに……」

「おれはSF小説が好きで、よく読むんだがそのなかに多元宇宙ものというやつがあるんだ。もしもヒトラーが第二次大戦で勝利したら、とか信長が本能寺でしななかったらというやつだ。そうならそれ以降の世界はまったくちがったものになるだらう。だからおれたちがいまいる世界はその多元宇宙のひとつじゃないかと思うん

だ。ただしここは木戸監督の頭のなかから生まれたというのがユニークだけだね。しかし木戸監督は物語の終わりまできちんと終わらせないままほうりだしてしまった。だからおれたちがよばれたんだと思う。「パックの冒険」の物語を終わりまでつづけるように。だからおれたち習ったことのない剣術や、馬術を身につけているんだろっ」

「木戸さんはどうしてるかな……」

「コンテ描いていたりして……」

三村の言葉にみなどっ、と笑った。

木戸（前書き）

五人のうち木戸監督だけ別の場所で目覚める。そこでのかれの役割は……？

木戸

暗闇。

べったりとした黒一色がそこを支配していた。

木戸はその黒一色の世界で立ちすくんでいた。

ここはどこだろう。

なにも見えない。

いや、自分の体は見える。見下ろすと、自分の両手と足元が見えた。が、踏みしめているはずの床はまったくの黒一色でなにも見えない。かれはひざまづき、床を手探りしたが、手に帰ってくるのはつるつるした感触だけである。

「おーい……」

こころぼそくなつた木戸は思わずさげんだ。しかし声は反響のまったくない空間にすいこまれかえって不安がました。

思わずかれは駆け出した。

はっはっはっ！

懸命に足を回転させているのに足音はまったく聞こえない。

そのうち息があがつて立ち止まってしまった。汗がどつと全身からふきだし、かれはぺたんとしりもちをついてしまった。

だめだ……すっかり体力がおとろえている。それでも学生時代、柔道で県大会まで出場したというのに。長年のアニメ業界でのくらしがすっかりからだをなまらせた。

「あんたなにやつとるのや……」

いきなり聞こえてきた”声”に木戸は飛び上がった。

「だ、だれだ！」

「わてのことなど、どうでもよろし……あんたにやつてもらいたいことがあるんや」

「おれに？」

「そつや、あんたのせいやで。こんなことするのはほんととはあかん

のやが、どうにもならんのや。だからあんたに責任をはたしてもらいたいんや」

「お、おれにどうしてもらいたいんだ？」

「あんた忘れたんか？ ほれ、神でも悪魔でもええからなんとかしてくれえ、と」

木戸はあの雷を思い出した。と同時にぞつとした。

「神でも悪魔でも……まさか！」

「わては悪魔やない。でも神様でもないな。まあそんなことどうでもええんや。ともかくあんたにはあんたの仕事がある」

「仕事？」

「そうや、あれを見い……」

まったくの黒一色の世界にぼ、と灯りがもった。
なんだろう。

木戸は目をほそめた。

なんだかひどく見慣れた光だ。

かれはふらふらとその方向へ歩き出した。

！

光をはなっているのは蛍光灯の光だ。

それも動画機の透過ガラスの光である。

そこには木戸が制作会社「タップ」で使っていた動画機があった。机には未使用のコンテ用紙がきちんと束になって積み上げられ、その横にはかれがいつもつかっていた鉛筆と消しゴム、それに鉛筆削りなどの文具がそろえられている。

「あんたの仕事、つづけてもらおうか。ここなら邪魔もいらんから、仕事がかどるやろ？」

「おれの仕事？」

木戸はおうむがえしにつぶやいた。

「そうや！ さっさと「パックの冒険」のコンテきらんかい！」

”声”の調子がかかった。あきらかに怒りをふくんでいる。木戸はうへ、と首をすくませた。

「あんたが物語の途中でほっぴらかしたせいでわてはえらい迷惑しとる。なんとしてもあんたにはこの仕事終わらせてもらいたい。さあ、すわりなはれ！」

ぎくしゃくと木戸は椅子にこしかけ、机にむかった。

ぼんやりとしている木戸に”声”は命令した。

「さあ、鉛筆を握って、そうそう、仕事が待ってるで……」

木戸は機械的に鉛筆を握り、コンテ用紙に相対した。

と、猛然と木戸は鉛筆をコンテにはしらせた。

どういうわけかあれほど苦労したコンテ作成が、いまは楽々ときる。前はアイデアを出すのに死ぬほど消耗したのだが、いまはあとからあとから「パツクの冒険」の場面が頭にわいてくる。ただそれをコンテに描くだけでいい。

木戸は一心不乱に描きつづけた。

姫君（前書き）

コーラ姫を救った三村、山田、市川、洋子の四人はドラン国の大公に歓迎される。そこでおきる事件が彼らを冒険の旅へ導くのだったが……。

姫君

「おお、おお、あなたがたが姫をお助けしてくださったのですな！」
コーラ姫の父親のドラン大公は涙でうるんだ目で手放して四人を歓迎した。姫の父親としてはかなり年寄りで、髪の毛はまばらで手は手探りするようしきりに動いた。ぐすぐすと鼻をならすとよちよちと歩いて三村の前になるとその手を握る。

姫に同行して一行はドラン公国の首都であるドラン城にきていた。ドラン城とはいえ、木造の館といった外観で、そのまわりを城下町がとりまいている。ドラン城にたどりついたときは夕方になっていた。馬車がちかづくとき城から兵士があわててとびだし、姫が姿をあらわすとかれらから歓迎のどよめきがあがった。

そしてまっすぐ城の謁見室に案内され、大公との対面となったのである。

どういいうわけかかれらは三村がこの一行の責任者としてみなしていた。話しかけるのはつねに三村で、ほかの三人は無視された。

「どうか食事をともになさってください。わがドラン公国はふけばとぶようなちいさな国ですが、一流のコックがそろっておりますぞ！」

そいいうわけでかれらは城の食堂へと移動した。

食堂には木のテーブルがあり、そのまわりに四人とドラン大公、そのとなりには姫がすわった。大公が手をたたくとドアが開いて召し使いの数人があらわれ、食事を用意した。

出されたのは肉料理となまの野菜が数種、それにワインであった。パンは直径数十センチほどもある巨大なもので、それをおもいおもいにナイフで切り出し、とりわけのだった。

「どうやら手づかみらしいな」

山田はつぶやき、野菜で肉をまいて口にはこんだ。

「うん、いける！」

それを見てほかの三人も料理を食べはじめた。

「三村殿はいずれのお国の若様でしょうか？」

口をもぐもぐさせながら大公は三村に話しかけた。

「え？」

三村はぼかんとした表情で顔をあげた。

「いや、ぼくはただの制作進行でして、若様といわれるような……」

「しかしあなたさまのマントの紋章はどう見ても王家のものです」「言われて三村はじぶんのマントをふりかえった。

「そう言われても……なんしろ目が覚めたらこの格好だったのだから、会話はしぜんとかれらがこの世界につれてこられたいきさつになった。三村の説明に大公はじつと耳をかたむけた。

「信じられないことですな。しかしあなたがたは姫の命の恩人、わたしでできることなら協力しますぞ」

「それならひとつお尋ねしたいことがあります」

山田が口を開き大公は眉をあげた。三村以外の人間が質問するというのがかれにとっては意外なことだった。

「なんででしょう」

「姫さまが竜におそわれたことについてなにか心当たりでもありますか？ あの竜はわたしたちに目もくれず、まっしぐらに姫の馬車を目指していたようですが」

布巾で口をふくと大公はため息をついた。

「魔王のしわざですわい！ この数十年、北方で魔王の軍勢が勢力をましているという噂がここまで聞こえてまいりましたが、ついにわが国までその魔手をのばしてきたというわけです。娘をねらったわけはただひとつでしょう。娘がさらわれたと聞けばわしだけでなく、わが臣民すべてが悲しみにくれます。魔王はその悲しみを糧にしてちからをますのです。ひとの絶望、悲嘆、憎しみを魔王は食らいます。北方にあるいくつかの国はすでに魔王によって征服されました。魔王はあらたな獲物をねらっているのです」

「その魔王というのは？」

「正体は不明です。ある日とつぜんあらわれ、北の山脈のおくふかくに城を築いたと聞いております。そこからは生き物を殺す瘴気にながれ、ゆたかだった北の大地はあれはてました。いままで何人もの冒険者が魔王をたおすために旅立ちましたが、ひとりとして生還したものはおりません。わが国からも腕自慢の勇者が旅立っていきましたが、その後たよりもなく、死んだものと思われております」

食事はすみ、食後のデザートになったが、魔王の話ですっかり場はしらけてしまった。その後、みんなは召し使いによって寝室へ案内された。山田、市川、洋子の三人はおなじ部屋で、三村だけべつの部屋に案内された。

「なんで三村だけ特別なんだ」

市川が頬をふくらませて口を開くと、山田がこたえた。

「たぶん、おれたちは三村の家来と思われているんだろっ」

「家来だって！」

市川はかつとなった。

「怒るなよ……、三村の身につけているのはかれらから見ると王族のものらしい。あの食事の席での大公の態度からもわかる。したがっておれたち家来だということさ」

「しかし……」

「まあ、まて！ とにかくおれたちの今後の行動を決めなくてはならない。どうすればもとの世界へかえられるのか考えなくては」

「魔王を倒すのよ。きまつてるわ！」

洋子の言葉に市川は目を丸くした。山田はうなずいた。

「おれもそう思う。たぶん、おれたち勇者のやくをあたえられているんだ。ほら、原作にも魔王が登場したじゃないか。大公の言葉ではあまりその正体はわからなかったが、原作でもそんな詳しくは描写されていなかった。おそらくあの漫画を描いた時点でも、木戸さんも魔王のことについては考えていなかったんだろっ」

「それにしてもずいぶん月並みな設定だな……ファンタジーならもうちょっと敵役の設定は凝るもんだぜ」

「しょうがないよ。原作がもともとそういう月並みな設定なんだから。でも月並みなら月並みでおれたちに勝機があると思っただい。相手が月並みな魔王なら、おれたちも月並みな冒険をすれば倒すことができるってわけだ」

「おれたちが倒せるとどうして思うんだ」

「そうしないと物語が完結しないからだよ。ファンタジーの終わりにはハッピーエンドになるというのが決まりだ。だからそのことについては安心していいんじゃないか？」

「それにしてもあたしたち、三村くんの家来ってのはひっかかるわね」

洋子はベッドにこしかけ、髪をいじりながらつぶやいた。あいかわらず彼女の身につけているのは最小限の布切れだけである。全員、城からは装備や服をあらたに提供されたのだが、彼女に提供されたのはまえに身につけていたような格好であった。洋子はだまってそれを受け取り着替えた。

そんな彼女をまじまじと山田は見詰めていた。その視線に彼女は気がついた。

「なによ、山田さん。変な目つきで見ないでよう」

「いや……」

山田は髭をしごきながらつぶやいた。

「気のせいかな、きみやせたんじゃないか？」

「え？」

洋子はぼかんと口をあけた。市川は山田の言葉に同意した。

「そっだ……なんだかプロポーションが変わったぜ」

「まさか……！」

洋子はたちあがり、部屋のすみにたてかけてある鏡の前にたった。全身を映してみる。

「本当……あたし、やせてる！」

彼女は頬をおさえた。

たしかに彼女のプロポーションは変わっていた。まえはどちらか

という太目のからだつきがすっかりとウエストがくびれ、胸の位置も高くなっている。さらに背も高くなっているようだ。」

「市川くん、あなたも変わっているんじゃない？」

「おれが？」

いきなり矛先がむけられ市川はびっくりした。

「ちょっと、じぶんの姿見てもらいなさいよ」

洋子は市川を鏡にひっぱっていった。鏡に全身を映した市川もぽかんと口を開けた。

「本当だ……おれはこんな体つきじゃなかった」

市川の餓死寸前という体つきは変化していた。それまでなかった筋肉がもりもりとついている。ぶあつい大胸筋、それに二の腕にも二頭筋がついている。さらに猫背がなくなり、背がぴんとなっていた。

「山田さんはどうなんだ？」

「おれかい？ べつに変わったようには……」

そう言いつつ山田は立ち上がった。

「あれ？ 市川くん、きみ背が高くなったか？」

山田は市川より頭ひとつ背が低い。が、いまはふたつぶんは低くなっている。さらに全体にまるみを帯びていた。

「おれ、ちいさくなっちゃった！」

山田は悲鳴をあげた。

「どういうことだ！」

三人は鏡のまえで立ちつくしていた。

「そうか、さっきおれが言った役割にあった体つきになったんだ……。おれはドワーフ族という設定なんだ……畜生！」

山田はどん、と床をふみならした。

「じゃ、おれたちはなんだい？」

「市川くんと洋子さんは戦士なんだよ。これからの冒険にむかうというのに運動不足のアニメーターの体じゃ不足なんだろう。この世界の神様はおれたちにどうあっても魔王退治をさせたいようだな」

市川と洋子は鏡の前でいろいろポーズをとってためすがめす眺め

ていた。ふたりともいまのじぶんにまんざらではないようだ。洋子はふと思いついたように口を開いた。

「あたしたちがこういう体になら、三村くんはどうなの？」
「ちよつとかれの部屋へ行ってみよう。まだ起きているだろう」

山田の提案で三人はどやどやと部屋を出て、三村にあたえられた部屋へ急いだ。

「三村くん……あれ？」

ドアを開けた市川は立ち止まった。

「いないよ」

「いないって？」

山田は市川のそばをすりぬけ部屋へはいり、あたりを見回した。

「いい部屋だなあ」

山田はあきれた。

三村の部屋は豪華だった。高い天井に大理石の暖炉。ベッドはどつしりとした天蓋つきの、カーテンがついたもので、そのほかに凝った彫刻をした調度がある。

「なあ、山田さん。さっきからこの城の中の様子、どっかで見たような気がするんだが、おれの気のせいかね？」

山田は苦笑いをした。

「気のせいじゃないよ。おれがこの城の美術設定をやってるんだ。ほら、打ち合わせの前に資料が渡されたろ。あのなかにあったよ」

「ああ、そうか……あ、ちよつと待った！」

市川はこん、と自分の額をたたいた。

「この城が山田さんの設定したお城ってことは、おれの設定したモンスターもこの世界にいるってことか……冗談じゃねえ！ あんなモンスターとおれたち戦うのかよ！」

「木戸さんはどんなモンスターをきみに発注したんだい」

「おきまりのスライムとか、昼間のドラゴン。それにオーク鬼とかそんなのだよ」

「待てよ、それなら魔王の設定は？」

「まだやってねえ。木戸さんは一話の設定を要求したからな。それでもリテークばかりでぜんぜん仕事がかどらなくてね……」

市川はぼやいた。

「それならまだこの世界に魔王はいないのかもしれないな。あの大公が魔王についてはいやにあいまいな言い方をしていたろ？ まだ設定がしっかりしてないから、詳しいことを言えなかったんだ」

「待て待て！ そんな無茶苦茶なことってあるかい！ それじゃこれからおれたちが戦う魔王を、おれたちが設定しないとならないってわけか？」

山田はうなずいた。

「そういうわけだ。おれたちが魔王と戦って退治しないとおれたちはこの世界からぬけられない。しかしそれには魔王をおれたちがしっかり設定しないとあらわれない。きみが魔王の絵を描いて、洋子くんがその色指定をするんだ」

「山田さんは？」

「おれは魔王の城の設定をするんだ。そうしてはじめて魔王がこの世界にはつきりとした実体をえることができる。それでやっとおれたちが魔王を退治できる、というわけだな」

「なんだよ、この世界に連れてこられただけじゃなくて、さらに仕事のつづきをしなくちゃならないのか？ やんなるぜ」

「あたしも頭にきた……」

洋子はぶらぶらと窓に近づいた。と、その顔色が変わった。

「ちよつと、こっち来てごらんないよ！」

そう言つと手招きをする。

「なんだい？」

「三村くんだわ……」

「ええっ！」

三人は窓枠に集まった。

窓は二階にあり、外は庭になっている。空には月がかかり、あたりに青白いひかりを投げかけていた。

三人が見下ろした先に噴水があり、そこを三村ともうひとりがそろそろ歩いていった。

「お姫さまじゃない……」

洋子はささやいた。

三村のそばを歩いているのはコーラ姫だった。いまは夜露をさけるためか手首まである長い袖のワンピースを着ている。頭にはさきがとんがった帽子をつけ、帽子のさきにはながいリボンがたれていた。彼女のスカートにはちいさな宝石が縫い付けられ、彼女の身動きにつれ、きらきらと輝いていた。

姫は噴水の縁に腰をおろした。

三村はたちどまり、彼女の顔を見下ろした。

「畜生……うまくやりやがって……」

市川はうめいた。

「三村くん、やっぱり姿が変化してるわ!」

洋子が指差し、市川と山田は目を皿のようにして注目した。

「本当だ。あいつも変わってる……」

三村の姿にも変化が生じていた。ひょろりとした姿はどことなくたくましくなり、髪の毛は肩までのびている。その髪の毛は前はぼさぼさだったのが、きちんと整えられ、さらにはやや茶色にそまっていた。全体に貴族的な風貌になっていた。

「あらら……本当に王子様だぜ!」

市川はあきれた。

「なぜ三村くんが王子様なのよ! 不公平だわ。あたしだってお姫さまの役がほしいわよ」

洋子は憤慨した。山田はうなずいた。

「それを言うなら、おれだってドワーフ族なんて役割はいやだよ……まあ、もとの世界に帰れば、もとにもどるんだろうが」

「あたし、もとの体重にもどっちゃうの? そんなのいやだなあ……」

「おれももとのガリガリにもどるのか」

洋子と市川は変化したじぶんの体を見下ろした。なんだか複雑な表情だ。

山田は両手をあげた。お手上げ、といったところか。

「お、いい感じじゃないか」

山田は顔を窓ガラスにおしつけた。

三人の見守るなか、三村はコーラ姫のとなりにすわっている。ふたりは噴水のそばでなにか語り合っているようだ。いつのまにか三村の手が、姫のせなかにまわっていた。彼女は頭を三村の肩におしつけ、月をみあげた。

「おいおい、どうなっちまうんだ……」

ふたりの語り合いはいつのまにかやんでいた。いまはぴったりと身を寄せ合い、ひとときの逢瀬を楽しんでいる。

「見てらんねえ……」

市川はくーっ、と両手を握り締めた。洋子はうつとりとその様子を見ている。

ふと庭に影がさした。

山田は空に視線をうつした。

月に雲がかかっている。

ひゅー……。

風がでてきたようだ。

「なんだかいやな予感がするぞ」

山田はつぶやいた。

「TVアニメじゃこういう場面になるとかならず……」

そこまでつぶやいたとき、あたりが暗闇につつまれた。

ごおっ……！

風がいきなり強く吹きつけた。

がたがた……がたがた……！

窓枠が風でゆれる。

ぴかっ！

稲光がひかり、ごろごろごろ……と、雷鳴がひびく。庭のふ

たりはいきなりの天候の変化にぼうぜんとしていた。

と、暗闇にわはははは……という笑い声が聞こえてきた。

「な、なんだ！」

市川はうろたえていた。

「もしかするとこれは……」

山田は眉をひそめた。

「きゃあっ！」

姫の悲鳴がひびきわたる。

「お姫さまが！」

洋子がさげんだ。

「行こう！」

山田がさけぶと部屋をとびだした。市川と洋子はあわててあとを追った。

「なんの騒ぎだ！ あの悲鳴は？」

一階の廊下でかれらは大公と出会った。大公は護衛の兵をつれているが、それまで眠っていたのか寝巻き姿だった。

「こつちです！」

山田は手招きをすると走り出した。みなかれのあとに続く。

中庭にはものすごい風がふきあれていた。夜空には稲光と雷鳴が轟きわたっていた。中庭の噴水近くに三村が空を見上げ立ちすくんでいる。

「三村くん！」

山田が呼びかけると、三村は蒼白な顔をねじむけた。

「あつ、山田さん。あれを！」

三村が指差す方向をみな見上げた。

あつ、と全員が口を開けた。

まるでそこは竜巻を下から見上げたかのようなだった。旋風が渦をまき、上空へ漏斗のような口を開けている。そのまんなかにコーラ姫が空中に浮かんでいた。

「姫が……」

大公がうめいた。

コーラ姫は気絶している。ぐったりと全身のちからをぬき、手足を投げ出して空中に浮かんでいた。そのからだがしずしずと上へ登っていく。

「コーラ姫はもらったぞ……！」

その声は全員の耳に届いたようだった。雷鳴の轟音のなかでもその声ははっきりと聞き取れた。

「姫！ 姫！」

大公はおろおろと運ばれていく姫を見上げ、その両目から滂沱と涙を流していた。

「くそ！ 魔王め！ なんていうことだ！ ええい、だれか、だれか姫を助けてくれ！」

大公は地団太をふんだが、姫の体はなすすべもなく持ち上げられていく。やがてちいさくなり、渦を巻く雲の中へ隠れてしまった。

……。

いきなり嵐は来襲したときとおなじくぱたりとやんでしまった。

静寂が襲い、気圧の急変で耳がぼん、と鳴った。

月のひかりがぼうぜんとしたままの一同の姿を浮かび上がらせる。へたへたと大公はすわりこんでしまった。そのまま顔を手でおおい、すすり泣く。

「おお、なんていうことだ……姫がさらわれるとは……」

「大公殿！」

その大公に三村が呼びかけた。大公は「え」という顔でかれを見上げた。三村の表情にはいままでなかった決意があらわれていた。

「コーラ姫はぼくがかならずお救いします！ 約束します！」

わくわくと大公は唇をふるわせた。そのまま膝でいざると三村の手をとった。

「お願いいたす！ ぜひ、姫を救ってください！ も、もし姫を救つてくださるならそのときはあなたを姫の許婚としましょう！」

「大公殿！」

みな大公の言葉に仰天していた。

旅立ち（前書き）

姫君を救うため旅立つ一行。いよいよかれらの冒険が始まる！

旅立ち

翌朝、一同は旅支度をととのえ、城の中庭に集合していた。大公はかれらに馬と、実用的な馬車を貸し与えた。馬車の中には食料がつまれ、あらたな武器が城の武器庫から運ばれていた。

今朝の三村は全身白づくめの衣装に身を固め、乗馬もまっしろな毛並みのものだった。朝の陽射しに照らされたかれはまさしく白馬の騎士といってよかった。甲冑は銀色に白の紋章が浮き彫りにされ、陽射しをうけるときらきらときらめいた。

馬に乗るのは市川と三村のふたりで、馬車の御者台には山田と洋子が座った。山田は手綱をにぎり、馬車を出発させた。大公は出発する一行を城の正門からいつまでも見送っていた。

礫碌と車輪が道の小石をふみ、馬車の前には三村が先導して馬を御している。市川は馬を山田のちかくへ寄せ、話しかけた。

「なんであいつだけ特別あつかいなんだ」

市川は三村の雄姿を見上げばやいた。市川のとなりで馬車を御している山田は巨大な手斧を背負い、分厚い盾をかかえている。三村のまばゆいばかりの衣装にくらべ、ほかの三人はどちらかというときずんだ色合いの装具をあたえられている。

「まあそういうな。あいつはお姫さまの許婚なんだから」

山田がそう言うとき市川は頭をふった。

「お姫さまをもし救うことができたなら、の話だぜ」

「それは間違いない。おれたちはかならず魔王を倒すことができる」

山田の確信にみちた口調に市川は二の句が告げない様子だった。

山田は刻々とじぶんのなかでふくらむ確信にひとりうなずいていた。かならずじぶんたちは魔王を倒すことができる！

そうでなくてはならない。

それとも違うのか？

山田は先頭で馬をすすめている三村に話しかけた。

「三村くん、きみずいぶん堂々としていたな。あそこで大公に見栄をきるなんて、思ってもいなかった」

三村は山田をふりむいた。眉があがり、不審げな表情になっている。

「ぼくが？ そんなこと言いました？ 覚えてないですねえ」

「きみ……」

山田は絶句した。そんな山田に市川は声をかけた。

「それよりお姫さまだよ。あれからどうなったんだろう」

「魔王にさらわれたことはまちがいないな」

「無事なんだろうな。おれたちお姫さまの救出にむかうんだろう？」

かんじんのお姫さまが無事じゃないなんてこと、ないだろうな」

「それはないと思うよ。おれたちが助けてエンディングとなるはずだ」

「それで三村がお姫さまと結婚してめでたしめでたしか。おい、そうなると三村はこの世界にのこるってことになるのか？」

「う……」

それは考えていなかった。山田はいまお姫さまがどうしているんだろうと思った。

「ごおおと風の音が聞こえている。

コーラ姫はようやく目をさました。

なにがおきているのか？

「！」

眼下に見える景色にコーラ姫はぞつとなった。

宙を飛んでいる！ それもおそろしい速度で。風の音はそれだったのだ。

悲鳴をあげようとしたが、声は喉のおくでふさがってしまった。彼女はふしぎなちからで宙に浮いていた。頭を進行方向にむけ、うつぶせの姿勢である。見開いた目に、つぎつぎと飛び去っていく地上の景色が見えていた。

進行方向を見ると、地平線ちかくの右横に朝日が昇ってくるころだった。とすれば、いまは東にむけて飛んでいるのだろうか。いや、この季節では太陽はやや南よりにのぼる。ならば北東か。

太陽が地平線から顔をだし、あたりは急速にあかるくなっていた。

寒い。

ぶるっ、と姫は腕をくんでじぶんの胸をだきしめた。

空気が冷たくなっている。

ここはどこだろう。まるきりあたりの景色におぼえはなかった。とりあえず落下することはないようで、彼女はやや落ち着いていた。進行方向に巨大な山脈がそびえていた。彼女はまっすぐその山脈に近づいていた。頂上ちかくには万年雪がしろくかがやいている。じつとその山脈を見つめていると、それはぐんぐんと近づいてきた。このままではぶつかってしまう。

恐怖に姫は目をとじた。

が、ぐうん、と全身が上昇する感覚があって彼女は目をひらいた。山脈が眼下をながれていく。どうやら危機は回避するようになっていくようだ。

姫はさらに上昇していった。すでに雲のうえにたっしていた。

と、姫は呼吸がくるしくなっていることに気づいた。どういうわけか空気がうすくなっているようだ。高度が上がると酸素の濃度がさがるという知識をもっていないため、彼女は不安で押しつぶされそうになっていた。

はあはあと呼吸がはやくなっている。どくんどくとこめかみあたりに血管の血流の音が聞こえている。苦しい、このままでは死んでしまう！

姫の意識はとぎれた。

つぎに目覚めたときはあたりは闇につつまれていた。

手に床らしきかたいものがふれる。

となるといまは宙を飛んではいけないのか。

彼女はふらふらと立ち上がった。

あれほどの寒さがいまは消えている。

いや、どちらかというと生暖かい。空気には奇妙なおいがあった。けっして不快ではないが、ねっとりとしたなまぐさいにおいである。どちらにしても鼻をつままれてもわからないほどの暗さだ。あたりになにかがあるかわからず姫は手を前にのばしてそろそろと歩き始めた。

なぜこんなに暗いのだろう。

そのとき姫はある考えに思い当たりぞつとなった。

あたりが暗いのではない。彼女の目が見えなくなっているのでは？

「そりゃ、ちがいまつせ」

だしぬけに”声”が聞こえ、姫はとびあがった。

「だ、だれです？」

「わてのことなどどうでもよろし。それより、お姫はん。あんた、じぶんが目が見えなくなつたと考えているようでおますが、そりゃちがいまつせ。たんにここにあまりがないちゅうこつてすわ」

「あなたはわたしの考えていることがわかるのですか」

「まあ、それくらいできまつせ。まあ、ちょっと待っておくれやす。いまあかりつけまつさかい、目をいためなくなつたら、目をとじていたほうが利口やな」

姫は”声”の忠告にしたがつて目をとじた。

目の奥に瞼ごしの赤い色がひろがった。あかりがともつたらしい。姫はそのままじつとしていた。やがてうすく瞼をひらいた。

ぱちぱちと目をひらき姫はあたりを見回した。

そこはドームのようなところだった。だたっぴろい空間にまつたいらの床が目のとくかぎりひろがっている。半球型の壁がたちあがり、天井近くに光源があつてあたりをてらしていた。

「ここはどこですか？」

どこですか……

どこですか……

姫の声はドームに反響してこだました。

「どこ……ちゅうても、ひとことでは言いにくいな。まあ魔王の城、と言うといたほうがちかいか。いや、いずれ魔王の城になる場所かな」

”声”はいやにあいまいな言い方をした。姫は眉をひそめた。

「ではあなたは魔王なのですね」

「ちやうねん。わいはただの管理者やねん。この世界があいまいなままやから、わてがこんなことせならんちゅうこっちゃ。ほんまはこんな、お姫さまを誘拐するなんちゅうことしたくないんやが、切羽詰っておるねん。あんたの安全は保障するから、安心しとくれなはれ。いずれ三村はんがあんたを救いにくるはずや」

三村の名前を聞き、姫はわれしらず顔をあかくそめた。

「三村さまが……」

「ほ！顔をあかくしよった。あんた、三村はんにはれとるな」

コーラ姫はかつとなった。

「無礼な！わたしはドラン公国の姫ですよ！」

「ああ、すまんこっちゃ。かんにんしとくれやす。つい、わての悪いくせがでてしもうた。とにかく三村はんがくるまで、あんたはここで待っててほしいんや」

「待ちましょう。しかしこれでは……」

姫はあたりをさししめした。

「家具もなにもないではないですか。これでは生活できません」

「すまんなあ。まだ山田はんが魔王の城を設定しておらんので、わいは魔王の城の予定地を提供するだけがせいっぱいなんや」

「そんなことわたしの知ったことではありません！わたしにふさわしい生活環境を整えてくれないならすぐ出て行きます！」

コーラ姫はとんとんと床をあしぶみした。”声”はあきらめたような調子になった。

「わかった、わかりました。そんならなんとかしまっさかい、どういう風にすればええのか教えてくれなはれ」

「まずベッドです。布団は絹で、鷺鳥の羽をつかってください。枕はそば殻でないと眠れませんよ」

と、姫が言い終わらないうちにベッドが出現した。姫が城で使っていたようなベッドだった。姫はベッドのはしに腰かけた。布団はふわりと彼女の体重をうけとめた。彼女はしばらく布団をまさぐった。手触りは絹にまちがいがなかった。まぼろしではない。

コーラ姫は顔をあげた。

その表情はいたずらっぽいものになっている。

「なるほど……それではつぎは食事をするための食堂が必要です」
巨大なテーブルに背もたれつきの椅子があらわれた。テーブルにはまっしろなテーブルクロスがかけられていた。

「食器はわたしが城でつかっていた銀の食器を……」
銀器が出現した。フォークとナイフもついている。

「つぎはわたしにつかえる女官が必要です」

エプロンをつけたメイドがあらわれた。彼女は姫のまえにすすみでると深々とお辞儀をした。姫はおおようにうなずいた。

さらに姫は要求をつづけた。

仕事（前書き）

奇妙な冒険をはじめた一行は、ついにじぶんたちの使命を知ることになる。かれらの使命とは？

仕事

「もう三日も旅をつづけてるぜ！」

夜になってキャンプを張って、食事の用意をしていた市川はぼやいた。

「なんだか風景もかわりばえしねえし、おなじところをぐるぐる回ってるんじゃないかと思えてきた……」

実際その通りだった。一行はまっすぐ北にむかう街道をたどってきたが、いつまで進んでもなだらかな丘に森が点在する風景がすみ、変化というのがほとんどない。

「いつになったら魔王の城へつけるんだ」

「城がどこにあるかもわからないんだぞ」

山田は手斧をつかって粗朶を切り落とし焚き火の用意をしてこたえた。

「とにかく北の方向へいけばいいんじゃないですか？」

三村がこたえる。山田は首をふった。

「そう簡単にはいかないよ。いきなり魔王の城にたどりつくなんて、そんなシナリオいくらなんでも安直すぎる。たぶん、どこかの町か村で魔王の城にかんするヒントを手にいれることになるんだろう」

「あんたの言うことを聞いていると、おれたちただのアニメのキャラクターだってことをいやでも思い起こされるよ。それともRPGなのかな。それにしてもどこかの町か村って、どこにあるんだい？」

「それだ。そろそろおれたち本来の仕事をすべきじゃないかな」

「どういうことだい」

「だからつぎのヒントをもらう村の設定をすべきだろうということさ。おれがその村の美術設定を描くから、市川くんはその村にすむ村人のキャラを描いてくれ」

「それでどうなる？」

「そうすれば、その村がこの世界に生まれと思うんだが。まあば

かばかしいとは思うが、やってみよう」

「でも紙も鉛筆もないんだぜ。道具がないのにどうやって描けるんだ？」

市川の言葉にこたえるようにあの”声”が四人の耳にひびいた。

「それについては心配いらん……」

「わっ！」

全員、とびあがった。

「山田はんのいう通りや。わしはあんたらにこの世界で冒険してもらいたい。ついでに物語つづけるための設定も、あんたらに頼みたいんや」

「あんただれよ！　なんであたしたちをここに連れてきたのよ！」

洋子は宙を見つめどなった。

「はやくあたしたち、もとの世界へ返してちょうだい！」

「だから山田はんの言ったことは正しいと言うつるやないか。あんたらに物語のつづきをやってもらいたいんや。それで魔王を倒せば、もともにもどるから……」

「冗談じゃないわ！　そんなの、ほかのだれかがやればいいのよ！」

「そういうわけにはいかんのや。もともとこの世界をつくるきつかけは木戸監督やが、あのおひとは物語をつくる才能はあまりないよやな……。そのため、この世界がでけたんやが、どうにも宙ぶらりんだな……。それであんたらに助けてほしいのや」

「どうすればいいんだ」

山田がさげんだ。

「あんたがさつき言ったやないか。設定を描いてくれ！　そうすれば、この世界におなじものが実在することになる」

どさり、という音に全員はふりかえった。そこにあったものを目にし、全員ぽかんと口をあけた。

「紙と鉛筆だ。それに消しゴムもあるぞ」

ちかよってそれらを手にして山田はつぶやいた。

「道具はわたしだ。たりなくなったら、また用意するからまああ

とはあんたらうまいことやってくれや。じゃ、さいなら」

「あつ、ちよつと待ってくれ！ まだ聞きたいことが……」

山田はさげんだが、”声”がふたたび聞こえることはなかった。

市川は紙と鉛筆を山田からうけとると肩をすくめた。

「はいはい、わかったよ。それじゃはじめるか。おれが村人のキャラ設定だな。村ってことは村長とかがいるわけだな」

山田はうなずいた。

「そうだ。その村長がおれたちに旅のヒントをくれるわけだ。そうだな、ついでに学者っぽいキャラもたのむ。村長より、そっちのキャラが知識がありそうだ」

「山田さん、その村の美術設定なんだろう。だったらその村にちょっとは楽しみみたいなものがほしいな。たとえば酒場とか……」

山田はにやりとした。

「カジノ、売春宿とかな！」

「あんたたち、なに馬鹿なことやってんのよ！ まじめにやりなさいよ！」

洋子がかつとなつてさげび、市川と山田は首をすくめた。

「それじゃ、ぼくは食事の用意をしますから」

三村はそう言うつと焚き火のうえに鍋をかざし、なかに食料をいれはじめた。やがてぐつぐつという音とともにいいにおいが漂ってきた。三人は無言で焚き火のあかりで紙に鉛筆をはしらせていた。

「できた！ ラフだけど、まあ設定としてはこれでいいだろう」

山田はつぶやくとじぶんの描いた村の美術設定をひろげた。市川もキャラクターの設定がおわったようだ。そのふたりを見て洋子は腕をくんだ。

「で、あたしはなにすればいいわけ？」

山田はキャラ表を洋子にわたした。

「そりゃやつぱり、色指定だろう。きみ色番号だけで色指定できるだろ？」

「できるけど、自信ないわよ」

そう言いながら洋子はてばやくキャラ表に色指定をいれていく。

「市川くん、あんたやつぱり……」

洋子は市川の設定したキャラ表を前にしてため息をついた。そこには肌もあらわな美少女が、色っぽいポーズをとっている。その衣装は、どう見ても踊り子か、売春婦といった格好である。

「いいじゃねえか、ちよつとはこの冒険に楽しみがほしいよ」

「でもねえ……」

「いや、市川くんの考えはただしいかもしれないぞ」

山田がわってはいった。

「どういうことよ」

「つまりこの世界がTVシリーズの世界だとすると、登場人物がおれたちだけじゃ話が進まないだろう。こういったキャラが登場することにより、ストーリーに変化がでるということもある」

市川はじぶんの設定したキャラ表を見直してつぶやいた。

「しかしずいぶん簡単に描けたなあ。ラフとはいえ、さくさくできたぜ」

山田は目をむいた。

「そうだよ……おれも妙だと思ったんだ。いつもはこんなに早く仕事がおわることもなんかないのに、今度は頭の中に勝手にイメージがわいてくるみたいだった」

山田は頭をふった。

「まったく、妙なことになった。木戸さんはどこでなにをしてるんだ」

「おれ思っんだが、木戸さんもおれたち同様、監督としての仕事をさせられているんじゃないのかな」

三人は市川の口元を見つめた。注目を集めた市川は頭をかいた。

「いや、おれたちがこんなことしているってことは、木戸さんも同じようなことになってるんじゃないかと……」

山田はうなずいた。ふと気づいてじぶんの手に持った設定書を見つめた。

「さて、描き終わったけど、これどうすればいいんだ……。ま、いちおう三村くんにあずけとこうか。せつかく制作進行がいるんだから」

「はい、わかりました」

山田の言葉に三村は苦笑いして受け取った。

「あつ！」

三村がさげんだ。

なんとかれの手に持ったキャラ表と美術設定がふらふらと空中に舞い上がり、そのまま夜空に溶け込むように消えてしまった。

四人はぼうぜんと空を見上げていた。

「どういこうった？」

市川は山田のくちもとを見つめた。

「おれだって説明つかないよ」

山田は首をふった。

木戸はようやく一話めの絵コンテを描きおわり、ふっと息をついた。

なにかにとりつかれるようになれば絵コンテを描きつづけ、木戸にしてはあつという間に仕上がってしまった。ほとんど描き直しをすることもなく、一気呵成に一話ぶんの絵コンテを描くことができるとは信じられなかった。何度か見直してみたがぜんぜん書き直す必要はない。

その間空腹を感じることもなく、トイレに行きたいとも思わなかった。それに木戸は一日に五箱を空けるヘビースモーカーなのだが、一本も煙草を吸いたいという欲求はおきなかった。

「おい！」

木戸は暗闇にさげんだ。

「終わったぞ！ 第一話の絵コンテ描き終わったんだ！ なあ……おれの仕事はこれまでだろ？」

「いいや」

”声”が聞こえた。木戸はびくつ、と震えた。

「まだや……あんたの仕事はまだすんどらん」

「すんでいないって？」

「そうや。この「パックの冒険」の物語、終わりまで仕上げてもらわんと」

「全話の絵コンテを描けつてのか！」

「あたりまえやろ。あんた、このシリーズの総監督でしかも原作者や。さいごまで責任もたんとあかんで」

「そんな……ワンクールぶんの絵コンテを描けつてのか？ いったいつまでここにいなきゃならないんだ」

ワンクールとは十三週のことである。4クールで一年分になる。

「パックの冒険」の企画はあととDVDなどになることを見越したミニシリーズで、ぜんぶで十三本制作されることになっていた。

「時間はなんぼでもある」

「でも……でも……キャラ表もないし、美術設定もない。その打ち合わせもしていない状態でどうやって描けつていうんだ」

「これを見い」

ひらり、と空中から数枚の紙が出現した。その紙はひらひらと空中を舞って、木戸の机に舞い降りた。木戸はその紙を見て仰天した。「あれ、こりや市川くんのキャラ表と山田さんの美術設定じゃないか。それにこりや、つぎの話しておれが考えていた村とその登場人物だ……」

「それで描けるやろ」

「ま、まあ……」

「そのキャラ表と美術設定にあんたのOKサインをいれてもらおうか」

「なんでそんなもの？」

「まあ、それが決まりやからな」

木戸はふらふらと鉛筆をとると数枚の設定書にサインを書き入れた。

そのとたん、もうぜんと絵コンテを描きたいという意欲がわきがった。

あらたな絵コンテ用紙の束をとると、木戸は書き始めた。

エレン（前書き）

ようやくつぎの町へついた一行は、山賊のエレンと再会する。船に乗る手配をしたかれらは町の人間の奇妙な対応にとまどうことになるのだが……。

エレン

トランプトンの町はまさに港町だった。

海に面した入り江にごちゃごちゃとさまざまな家がたちならび、そのあいだを木の栈橋が道路がわりにつながれている。家を建てられる平坦な土地がせまいため、いきおい家々は三階建て、四階建てと上へのび、さらにそのうえにあらたな家が建てられていて、そのあいだを通路が空中をつないでいた。船はその家のあいだの水路におしこめられ、ひしめいている。

町の入り口には木の柵があり、その上には兵士が弓をかまえている。

四人が町の入り口に近づくと、見張りの兵士が誰何した。

「われわれは旅のものです。船に乗りたくてきたのですが」

山田が兵士たちに説明すると、それまでふさがれていた入り口の扉が観音開きにあいてなかから数名の士官があらわれた。かれらは疑い深い視線で四人をじろじろと眺めた。

そのなかのもっとも身分が高そうな士官が口ひげをひねりながら口を開いた。

「ふむ、トランプトンにようこそ。わしは警備隊長のグラントという。まあ、立ち入りは許可するが、面倒をおこすことは許さんぞ。われわれはよそ者には特に注意しているからな」

洋子は山田のとなりの御者席でぶつ、と頬をふくらませた。

「なによ、あの言い方。まるであたしたち、犯罪者だと思っているみたいね」

「よそ者はつねに犯罪者である可能性があるのだ！」

洋子の声が聞こえていたのか、グラントは声をはりあげた。

「この町は港町であるため、つねによそ者が立ち入りやすく、いきおいそのなかには捜査の手をのがれるためここに流れてくるやからがおおい。だからわれわれとしてもつねに警戒しているのだ。わか

つてもらえたかな？」

「わかりました」

山田はおとなしくうなずいた。ここで面倒をおこすつもりはない。グラントは尊大にうなずくと立ち去った。山田は手綱をにぎって馬車をすすめた。全員が門をくぐると、数名の奴隷が門の開閉装置を動かし、門扉がゆつくりとともに戻った。

町に入るとすぐに馬車や馬の預け場がある。なかから兵士たちとびだして立ちふさがった。

「とまれ！ トランプトンの町に騎馬や馬車ではいつてくるものはかならずここでじぶんの乗り物をあずけなくてはならない。これはきまりだ！ 預け料は無料だが、三ヶ月回収にこなければ没収となる。その条件でよければ預かるがどうだな？ 預けなければ、これいじよう町の中にはいることは許されん」

四人はその条件をのみ、木札でできた預り証をもらった。その預り証をわたせば、馬や馬車が返却されるしくみである。

「なーんか、いやな雰囲気！」

洋子はつぶやいた。市川もうなずいた。

「ああ、同感だ」

町のなかをすすむと、あたりは剣呑な雰囲気になってきた。昼間だというのに立ち並ぶ家々のおかげであたりはうすぐらい。そこらには地面にべったりと腰をおろし歩きさる四人にじっと視線をはずさず見送っている人々がいる。それらの視線はするどく、まるで獲物をねらう猟犬のようである。これみよがせにナイフをちらつかせたり、あるいはわざとらしく笑いかける男もいる。あたりには悪意が手に触れられそうにたちこめている。

「こりゃ、あの警備隊長がおれたちに言ったことも理解できるな。

おれがこの町の住人だったら、よそ者は警戒してあたりまえだ」

市川の言葉に山田はうなずいた。

「こうなったら早く船を見つけて、さっさと町をおさばりたいよ」
「あ、あっちが棧橋らしいですよ」

三村が指差す方向を見ると、なるほど帆船が数隻、棧橋に接岸している。みな山田が昨夜設定したような外輪をもつ蒸気帆船である。何隻かの船には船員が甲板で荷おろしや、あるいは積み込み作業を忙しげにおこなっている。

接岸している船の中でもっともおおきな船に四人はちかづいた。

その船はほかの船とはなれた棧橋にぼつん、と接岸していた。棧橋でロープをかたづけられている船員に山田は船の名を聞いた。

「ありゃクマリ号でさ。船長はタバンといって、このあたりじゃ知られたひとだ。あんたら、あの船に乗りたいのかい？」

「ええ、目的地がわれわれと一致すればね」

ぶつ、と船員はくわえていた爪楊枝をはきだし、あたらしい爪楊枝をくわえた。

「そうかい。まあ、クマリ号なら安心だ」

そついうと、船員は目をそむけた。語尾がふるえていた。

四人は船員に礼を言つて船に近づいた。

甲板では船長らしき人物が積み込み作業を指揮していた。帆船に滑車をつなぎ、ロープで棧橋から荷物を積み込んでいる。かれがタバン船長だろう。

でつぶりと太ったからだつきで、着ているのはひざまで丈があるフロック・コートだった。頭には船長の帽子をななめにかぶり、顔はもじやもじやのひげでおおわれている。片目には眼帯がつけられ、口にはコーン・パイプをくわえていた。そついった格好は、どう見ても海賊の親玉そのものである。

「こんにちわ」

山田が挨拶をすると船長はじろりと四人をにらんだ。
無言である。

「あの、この船の船長さんのタバンさんですか？」

山田がそついうとかれはうん、とうなずいた。

「あのう、この船の目的地を教えてくださいませんか」

「北の大陸だ。明日、出港の予定だが」

船長の口調はうつろで、なにか台詞を棒読みしているような感じがなさがあった。が、タバンの返事に四人は顔を見合わせた。なんと好都合なことか！

「それならわれわれの目的地でもあります。四人分の船室はありますか？」

うん、とうなずいたタバンは疑わしげにこたえた。

「ああ、あるとも。しかしあんたら、本気で北の大陸へゆくつもりかね？」

「ええ、それがなにか」

「それならなにも言うまい。わかっているだろうが、あっちじゃ魔王の軍勢とやらがうじゃうじゃいて、安全は保障できないよ。まあ、おれはあっちへ荷物をとどけるだけだからすぐひつかえすがね」

「それで結構です」

三村船の甲板に棧橋から渡された板の橋をつかってあがると船長に四人分の船賃を前払いした。金を勘定して、船長はうなずいた。

「いいだろう。出港はあすの夜明けになる。おくれても、おれは待たないからそのつもりで」

棧橋をはなれ、四人は宿屋のあつまっている通りへ移動した。

「さてと、船の予約もすんだし、あとは宿でねるだけだな」

山田が両手をすりあわせた。市川はにやりと笑いかけた。

「なあ、みんな。どうせ明日の夜明けまでやることないんだろう？」

そんならちよつとこれでもどうだい」

そういつと市川はカップをかたむけるしぐさをした。洋子は首をふった。

「あんだ、そんなに飲みたいの？」

「いいじゃねえか。ここ数日、ぜんぜん飲んでないし、だいいち北の大陸とやらに行くことになったらいつ飲めるかわからねえからな。そうだろ、山田さん」

市川の言葉に山田もうなずいた。

「おれも賛成だ。三村くん、きみはどうだ？」

「いいすよ。ほくもこの世界の酒のあじになれてきたところですから」

「しょうがないわねえ。じゃあ、つきあってあげるわ」

そういうことで、四人は肩をならべて歩き出した。

宿屋がならんでいる通りにでると、両側からいつせいに客引きがわつとばかりに集まってきた。

「お客様！　こちら親愛なる海賊亭でございます。うちでは食事つきで一晩おひとり十ゴールドでございますよ！」

「こっちのクラーケン亭では一階で踊り子によるショーをやっておりますです。いまならライندダンスがお楽しみになれますです！」

「まてまて、うちではおやすみ前にマッサージのサービスつきですよ！　旅のおかたにはたいへんご好評いただいておりますよ！」

客引きのため四人は立ち往生してしまった。山田はかれらのあいだをかきわけ両手をあげた。

「待ってくれ、おれたちは夜明け前にクマリ号に乗るんだ！　だから一晩だけでいいんだ」

その言葉がおわらないうちに客引きの表情がかわった。気まずい空気がながれ、かれらはおたがいの顔を盗み見てそろそろとあとずさった。

「あ、あの。あんたがた本当にクマリ号に乗りなさるのかね？」

ひとりの六十がらみの客引きの老人が山田の顔をのぞきこむようにしてたずねた。山田はうなずいた。

「ああ、そうだよ。それがなにか？」

「い、いや、なんでもねえ……」

そういうとその客引きはそそくさとその場を立ち去ってしまった。それを見て、ほかの客引きもいつせいにその場をはなれていった。

あとに残された山田と仲間たちはぽかんとそれを見送った。山田は三人をふりかえって口をひらいた。

「いったいどうなってんだ？」

洋子は肩をすくめた。

「さあ、とにかく宿をきめないと」

四人は宿屋街で部屋をとるため歩き出した。
が、どの宿屋も四人がすがたをあらわすと部屋がないと答えるのだった。

「どういうわけだ。これで十件目だぜ」

市川は憤然となった。四人が宿泊を断られた宿屋をでたすぐあとで、ひとりの旅人が部屋の予約をとったところを目撃してあぜんとなっていた。

「宿屋が部屋があるのに部屋がないと嘘をつくなんて……」

山田はひとりうなずいた。

「どうやらおれたちのことが噂となつてぱつとひろまったらしいな。とにかくクマリ号に乗り込むということがまずいらしい」

「そういうこと！ あんたら、ほんとうにクマリ号に乗り込むつもり？」

女の声に四人はふりかえった。

そこに立っていたのは女盗賊のエレンだった。

あいかわらず裸同然の衣装を身に着けている。

「あんたは……」

三村が問いかけるような表情になると彼女は不機嫌そうな顔になった。

「なんだい、あんた。あたしの名をわすれちまったのかい？」

「いや。たしかエレンとかいったな。ぼくたちになにか用かい」

「この町にあんたらのうわさがひろまっているからね。それで顔を見に来たというわけさ」

「金はクマリ号に払っているからもうないよ」

「ちがうって！ あんたの金はもう狙わないことにしたよ。それより、ほんとうにクマリ号に乗って、北の大陸にいこうっていうのかい？」

三村がうなずくとエレンはにやりと笑った。

「やっぱりね！ まったくあんたら命知らずというか、宿屋に断ら

れるのもあたりまえさ」

「どうしてクマリ号で北の大陸に向かうのがいけないんだい」

「教えてほしいのかい。それなら一杯、おごってもらおうか。いい酒場があるんだ。それに宿もとってやるよ。あたしが口を利けば、なんとかなるよ」

三村はほかの三人と相談した。

「どうします」

「このさいだ。まんざら知らないなかじゃないしな」

市川はにやにやしていた。

「まったく定石どおりってやつだな」

山田はうなずいた。

「いいよ。あの女盗賊に世話になろう」

三村はエレンをふりかえった。

「案内してくれ！」

エレンはうなずくと歩き出した。山田は彼女と肩をならべ、話しかけた。

「手下はどうした？」

「あいつらこの町じゃ手配書がまわっているからね。あたしはここでは仕事しないことにしているから入れるけど」

「なぜだ」

「そりゃ、あたしがこの生まれだからよ」

エレンの答えに山田は目を丸くした。

「ふうん、それで宿もきみが口を利けるってわけなのか」

「そうさ。さ、あの酒場だよ」

エレンが案内したのは裏通りにある酒場だった。木造の三階建てで、観音開きのドアをあけるとすぐカウンターがあり、ひとりの老人が床を箒で掃いていた。老人は顔をあげ、エレンを認めるとたちまち顔をほころばせた。

「エレンじゃないか！ いつ帰ってきた？」

「昨夜だよ。ドハンじいさんも元気そうね」

「まあな、なんとか生きているよ。一杯やるのかい」

「うん。それにこの四人は客だよ。いっしょに飲むから、席を用意してくれ」

「それじゃ好きな場所でまっついていてくれ。食事はするのかね」

エレンは四人に話しかけた。

「どうする？」

四人はうなずいた。

「それじゃ五人前だ！」

ドハン老人はうなずくとキッチンに入ってしまった。すぐ料理の音がしはじめる。エレンと四人は奥のまるいテーブルに席を取った。

酒場には五人だけでほかに客はない。席につくとエレンはすぐ話し出した。

「クマリ号はこのトランプトンの町と、北の大陸のマッソの町をむすぶ定期便の運航をしているんだけど、あの船の乗組員はけっしてこの町に足をふみこむことはないのさ」

三村は問いかけた。

「なぜだい」

「あの船はのろわれているからさ」

しん、とした静寂が五人を支配した。

洋子はいごこちわるそうにもじもじして口を開いた。

「のろわれているって、どういうことよ」

「タバン船長はもともトランプトンの出なんだけど、魔王によってのろいをかけられているんだよ。あんたら、魔王のことは知っているだろう？」

山田はうなずいた。

「ああ、あちこちで魔王のことは聞いているよ」

「マッソの町は北の大陸でただひとつ人間が生活している町なんだけど、あの町は魔王に魔力を提供するために生かされているんだ。

あの町の人間はひとりのこらず魔王に力をあたえるために生きている。そのために食料や、生活物資を必要としているんだけど、クマ

リ号がそれを運んでいるんだ」

「なぜ、そんなことを……。それじゃこの町も魔王に力をかしていることになるんじゃないのか？」

「そりゃそうさ。でももしマッソの町をトラントンが見捨てたら、魔王はすぐここにやってくるだろうね。それを食い止めるため、トラントンはマッソにクマリ号をつかって食料を運んでいるんだ」

「なんてことを……。それじゃ、マッソの町はトラントンの町の犠牲になっているということじゃないか」

「そうさ。あんたらタバン船長にあつたかい」

「ああ」

「かれ、いくつくらいだと思う？」

「さあ、五十いくつかと思うが」

「ほんとうは百をこえているんだよ」

「ほんとうか？」

「魔王がタバンにマッソとトラントンをもむすぶ定期便を命じたとき、やつの命を凍らせたんだ。それいらい五十年、船長はずっと定期便を運航している。年もとらず、五十年前のすがたのままなのさ。クマリ号に乗り組んでいる船員もおなじなんだよ。あの船が魔王にのろわれているというのは、そういうわけなのさ。だからトラントンの町の人間はなるべくクマリ号にはかわらないようにしている。あの船に乗り込もうとしているあんたたちも、それだけで魔王ののろいにかかっていると思われているから、どの宿屋も泊めようとはしないんだ」

市川は頭をふった。

「そんな……馬鹿な……」

「馬鹿でもなんでも、この町の人間は魔王のことを死ぬほどおそれているのさ。その北の大陸にあんたらどうして行きたいんだい？」

四人のあいだですばやい目配せがかわされた。山田はうなずいた。
「おれたち、魔王を倒そうと思うんだ」

エレンは無言だった。

唇がふるえている。

と、肩がこまかく動き出し、やがて全身をふるわせる笑いにかわった。

「あっはははは！ こりやすげえ！ ドランのお姫様が魔王にさらわれて、その救出に四人の勇者が旅立った、と小耳にはさんでもしかしてとあんたらを追っていたんだが、まさか本気でそんなこと考えているとは！」

「なにがおかしい！」

どん、と市川は顔をまっかにそめテーブルをたたいた。

ひいひいひい、とエレンは笑いを必死におさめようと努力し、ようやく息をつげるようになってこたえた。

「なぜって、そんな無茶なことだれも考えないからさ。魔王に挑戦するといつて、これまで何人もクマリ号で北の大陸にむかった連中がいたが、だれも帰ってこなかった。ここ十年くらい、北の大陸にむかったものはいないんだ。あんたらもそんな連中の仲間入りになりに行くつもりなのかい？」

「おれたちには勝算があるんだよ。かならず魔王はわれわれが倒す。これは決まったことなんだ」

山田はしずかにこたえた。

エレンはそんな山田の様子に眉をよせた。

「どうしてそんなことがわかるんだい？ あんた、占いでもやるのか？」

「いいや。しかしたしかな証拠があるんだ」

「どんな証拠？」

「それは言えない。言っても信じないからね」

エレンがなにか言おうとしたとき、ドハン老人が厨房から食事を運んできてきつかけをうしなった。

「さあ、飯だ！」

山田はその食事をまえにし、両手をすりあわせた。かれは食欲をなくすということはいまだかつて経験したことがなかった。さつそ

く山田は目の前に盛りあわされた料理を手に取り、口に運んだ。そんな様子を見て、ほかの三人も食事にかかった。エレンはちよつと考えていたが、思い直して四人に仲間入りして食事を口に運んだ。しばらく五人はもくもくと食べていたが、ドハンがワインを運んで乾杯をしあうようになって態度がほぐれはじめた。

三村が酒の酔いで顔をあかくしてエレンに話しかけた。

「きみ、われわれのことを小耳にはさんで追っかけてきたといったね。どうしてそんなことをする気になったんだ？」

「あたしが手下たちと一緒にあんたらを襲ったとき、あんたはあたしの命をたすけたろ？ 妙なことをするな、と思ったのさ。どういうわけなんだい？」

「どういうわけって……」

三村はこまったような顔になった。まさかそんなこと真顔でたずねられるとは思っていなかったのである。エレンの隣に席をとったドハンは目をまるくした。

「エレン、まだそんなことやっているのか？」

エレンは肩をすくめた。

「いいじゃねえか！ あたしの勝手だよ」

「おい、わしは言ったはずだぞ。盗賊働きはもうやめろ、と。そんなこといつまでやっていたら、いつか大変なことになる。あんたの父親も……」

「親父のことは言うな！」

エレンはかつとなつてさげんだ。

「そうかい。それならわしはなにも言うまい」

ドハンは立ち上がり、厨房にもどっていった。

そのとき足音がして、入り口の扉が開かれた。

いつの間にか夕方になっていて、入り口からは夕日のオレンジ色の日差しがさしこんできていた。そこには数人の男がなかをのぞきこんでいた。

「やってるかい？」

どうやら客のようだ。が、かれらは奥のテーブルで飲み食いしているエレンと四人を見てぎよっとなった。

「エレン、帰っていたのか……」

エレンは体をねじってそのほうを見るとにやりと笑いかけた。

「よお！ イシスのゴンザレスじゃねえか！ 元気でやってるか？」

「ああ、まあな……じゃ、またくるわ」

ゴンザレスと呼びかけられた男はくると回れ右をするとあたふたときた道をもどっていった。男たちのあいだでひそひそささやき声がかわされ、かれらは姿を消した。

「きみはずいぶん、怖れられているんだな」

山田のことはエレンは首をふった。

「ちがうよ。あいつはあんたらを見て逃げ出したんだ。もつとも、あたしもあんたらと食事を同席しているから、これからあたしを見る目がかかるだろうけどね」

「ふうん……悪かったかな」

けっ、とエレンは肩をすくめた。

「気にしてねえよ！ たかが船に乗り組むだけでのろわれるなんて、あたしは信じないからねえ。でも、あんたらの目的についてちや興味があるんだ……」

「どういうことだ」

「あたしもあんたらについて行こうと思ってね」

エレンはとろんとした目つきで山田を見た。酒でほほがあかくそまり、うるんだ瞳はひどく色っぽい。山田はどぎまぎした。そんなふたりを市川はこっそりと見てしたを向いてしまった。どうやら笑いをこらえているらしい。

「そんな……きみ、北の大陸にむかった冒険者はひとりのこらずもどってこないと言ったばかりじゃないか。なぜ、おれたちについていきたいんだ」

「わけがあるのさ……」

「ふむ、そうか」

エレンはぽかんとした顔になった。

「あんた反対しないのかい？ てつきり断られると思ったけどね」

エレンは四人の顔を順繰りに見た。みな、にやにや笑いをうかべている。そんなかれらの様子を彼女はとまどっていた。

「断ったらきみ、あきらめるかい？」

エレンはちよつと天井を見上げた。

「いいや。どうあってもあたしはクマリ号に乗り込むだろうね。あんたらが反対しようとしまいと。へえ、あんたひとのこのころを読むのかい？ ドワーフ族はそんなこともできるのか」

「おれはドワーフなんかじゃない。人間だ！」

「だけどどう見てもあんた……」

「うう……きみがおれを見てドワーフというのは勝手だが、おれはちゃんとした人間なんだ。とにかく明日はクマリ号で北の大陸にむかうんだ。ついてきたいというなら、タバン船長に船賃をはらうんだな。きみのぶんまで面倒みきれん」

「わかってる！ そのくらいじぶんでやるよ。じゃ、一緒に行つていいんだね」

四人はうなずいた。エレンは破顔一笑した。

「よし、それじゃ乾杯といこう」

五人はさかずきをあげた。

ドハン老人の酒場は宿屋もかねていた。最上階の三階に四人は案内され、おのおのベッドにもぐりこんだ。時刻はすでに真夜中をすぎ、まどからは月明かりがさしこんでいる。

「やれやれ、明日ははやいというのにこんな夜更けまで飲むことになっちまった。ちゃんとおきれるかな」

市川のぼやきに山田がこたえた。

「だいじょうぶさ。あのドハンという親父が、出港のまえにはかならずおこしにきてくれると約束したからな。しかしこの数日、おれたち早寝、早起きの習慣がすっかりついちまったなあ」

洋子はベッドにもぐりこみ、毛布から目だけ出してこたえた。

「そうよ、あたしが「タップ」で仕事してたとき、みんな夜中の二時、三時まで起きていて、目が覚めるのは昼過ぎがふつうだったわ。市川くんなんか、完全に昼夜が逆転してたもんね。まあアニメ業界の人間なんて、そんなのがふつうだと思っていたけど、こっちにきてすっかり早寝早起きになってちよつと驚いてるのよねえ」

三村が薄笑いをうかべた。

「こっちにはテレビがないですからねえ」

そのこたえを聞いて、山田はくつくつく……と笑った。

「違うない！ なにしる夜になるとやることはないし、馬車で旅していたときは明かりもなかったからな」

市川はうなずいた。

「そうだなあ。しかしあのエレンという女盗賊がおれたちについていく、と言い出したとき、おれ笑うのをこらえるのに苦労したぜ。まったく定石どおりだもんなあ。命をたすけられた色っぽい女盗賊がおれたち冒険者の仲間にはいる、なんてなあ、つかいふるされた手だよ」

「いいじゃないか。ともかくこれでストーリーはつぎの段階にはいったんだから。まあ魔王の城につくのもこれでめばしがついたというもんだ」

「そろそろおれ、魔王のキャラ設定をやったほうがいいかなあ……」

「やめとけよ。なんしろ酒がたらふくはいつてるんだ。ちゃんとした線をひけるのかい？」

山田にそういわれ、市川は頭をかいた。

「いいや、そういわれると自信がないな。まあいいや。船に乗ってからでも、なんとかなるだろう」

「そういうこつた。さあさあ、明日ははやいんだ。みな、寝よう」

山田の提案でみな毛布をかぶった。

すぐ四人のベッドから寝息が聞こえてきた。

と、部屋のドアが小さく開き、すきまからエレンの目がのぞいた。

彼女はひっそりとつぶやいた。

「定石どおりだって……？ なんのこと？」

どうやら彼女は立ち聞きをしていたらしい。そろそろと彼女は足音をしのばせると自分の部屋へもどっていった。

が、エレンの顔にはおおきな疑問符が描かれていた。

航海（前書き）

いよいよクマリ号で一行は海へ！

ファンタジーの定番の、船の航海である。

が、航海には定番の海の怪物が一行を襲う！

航海

「うっ……なんとかしてくれ！」

市川はクマリ号の船端にしがみつき、まっさおな顔でつぶやいた。夜明けとともにクマリ号は出港し、エレンをふくめた五人は乗り込んでいた。波はたかく、船はおおきくピッチングとローリングをくりかえしまっさきに船酔いにかかったのは市川だった。げえげえと何度も海にむかって胃の内容物を吐き出して、いまは吐き気だけでもどすものもないという状態である。昨夜のふか酒がきいたのだ。「もう……だからあんなに飲むなっていったのに」

洋子は市川のそばにつきつきりで背中をさすっていた。

「水平線を見るんだ……海面を見ていると酔いがひどくなるぞ」

そういう山田もまっさおな顔をしている。市川の船酔いがうつったのだ。三村は船のへさきちかくにいて、進行方向を見ている。前方にはひくく雲がたれこめ、嵐の予兆があらわれていた。かれはひどい船の揺れにかかわらず平気な顔をしていた。

「あんたは船酔いしないんだね」

エレンが声をかけた。三村は彼女をふりむいてうなずいた。

「そうだね」

「あんたらいったいどういう間柄なんだい？」

「え？」

「あんたの家来かと思ったら、ちがうようだし。だいいち、あんたがあの人にはどちらかというとへりくだった物言いをするじゃない。あんた、どこかの王子様なんだろ？」

三村はかぶりをふった。

「ちがうよ。ぼくはただの制作進行で、王子様なんてがらじゃない」

「せいさくしんこう？　なんだいそりゃ」

「ええと……山田さんならもっとうまく説明できるんだろうけど、つまりどちらかというとぼくはあのひとたちの役に立つよういろいろ

る細かい仕事をするのが役目なんだ。だれが偉いとか、そういうことじゃない」

「そりゃ召使っていうんだよ。あんたの説明ならそうなる。まったくあんたがおかしな仲間だよ。あんたらの様子を見ていると友達どうし、という感じだけど、あの山田とかいうドワーフの爺さんと市川っていう坊主の年の差を考えるとそれもおかしいね……。それにしちやあの小僧、爺さんにまったく対当の口をきいているしね」

三村は説明をあきらめた。テレビもアニメもないこの世界で、これらの仕事をどう説明したらいいのか？ それよりかれはエレンに聞きたいことがあったのである。

「それよりきみはどうしてぼくらについてくる気になったんだ？　なにか北の大陸で目的があるのかい」

エレンはふつと視線をそらした。

「あたしにもいいたくないことはあるよ。まあ、マツソの町までは一緒にいさせてもらおうよ」

「ふうん」

三村がうなずくと、クマリ号の船員が近づいてきた。

エレンはそちらを見てあおざめた。

船員はわかい男で、ふつうだった男前とっていい容姿をしている。しかしその視線はどろんとにこり、表情は死人のようにかたい。もっともある意味かれは死人とおなじなのだ。エレンの説明によると、船員はすべて海で死んだ人間を魔王が生き返らせこの船に乗り組ませているのだそうだ。

男はもうろうとした目をあげ、ふたりをゆっくりとながめた。

「な、なんだい……なにか用かい？」

「嵐がくる」

ぼそり、と船員はつぶやいた。その声は洞窟のおくからひびいてくるようで、どこかうつろだった。

「え、なんだって？」

「嵐がくる。船長がそういえと命令した……船客は船室にいるよう

に……」

それだけいうと船員はくると背を向けたちさった。

エレンはぶるつとふるえ、腕をあげて胸をだいた。

「まったく気味悪い連中さ。まあ、この船に乗り組むからには覚悟してたけど」

「タバン船長はあまり死人という感じはしないけどね」

「そりゃあいつは魔王に生命をふきこまれた死人じゃなくて、もともと生きていた人間の寿命をむりやりひきのばされたただだからね。船員とはちよつとは違うし、そうじゃなくては船長の仕事はできないものね」

「嵐がくるっていつてたな。この船はだいじょうぶなのか？」

「そりゃだいじょうぶさ。なにしろ魔王ののろいがかかっているからね。ちよつとやそつとの嵐なんかよせつけないよ。しかし甲板にいたら、あたしたちは魔王にまもられていないから波にさらわれるかもしれない。船室にひっこんでいたほうが利口だよ」

「そうだね」

三村はうなずきエレンとともに船室につづく階段をおりていった。階段をおりる直前、三村はまた空をみあげた。

まっくろな雲はすでに空の大半をおおい、なまあたたかい風がふいていた。三村は耳なりがするのに気がついた。あごを動かすと、内耳がぼくと鳴った。気圧がさがっているのだ。

甲板をおりて船室にはいると市川は紙のようにしろい顔をあげた。そうとうまいっているらしい。

「嵐がくるんだって……？」

かれは船室につくりつけの二段ベッドのしたに横たわっていた。そのそばに洋子がひざまづき、市川のひたいにうかんだ汗をハンカチでぬぐっていた。

「だいじょうぶですか」

三村が声をかけると山田は首をふった。

「どうも風邪らしい。熱もあるようだ」

「そりやまずいですね」

「ああ、この船で設定をかたづけようと思ったんだが……こりや市川くんが回復するまで無理かもしれないな」

「え、まだやっていなかったんですか？」

三村はちよつと驚いた。これまでの山田の説明では、かれらが設定書を描いておかなくては名前だけの町や、その住民などはこの世界に実在しないことになる。したがってまだ描いていないマツソの町はまだないわけだから……。

「そ、それじゃこの航海は？」

「ああ、へたをすると市川くんが回復するまでながびくな」
そのとき船内にごとごとと振動がひびいた。

「な、なんだこりや！」

山田はうろたえた。

「地震……のはずないな。海の上で」

「船長が蒸気エンジンを動かしているのさ。あんたら見なかったのかい、この船の外輪を」

エレンの説明に山田はひたいをぼん、とたたいた。

「あ、そうか！　じぶんで設定してわすれていたよ。この船が蒸気船だってことを」

振動はやがてごとん、ごとんという規則的な音にかわった。ざばーっ、ざばーっという外輪が水をかきわけける音が聞こえてくる。どうやら蒸気機関が全力をだしてこの嵐をのりきるためパワーをあげているのだろう。

どおお……

地の底からひびいてくるような轟音がせまり、船はぐつともちあげられた。

「ひゃあっ！」

みな悲鳴をあげた。

山田は窓にとりついた。ガラス越しにまっくろな波が山のようにもりあがり襲ってくるのが見えた。そしてその波が視界から消え去

り、窓のそとは空だけになった。

「うわっ！」

体がななめになり、山田は必死になって船窓の取付金具にしがみついた。船がかたむいたせいで船窓のそとは空だけになったのだ。からからから……と外輪が空転する音が聞こえてくる。

ふっとからだが軽くなり、五人は船室のなかで宙にうかんだ。
どしーんっ！

いったん波頭にもちあげられた船がこんどは波の谷底にたたきつけられ、全員は床にころがってしまった。ぎしぎしと木材がきしむ音が不気味にひびいた。

「痛え……」

もっともひどい怪我をおったのは市川だった。なにしろ直前までベッドでうなっていたのだから身をかわすなんてこともできない。

「市川くん！」

洋子があわてて市川のそばに這いながら近づいた。床にのびている市川の体をまさぐるとおおざめた。

「大変！ かれ、腕の骨を……」

「なにい！」

山田もなんとか市川のそばによっていった。

「折れてはいないけど、どうやら脱臼したらしいわ」

「なんだって……」

ぶるん、と山田は顔を手でぬぐった。いつのまにかぬるぬるした汗が顔いっぱいにふきでている。

市川の顔をのぞきこむと白目をむいている。気絶したらしい。

「洋子ちゃん、きみ市川くんをおさえてくれ。これいじょう怪我を
されてはかなわん」

洋子はうなずくと、しっかりと市川の体をだきしめた。

ざばあっ！

甲板から水が船内にながれこんだ。三村は船室のドアにとりつき必死になって締め切った。が、すきまからがばと音を立てて海

水がふきだしてくる。たちまち船室の床は水浸しになってしまった。それから数時間、船は嵐とたたかいつづけた。

波にもちあげられ、ほおりだされ、また水面にたたきつけられというくりかえしで、五人は船室のなかでふらふらになった。

が、ようやく嵐はすぎさり波はおだやかになった。

がくがくしている膝をようやく気力でふるいたたせ、山田は窓に鼻をおしつけた。

「どうやらおさまったようだな……」

窓からは雲間からさしこむひざしがさしこんでくる。

市川を見ると口をあけてながながと床によこたわり、その頭を洋子がじぶんの膝枕におしつけ心配そうにのぞきこんでいる。はっと顔をあげると山田の視線がそそがれていることに気づきまっかになって、あわてて市川の頭を膝からはずした。市川の後頭部がごつんと床に音を立て、かれはうめいた。

「眠っているわ。まあ、おきていたら大変だったろうから、これでよかったわ」

「うん」

山田はわざと生返事をするとし川のそばに膝まづいた。

「どうだい、脱臼しているって？」

「ええ、わるいことに右肩らしいわ」

「まずいな……キャラ設定がまだなのに」

そのとき市川のまぶたがぴくぴくと動いた。

ぱちつと両目がひらき、のぞきこんでいる洋子と山田の顔を見とめた。

起き上がろうとしてたちまち顔がゆがんだ。

「うぎゃあー！」

肩をおさえてうずくまる。

「だめよ！ あんた、肩を脱臼しているんだから」

「え？」

市川は洋子を見上げた。あわてて右肩に手をやり、ぎくんと身を

ふるわせた。

「痛っ……」

苦痛に声もでないようだ。

「どうする、洋子くん。これじゃどうしようもないぜ。脱臼をなおすなんて、おれできないからな」

「あたしだつて無理よ。接骨医なんかじゃないんだから」

ひそひそと会話をかわしているところへエレンが腰をおろした。

「骨をはずしたんだつて？」

「ああ、肩の関節らしいけどな」

山田がこたえたとエレンは市川の肩に手をやった。

「それならなんとかなる。あたしなら関節をもどせるわ」

そういいながらエレンはたしかめるように市川の肩、腕をまさぐっていく。彼女にふれられるたび市川はびくん、びくん、と身をふるわせた。

「きみ、ほんとうにそんなことできるのか？」

山田がそうつたずねると彼女はうなずいた。

「まあね、手下の傷をなおすのも、あたしの仕事だから。これくらいなら直せるわ」

「じゃ、やってくれ！　かれの腕が動かないとまずいことになる」

「いいわ。それじゃ、あんたたち、こいつのからだをおさえていて」
エレンの指示にしたがい、山田と洋子は市川のからだをおさえた。しっかりおさえつけられたことを確認するとエレンはいきなり市川の腕をつかみ、あつというまもなくねじりあげた。

「ぎゃあああっ！」

市川は苦痛に絶叫した。

そのとき右肩でごき、という音がした。

市川はぼかん、と口をあけた。

「どうした？」

山田が声をかけると市川はおそろおそろじぶんの右肩に手をふれた。

「痛っ……？　くないよ。なおってる」

ふうっ……、と山田はひたいのあせをぬぐった。

「まったく、ひやひやさせやがる」

「もとにもどしたけど、あまり無理をしてはだめよ。二、三日はしずかにしてないと、またはずれるかもしれない。へたをするとはずれ癖がついてしまうから」

エレンにいわれ、市川はうなずいた。山田はかれにささやいた。

「市川くん、きみ右手はどうだ？」

「動かせるよ」

「そうか、それじゃ設定もやれるな？」

「ああ。はやくこの船旅おわらせたいたいからな。今夜、あげちまおうや」

「同感だ」

ふたりがおたがいうなずきあつのをエレンは不思議そうにながめた。

「あんたたち、なに話してるのさ？」

「あんたには関係ないことよ」

洋子の言葉にエレンの眉がぴくりとはねあがった。

「なんだってえ……」

ぴりぴりと唇のはしがふるえている。洋子はたちあがった。

「なによ、やるっての？」

「やってやろうじゃないか、おもてへ出な！」

山田はふたりにわってはいった。

「まあまあ、ふたりともやめなないか」

「よしてよ、山田さん。あたし、この女盗賊についちゃいいいたいことがあるのよ」

「へえ、なにがしたいのよ、おばさん」

「おば……」

洋子は絶句した。たちまち顔がまっかにそまる。エレンはせせら笑った。

「若作りしてるけど、あたしの目はごまかせないよ。あんたいい年じゃないか」

洋子の目つきが険悪なものになった。ぎりぎりぎり……と、音が聞こえそうなほど齒をくいしばる。その齒のあいだから、ひとことひとこと、おしだすように言葉がもれた。

「あんた、女盗賊だかなんだかしらないけど、どうしてそんな裸同然の格好で平気なの？ 一日中、男に色目つかっているみたいじゃない！」

こんどはエレンの顔がまっかになるばんだった。おもわずゆたかな胸をおさえる。

「あ、あたしが男に色目つかっているだって？ よ、よくもそんなことを！」

きいーっ、という悲鳴のような声をあげ、エレンは洋子につかみかかった。たちまちせまい船室でどたん、ばたんとふたりの女が格闘する音がひびく。そんなふたりの様子を男たちはぼうぜんで見守っていた。

「どうする、山田さん」

市川が山田に話しかけた。山田は眉を八の字にして、首を振った。こうなったらじぶんの出る幕ではないと言っているようだ。

そのとき三村が口を開いた。

「あのう……ちよっと……」

「なんだよ」

山田はふりむいた。と、三村の顔を見てたじろいだ。三村は船窓をゆびさし、まっさおな表情になっている。

「たいへんなんです！」

なんだ、なんだと山田と市川が近寄った。市川はまだ肩がいたむのか、手で押さえたままである。

ちいさな窓に男三人が顔をよせる。なんともむさくるしい図ではある。が、三人の顔は恐怖に凍りついた。

「な、なんだありゃ！」

叫び声をあげたのは山田だった。

ばしゃーっ、と水しぶきが窓ガラスをぬらす。そのむこうに、もりあがる波のなかからなにかが海面を突き破ってうごめいている。おもくたれこめた空の雲間からはひっきりなしに稲光がひかり、その閃光にくつきりとうかびあがった黒い影……。ぬらぬらとしたからだに無数の蛇のような腕がついている。その腕にはびつしりと吸盤が見えていた。

「蛸かな？」

山田がつぶやくと市川は否定した。

「いや、烏賊だ……大烏賊だ！」

市川の言葉は正しかった。大烏賊はその全身を海面にあらわにした。巨大な胴体はさきぼそりのスマートな形で、その先端にはエンペラとよばれる翼のような耳がついている。烏賊は身動きとともにその表面の色と模様をめまぐるしく変化させていた。

「近づいてくるぜ」

山田が叫んだ。その言葉に呼応したかのように大烏賊は見る見るその距離をつめてきた。

どしーん！ という音とともに、船体がぐらりとゆれた。みしみしみし……と、木材が悲鳴をあげた。

うひゃあ、と悲鳴をあげ、三人は窓からあとずさった。

ばりん、と窓ガラスがわれ、そこからにゅるんと烏賊の腕が室内にあばれこんだ。烏賊の腕は室内をさぐるようにどたん、ばたん、とあばれまわった。

三村はその瞬間形相がかわり、すらりと腰の刀をひきぬいた。むん、とばかりにちからをこめ、烏賊の腕をすぱりときりさく。烏賊の腕は切り落とされ痛みを感じたのかすぐさま窓からひきぬかれた。腕がひきぬかれると、どつとばかりに潮水があふれた。その窓に、巨大な眼がのぞいた。烏賊の眼球である。烏賊や蛸のような頭足類は無脊椎動物のなかではもっとも進化しているといわれている。眼球は窓にぴつたりとおしつけられ、ぎよろぎよろと左右に動いた。

まるでいまじぶんを傷つけた相手をさぐっているようだった。瞳孔が怒りに燃えたかのようにひろがった。

ぐうつ、と船室が横倒しになった。船を大烏賊が押しているのか？ きゃあつ、と甲高い悲鳴をあげて洋子とエレンのふたりがころがった。

「な、なに？」

エレンが洋子から身をふりほどき、ぽかんと口をあけた。ぬちゃぬちゃと粘液の音をたて、烏賊の切り落とされた腕が部屋の中でのたうっているのを見る。

「臭え！　なんてえにおいだ！」

山田は顔をしかめた。室内には強烈なアンモニア臭が充満していた。大王烏賊などの深海生物は通常浮き袋をもたない。水圧が高すぎで、浮き袋等などでは浮力を調節できないのだ。そのかわり発達したのは体内にアンモニアをためこむことである。アンモニアは水より浮力があり、それにより浮力がえられるのだ。おなじような発達をさせたのは鮫である。したがって深海の生物はおおくは食用に適さない場合がおおい。

「なんなのよ、これ？」

「烏賊だよ。大烏賊が襲っているんだ」

市川がどなった。エレンは傾いた床をはいのぼるようにして窓にとりつく和外をのぞきこんだ。とたんに割れた窓ガラスに大烏賊の巨大な目玉がぬつとばかりにあらわれた。エレンはひえつ、と悲鳴をあげ、たたらをふんであとずさった。さっきまで穏やかさをとりもどした海面も、ふたたびもりあがり、墨をながしたような雲がひくくたれこめ、雲間からはときおり雷光がひらめいた。どうやらさつき嵐が過ぎ去ったと思ったのは早計らしい。もしかしたら台風の目を通じただけかもしれない。

部屋のドアがどんとあらつぽくたたかれた。なんだ、と全員がそつちをふりむくとドアを開いてなかにはいつてきたのは船長のタバンだった。もともとくらい顔をさらにあおざめさせ、船長は

むつつりと全員の顔を見わたした。

「手伝ってくれ、あの皇帝烏賊のやつがこのクマリ号を沈めようとしている。船員たちが立ち向かっているが……。ぐずぐずしていたらこの船は海の藻屑だ」

あいかわらずタバン船長の声は洞窟からひびいてくるようなうつろなものだったが、表情は真剣だった。

エレンは全員をふりかえり叫んだ。

「なにあんたらばーっ、としてんだよ！ さあ、甲板にいこう！」

エレンの声に全員が夢からさめたような顔になり、おのおの武器を手に取った。市川もふらふらとしながら剣をにぎる。山田はそんな市川に気がついて声をかけた。

「市川君、やめたほうがいい。ひどい風邪だし、脱臼を治療したばかりじゃないか」

洋子は市川にちかづく背中をおしてベッドにつれていった。

「さあ、あんたは寝てなさいよ」

市川は洋子にいわれ素直にうなずくとすとんと腰をおろした。そのままたおれこむようにあおむけになり、洋子はそのうえから毛布をかけた。

どやどやと市川をぬいた全員は船長を先頭に甲板へむかった。

階段をのぼるとざばーっ、とばかりに波しぶきがかかってきた。

それを見上げるとたれこめる雨雲から横殴りの雨が一面をたたき、そのしぶきあたりは霧のなかにあるようである。ときたま雷鳴がとどろき、稲光があたりをシルエットにそめあげる。

ぎいぎいぎい……。

風雨について聞こえてくる妙な音に、なんの音かとそのほうを見ると船長が皇帝烏賊とよんだ大烏賊が甲板に足をのたくらせている。音はその烏賊が嘴をかみあわせるさいにたてるのだった。

「でけえ……」

あらためて山田は烏賊の巨大さに驚いた、とばかりに声をあげた。たしかに巨大だった。なにしろ胴体だけでもクマリ号の半分はあ

る。腕をいれた全長は船の二倍はあるだろう。その十本の腕を烏賊は船の胴体にぎりぎりとききつけていた。そのうちの一本は先端が切られている。さつき三村が切り落とした一本である。しかしそれでも船にまきつけるにはじゅうぶん長い。烏賊の胴体の皮膚はめまぐるしく色や模様を変えていた。

甲板には船員が全員得物を持ち、烏賊と格闘していた。というよりはその腕とである。船員たちは船にからみついている烏賊の腕をなんとか引き剥がそうと剣や斧で切りつけていた。しかし先端部分ならともかく、胴体ちかくの腕のふとい部分の皮膚はぶあつく、刃物できりつけてもぶあつい皮膚にめりこむだけで引き抜けなくなってしまう。さらに腕には無数の吸盤がついていて、それがしつかりと甲板や船体にはりついていてから始末がわるい。烏賊は切りつけてくる船員たちをつるさく感じるのかときたま空いている腕をふるって船員のからだをまきあげ、空中にもちあげた。船員たちは悲鳴をあげて抵抗するがまったく効果はなく、そのまま烏賊の嘴にもっていかれる。嘴はがちがちとかみ合わせりあわれな犠牲者をはさみこんだ。

ぎゃあつ、という悲鳴とともに烏賊の嘴から鮮血がふきだした。
「いこうっ！」

三村が叫んだ。

一瞬にしてさっきまでの気弱な表情はぬぐいさられたように消えていた。そしてときおり見せる勇者の表情があらわれている。三村の声に引きずられるように山田と洋子は武器をもち烏賊に突進していった。

何でこんなこと、おれはやってるんだ……と、山田はふと思うのだが、こうなるともう自分のからだは自分のものでなくなってしまうようである。まるでどこか遠くからながめているように自分の行動を客観視するべつの自分がいるような気になってくる。

わあああああ！

三村は絶叫した。つられて山田と洋子も武器を手にも口をいっばい

にあけ、怒号とも絶叫ともつかないわめき声をあげる。もうこうな
つてはやぶれかぶれである。

ぎろり、と烏賊の眼球が動いた。

甲板を突進する三村に気づいたようである。ぐるり、と烏賊はか
らだの向きをかえ、三村に向き直った。

ぬらぬらとした粘液にまみれた腕がふりあげられ、ぶうんと空を
きって三村をおそった。三村は両手に剣をかまえ、おそいかる烏
賊の腕にきりつけた。

刃が腕にくいこみ、腕の吸盤がぶつぶつと音をたてて宙にとんだ。
ぎええええっ！

烏賊は怒りにもえまっくろな嘴をがちがちと鳴らした。

三村は目にもとまらぬはやさで剣をふりまわし切りつけるが烏賊
にとつてはそれほどの痛手ではないようだった。ゆうぜんとした動
きで三村をあしらっている。

「ちくしょうっ！」

三村の横から山田がとびだし、手にした斧をふりあげた。ずぶり、
と斧が肉にくいこむ。山田の顔色がかわった。肉にくいこんだ斧は
そのままびくとも動かない。

ぐい、と烏賊は腕をひいた。山田の手から斧が肉にくいこんだま
ま離れてしまう。山田はからっぽの両手を見つめてぽかんと口をあ
けた。

がらがらがら……。

暗雲のむこうで雷鳴が鳴り響き、あおじろい雷光があつい雲をき
りさいて光っている。ざあああつ、という横殴りの雨と、船首にぶ
つかる波が三人のからだをぬらした。

稲光のひかりにシルエツトとなった烏賊の腕がふりあげられ、山
田に襲い掛かった。山田は恐怖の表情をうかべていた。

せまってくる烏賊の腕を山田はぼうぜんと見詰めていた。

無意識に山田は防御の体勢をとり、両腕を天にむけた。

かれは眼をとじた。死の予感が山田に襲った。

！

「山田さん！」

洋子が声をあげた。

彼女の悲鳴に三村も山田の状況に気がついたようだった。が、手遅れだ。なにをするにも遅すぎる。

と、山田の腰の小物入れの蓋が開いた。なかからきらきらと輝く小石が宙にうきながら山田のさしあげた腕のなかにとびこんだ。

そのとき、突然のひかりの爆発がおきた。

ばしゃーんっ、と強烈な音とともにまっしろなひかりが山田の全身をつつむ。金臭いオゾンのにおいがあたりにただよった。三村と洋子のふたりの視界はとっぜんのひかりの爆発になにも見えなくなつた。

ようやく見えるようになったふたりは信じられないものを見た。

ぼうぜんと船首あたりの甲板に立ちすくんでいる山田。

そして船首からみついていた巨大烏賊は、全身すべて黒焦げになつていた。ぶすぶすとしろい煙が烏賊の皮膚のあちこちからたちのぼり、船首の木材もばちばちと火を上げ、はぜている。あたりにオゾンの金臭いにおいが充満していた。烏賊は完全に息絶えているらしく、ぴくりとも動かない。その両目は熱でまっしろに変色していた。

「やったな、あんたら」

声をかけられ、三村はびくりとなつた。声をかけてきたのはタバン船長だった。

「あのドワーフがこんなすごい魔法をつかえるとは知らなかった」

船長のことばに三村と洋子は山田を見つめた。山田はふたりの視線を感じ、はつとなつた。

「おれだつて知らなかったんだ！ いったい、なにがおきたんだ？」

「あんたが魔法をつかつてあの大烏賊をやつつけたのよ」

洋子がこたえる。山田は信じられないというように首をふつたと、その視線があしもとにおちた。そのままゆっくりとかがむと

なにかをひろいあげるしぐさをする。

「あちいつ！」

ちいさく山田は悲鳴をあげた。指先を口のなかにいれ、しゃぶっている。

洋子が声をかけた。

「どうしたの？」

「火傷しちゃった……。これは……？」

ふたたび山田はかがみこんだ。その視線の先を洋子と三村はのぞきこんだ。甲板に一個の透明な小石がころがっている。その小石の内部からはオレンジ色のひかりがゆらめいていたが、見る間にそれはうすれ、消えていった。

「賢者の石……」

三村がつぶやいた。洋子はうなずいた。

「そうよ、あのオランという魔法使いのおじいさんが山田さんにあげたものね」

山田はおそろおそろ指先を賢者の石にちかづけた。ちょん、ちょん、とつついてみる。

「もう熱くはない……」

つぶやくと拾い上げ、まじまじと見つめた。石は透明な青緑色の色にもどっていた。

なんとなく三人は顔を見合わせた。

「なるほど……、あの老人が魔王との戦いに役立つとはこういうことなんだ」

「どういふことだい、そりゃ」

山田は三村のことばにきつとなった。

「きつと山田さんがこの石を使って、魔王を倒す決定的な役割をはたすんですよ」

三村のことばに山田は渋面をつくった。

「おれが？ 冗談じゃない……おれはそんな人間じゃない……」
洋子はなぐさめるように言った。

「しょうがないわよ、きつと木戸監督のシナリオにそういう役割をあてられているんだわ。とにかく魔王を倒さないかぎりあたしたちはもとの世界に帰れないんだから」

「なんだ、いまの音は？」

もつろうとした足取りで階段をのぼってきたのは市川だった。顔は熱っぽくあくそまり、ふうふうと息をついている。

「まるで雷がおちたみたいだったぜ」

洋子は首をふった。

「あんた、風邪ひいてるんだから寝てないとだめじゃない！」

「こんなゆれていちゃあ、寝てなんかいられねえ……」

市川はまっさおな顔色になると、ふなべりにしがみついた。げえげえと胃の内容物を吐く音がひびく。洋子はあわててかれの背中をさすりにかけよった。

「なるほどねえ……」

エレンは眉をぐいとあげ、つぶやいた。

「あたしがあのぼうやの肩を治療したもんだから、気に入らなかったんだ」

山田と三村は顔を見合わせた。そしてどちらともなく肩をすくめた。どっちにしろこれ以上事態をややこしくするつもりはない。

「まずい……」

帆を見上げていたタバン船長は眉をひそめた。

船長のことばにみな帆柱をみあげる。クマリ号のマストにはられている帆はみな目一杯にふくらんでいる。そのはしはびりびりともかく振動していた。

「帆をおろせえ！ ひっくりかえるぞ」

船長は声をはりあげた。その命令に、いままでこおりついたように烏賊とのたたかいを見守っていた船員がはじかれたように船のマストにとりついた。

しかし帆をおろすには船員の数はあまりにたりなかった。さっきでの大烏賊とのたたかいで何人かが海にほおりこまれてしまってい

たのである。

船長はそれと見てとるや、腰のナイフをひきだした。それをうんと腕をいっばいにのばすと空中にほおりあげた。

ナイフはくるくると回転しながら宙をとぶと、一枚の帆にぐざりとつきささった。

わずかにナイフが切り裂いただけであつたが、強風がその切れ目をみるみるひろげた。帆布は数度の船長のナイフの投擲によって切り裂かれていった。

が、それも焼け石に水であつた。

必死になつて帆をしまおうとする船員たちの努力にかかわらず、クマリ号は猛烈な強風をうけ、さらにはときたまマストよりたかだかともりあがる波にさらわれ、徐々にダメージをためこんでいった。めりめりめり……。

いやな音をたて、クマリ号のマストはまんなかから折れていった。「わあ！」

甲板にあつというまに割れ目がひろがると、折れたマストがあたりの構造材をまきぞえにしてたおれていく。それが船の重心をくるわせ、クマリ号は完全に横倒しになつてしまった。

そこに山脈のような横波がかぶさつていった……。

みなのかかる透明な海水の壁面を恐怖のまなざしで見つめていた。

飛行船（前書き）

難破した一行は飛行船に救助される。

そしてあらたな目的地がしめされることに。

魔王の城は近い！

飛行船

.....。

ぽちゃり、ぽちゃりという水音に市川は目をさました。

気がつくとも横顔を海水があらっている。口の中は塩辛い味がいっぱいになっている。

目をあげたが、すぐとじた。

あけつづけていられないほどの強烈な日差し。太陽のひかりはまっすぐまうえから照りつけてくる。

おそろおそろ目をゆっくり開けると、市川はあたりを見回した。まっさおな空に白い雲。水平線がくつきりと見えている。

「気がついたみたいだな」

山田の声である。市川はふりむくとあつとなった。

なんと全員がそろっていた。それもクマリ号の甲板上である。が、その甲板はまんなかからまっふたつに割れ、船体は半分以上が水につかっている。マストはなくなっていた。市川がいるのはその前半分であった。完全にまっふたつになった船体は、木材の浮力のみで海面をただよっていた。甲板はななめになっており、船首部分は水面のしたである。

「嵐はやんだみたいだな……」

市川はつぶやいた。山田はうなずいた。

「まあ、命があっただけでもよかったよ。あんな嵐だから、命をおとしても不思議じゃない」

「船長は？」

市川の質問に山田は顎をしゃくった。

タバン船長はふなべりに身をもたせかけ、じっと水平線を見つめている。

「ずっとああしているんだ。船がこうなっちまってショックだったんだろう」

「市川君、風邪はどうなったの？」

洋子が話しかけてきた。いわれて市川は気がついた。あれほどの熱と頭痛がすっかりひいている。

「なんだか直っているみたいだ」

なあんだあ、というほつとしたような顔色が全員にうかんだ。

「さあ、これからどうなるか……だが」

「どういう意味だい？」

山田はすっかりのびた顎鬚をさすった。

「この辺で、なにかがおきてもいいはずなんだが……」

その山田のことばがおわるか、おわらないかというタイミングでその音が聞こえてきた。

ぐおおおんん……。

重低音のその音は空から聞こえてきた。

仰ぎ見て、全員はあつと驚いた。

「なんだ、あれは……」

タバン船長がつぶやいた。

空中に浮かぶ巨大な葉巻型の物体。

それは硬式飛行船であった。

ヒンデンブルグ、ツェッペリン……、第二次大戦前にすっかり姿を消した、水素やヘリウムの浮力を利用して空中をゆく巨大な船。それがクマリ号の残骸の上空をゆっくりと近づいてくる。

「まいったね……、おれが描いたとおりじゃないか」

市川は頭をかいた。

山田は市川の耳に口を寄せささやいた。

「こいつは木戸さんのしわざだと思っていいいんじゃないか？」

「なんだって」

市川もまた山田に習ってささやき声になっていた。

「ほら、おれたちが面白がってストーリーにないキャラや設定を描

いたろう。木戸さんはあれらを無視せず、しかも無理なく登場させるためにあの嵐や、烏賊の襲撃をさしこんできたのかもしれないぞへっ、と市川は目をむいた。

「木戸監督のオリジナルってわけか！ たしかにあの烏賊や、飛行船はストーリーにはないもんだ。それでおれたちあんな目に……」

山田は首をふった。

「おれたちは軽い気持ちでしたことだが、木戸さんにとっては重大な違反に思えたんだろうな。おれたちはいつか魔王を倒すという最終目的があるから殺すわけにはいかないが、勝手なことをするとつとひどい目にあわせてやる、という警告かもしれん」

「じょうだんじゃねえ！ そんなこといちいち考えてキャラ設定やつてられないよ。だいいち、木戸さんがおれたちにしかえしするかもしれないと思ってびくびくしながら設定してたら、なにも描けねえじゃないか」

「それはそうだが……」

山田はひたいにふかいしわをよせた。

市川のいかりはわかるがいまは一刻も早くもとの世界に帰りたい気持ちでいっぱいである。ともかく木戸のストーリーにそって設定を描き、魔王との最終決戦にのぞみたかった。もう脱線しまい、と山田はひそかに誓った。

ふりあおぐと飛行船がゆっくりと高度をさげてくるところだった。船腹にはゴンドラがつり上げられ、そのゴンドラの両側には推進力をえるためのプロペラが回っている。

まわりを見回すと近づいてくる飛行船をふつうにあおいでいるのは市川、洋子、三村の旅の仲間だけで、タバン船長、そしてクマリ号の船員たちはかおに恐怖のいろをありありとうかべている。

近づいてくる飛行船は海上に浮かんでいるクマリ号の残骸のそばに横付けするつもりか、ぐるりと船首をまわし、その横腹を見せた。その船体に描かれたマークを眼にしたタバン船長らはみな色をうしなった。

「魔王の目だ！」

飛行船には目を図案化したマークが描かれていた。船長、船員たちはその目を見まいといっせいに反対側をむき、手で顔をおおっている。

飛行船はゆったりと回頭して近づいてくる。ゴンドラの窓に乗組員だろつか、数人の顔がつきだされ、こちらを指さしているのが見えた。やがてゴンドラの横腹の扉が開かれ、なかから縄梯子がおろされた。縄梯子の先端は甲板にたらされた。乗組員のひとりが両手をくちにちかづけ、メガホンをつくった。

「おおーい、登ってこーい！」

三村はうなずくとはしごをつかみ、登りはじめた。はしごはゆらゆらとゆれるが、かれは器用に手足を動かしすると登っていく。かれがゴンドラにたどりつく待ち構えていた乗組員は手をかして乗り組ませてくれた。それを見て市川と洋子もつづいた。

はしごに手をかけようとして山田は船長たちをふりかえった。船長たちは恐怖の表情をうかべはしごをのぼっていく市川と洋子を見上げている。

「あんたら、来ないのか？」

そう話しかけると船長はぶるぶると首をふった。

「とんでもねえ！　ありや、魔王の飛行船だ！　あんなのに乗り込んだら、どんなのろいがかかるか……」

そこではじめてエレンが笑い声をあげた。

「魔王ののろいだって？　それならもうあんたら、すでに魔王ののろいにかかっているんじゃないのかい？」

タバン船長は顔色をまっかにさせた。

「なんだと！　わしがいつ、魔王ののろいにかかっていると言った？」

船長のことはにエレンはがくぜんとなったようだった。

「でも、でも……、町みんなそう言っているよ。あんたは五十年前からちつとも変わっちゃいない……年だって、百才をとづくにこ

しているはずだって」

「そりゃ、わしの父親のことを言っているんだ。わしは父親からクマリ号をうけついで船乗りをしているんだ。あんたらの町の間人は、わしらの船が桟橋についたときからいつさいわしらの顔を見ないようになっているから、親父とわしがいれかわったことも気がついておらんのだ！」

「そ、それじゃ船員たちも？」

「そうだ、マツソの町で雇い入れた船員ばかりだ。トラントンの町ではだれもわしらの船に乗り込もうというやつはいなかったからなあんたらをのぞいて。」

ああ、死人に見えるというのか。そりゃそうだろう。

なにしろマツソの町とトラントンをつなぐ航路は昨夜の嵐がいつも吹き荒れているから、トラントンの町についたころは船員たちも疲れて、死人同然といっている状態になっている。わしらはあんたらの町で荷を運ぶだけで面倒は起こしたくないから、あまり関わらないようにしているだけだからな」

エレンはなんと答えていいものか、わからないといった表情だった。

「おおーい、あんたら乗るのか、乗らないのか？」

そのとき飛行船のゴンドラから乗組員が顔をつきだし声をかけてきた。山田はひとつうなずくとはしごをにぎり、エレンと船長たちをふりかえった。

「おれはのぼるよ。どちらにしろ、このままじゃ鯨のえさになるか、飢えて死ぬかどっちかだからな。それにあの乗組員たち、どう見ても魔王のろいにかかっているようには見えないけどね」

そういうと山田ははしごをよじのぼりはじめた。必死によじのぼる山田は目をとじていた。かれは高所恐怖症なのだった。

飛行船の乗組員がかれのからだをつかんでひきあげてくれるのを感じ、ようやく山田は目を開き下を見た。

エレンがすぐあとから登ってくるところだった。

彼女の登っている姿を甲板でタバン船長が見上げていた。エレンがゴンドラに乗り込むと船長がはしごをつかみ、ゆっくりとのぼりはじめた。船長の顔は蒼白だった。

タバン船長のあとから生き残った船員がのぼってきて、ようやく全員が飛行船に乗り移ってきた。

ようやく人心地がついた山田は飛行船の船内を見回す余裕かた。救い上げてくれた乗組員がぐるりとまわりをとりかこんでいる。みな好奇心いっぱい表情で、じろじろと山田や市川、三村、洋子などを見つめていた。

「ようこそ、このロング号へ」

乗組員のなかで年長らしい男が一步進み出ると手をつきだした。みなその乗組員の男と握手をかわし、礼を言った。たちまちほかの乗組員も口々に歓迎の挨拶をはじめ、その場はいつきになごんだ。最初に声をかけてきた年長の船員は副長だということだった。

そのなかで山田はクマリ号のタバン船長以下、船員たちがみょうに固い表情をしているのに気づいた。全員、この場にうちとけようとはせず、飛行船の乗組員に話しかけられてもただあいづちをうつだけにいる。

やっぱりこの飛行船が魔王のものと思っているのだろうか。

最初に挨拶にたった副長が口を開いた。

「いま船長があんたらに会いにくるから、ここで待ってくれないか」その言葉がおわらないうち、廊下を近づいてくる人影にみな気づいた。

ほう、と市川、山田、三村の男三人は感嘆の声をあげた。

船長は女の子だった。

しろい上着はセーラー服で、下半身はふとももがむきだしになった短いパンツをはいている。年令はまだはたち前といってよく、卵形の顔に黒髪をきりつと後頭部でまとめていた。その髪の毛はふとい三つ編みにして腰のあたりまでのびていた。背中には日本刀を背負い、それをたすきがけにした紐でつるしている。足元は編み上げ

の革靴で、かかとが高くなっている。

四人の中ですよ、いや目配せがかわされた。このキャラ設定は、あの夜ワルノリして描いたセーラー服の少女である。木戸監督はこれらの設定を使いきるつもりだろうか。それならほかに設定した宇宙人とか、戦車もこの物語に登場させるつもりだろうか？

「ヨーリ！」

とつぜんの叫び声にみなふりかえった。声をあげたのはエレンであつた。彼女はぼうぜんと口をあけ、セーラー服の美少女の顔を見つめている。声をかけられた彼女はエレンを見てぎくりとなつた。

「エレン……」

「ヨーリ！ あんた……こんなとこでなにやってんのよ？」

エレンはぐい、と一歩前へ進み出た。ヨーリとよびかけられた彼女は一瞬ひるんだ顔になつたが、それでもあごをあげエレンの顔をにらみつけた。

「あんたにそんなこと言われたくはないわね……エレン」

ふたりはしばしにらみあつた。エレンはふつと肩の力をぬき、口をひらいた。

「あんた、船長なんだって？」

ヨーリはうなずいた。

「そうよ、神聖ゲゼン帝国の飛行船部隊のゴール号船長というのがいまの身分。どう、驚いた？」

エレンはくすりと笑つた。

「驚いたわよ……！ あいかわらずあんたはあたしを驚かせてくれるわね」

そついうとエレンはあははは！ と、天井を仰いで笑い出した。ヨーリもまた顔をほころばせた。

「あたしも驚いたわ。なんでお姉ちゃんがここにいるのよ？ トラントンの町にいるはずじゃなかったの？」

「お姉ちゃん……あんたたち、姉妹だつていうの？」

洋子があきれて声をあげた。エレンはくるりと洋子をふりむいて

うなずいた。

「そうよ。あたしが盗賊家業をはじめたころ、この子はそんな商売はいやだってあたしのもとを飛び出したのよ。そのまま消息不明だったけど、まさかこんなことになっているとは思わなかったわ」

ヨーリは肩をすくめた。

「お姉ちゃんはおあたしに盗賊の片腕になってほしかったらしいけど、あたしはいやだったの。だってトラントンの町だったら盗賊だって大手をふって歩けるけど、ほかの町じゃお尋ねものだわ。そんな日陰のくらし、ごめんだもの」

「あんたねえ……」

エレンがいいかけるとヨーリは手をふってそれをさえぎった。

「そのことについてちやあたしとお姉ちゃんとでさんざっぱら話し合ったはずでしょ。それよりどうしてお姉ちゃんがこんなところにいるのよ？ まさか盗賊をやめたわけじゃないでしょ？」

妹に質問され、エレンは黙った。その顔を見てヨーリの眉があがった。

「ねえ、お姉ちゃん。まさかまだあれのことを？」

エレンの顔に血が上った。

「あんたには関係ないわよ！」

ヨーリは首をふった。

「あきれた！ まだあきらめられないのね……。まあ、それがお姉ちゃんらしいとはいえるけど」

みなが顔に疑問符を浮かべているのを見てとったヨーリはふつと笑った。

「いつとくけどこのことはあたしとお姉ちゃん、姉妹のことだからあんたらに説明するつもりはないわ。お姉ちゃんも話す気はないはずよ。だから尋ねても無駄よ」

機先を制せられ、洋子をはじめみな心中で舌打ちをしたが、どうやらそれ以上そのことについて話す気はふたりにないようだった。ヨーリはみなを廊下のさきへうながした。

「それより食事はどうかしら？ こつちに食堂があるから、お腹がすいているならなにかつめこみましょうよ。それにあなたたちのもとも聞きたいしね」

食事と耳にして不覚にもみな空腹感が刺激された。ぐう……、と山田の腹がなり、かれは顔をあからめた。

それを聞きつけヨーリはにやりと笑った。

「どうやらお腹がすいている人がいるみたいね。それじゃ食堂へどうぞ！ この廊下をまっすぐだから」

そういうと彼女はさきにたつて歩き出した。副長が口をひらいた。「さあ、みんな。船長のご招待だ。この船じゃ豪華客船のような食事はだせねえが、それでも腹がちゃんとふくれるだけのものはだすぜ」

が、タバン船長とその部下たちはなぜか目をきよときよとさせるだけで動き出そうとはしなかった。副長は眉をひそめ、タバン船長にちかづいた。

「どうした、あなたたち腹はへつていねえのか？」

副長が一歩ちかづいただけでタバンの顔は蒼白になった。あわてて手をふりまわし、あとずさる。

「やめてくれ！ おれたちにかまわねえでくれ！」

ん？ というような表情が副長の顔にうかんだ。

「なんだ、なんだ。あんたらいつたい、なにを怖がっているんだ」

「おれはマツソの町でこの飛行船をなんども見たんだ。この飛行船はいつも魔王の城のある北の山脈のむこうから飛んでくるんだ。こいつに描かれているマークを見たら。ありや、魔王の紋章にきまつてら！」

タバン船長の言葉に副長はかつとなつたようだった。

「なにを馬鹿なことを……！ この飛行船は神聖ゲゼン帝国の正式な飛行船部隊の一隻だし、描かれている紋章もゲゼン帝国の由緒ある「事象の地平線を見渡す目」を图案化したものだ！ 魔王の紋章だって？ それじゃあんたは魔王の紋章というのがどういうものか

知っているのか？」

言われてタバンはぐつとつまつた。

副長は身をそらせた。

「ほうら見る！ あんたらマッソの連中はおれたちの船を見てこわがるが、その実ほんとうのことはなにも知っちゃいないんだ。魔王だつて！ 冗談じゃねえ、おれたちこそ魔王のちからに対抗しているんだ。おれたち神聖ゲゼン帝国がなかったら、マッソの町なんかあつというまに魔王の軍勢に蹴散らされているところだ」

へえ、とタバンは副長を見上げた。

「魔王の軍勢に対抗しているんだつて？ それじゃあんたら、魔王と戦っているつていうのかい？」

副長はいやいや、と首をふった。

「戦っている　といえるほどりっぱなことはしちやいねえ。魔王の魔力をくいとめているだけで精一杯のところさ。しかしおれたちのはたらきがなけりや、魔王はいまごろマッソの町はおるか、トラントンの町まで支配しているところだよ」

タバンの顔に尊敬の表情がうかぶ。

副長はどん、とタバンの背中をたたいた。

「それより飯だ！ 腹がへつていちゃ、なにを見ても気分がめいるつてもんだ。さあ、いこうぜ」

なんとなくそれでタバン船長のうたがいもはれたようだった。副長とタバンは肩をそろえて歩き出した。それを見て、部下たちもつづく。

全員、飛行船の食堂に集まり、飛行船の乗組員が食器をくばりはじめた。食器はすべて金属製でできていた。じつと三村が食器を見つめているとヨーリが声をかけた。

「食器に興味があるの？」

「い、いや……」

ヨーリに見られていたと思って三村は顔をあからめた。

「陶器や磁器で食器をつくると万が一のとき割れて怪我をすること

があるからね。だから食器はなるだけ金物にすることになっているさ」

ふうん、と三村はうなずいた。そこへ乗組員がおおきな寸胴を運んできた。ほかほかとした湯気が寸胴の蓋からもれてくる。乗組員は中身をよそってみんなの皿にもりつけていった。山田はスプーンをつかってそれを口にはこんだ。どろりとした、香辛料がふんだんにつかわれた粥状の食べ物である。つけあわせにボイルしたソーセージと、つぶしたポテトがついていた。まずくはないが、とりわけ旨いというわけではない。そんな山田の顔色を読んだのか、ヨーリ船長は口を開いた。

「こんな空の上じゃこった食事はできないから、がまんしておくれよ。まあ、腹はくちくなるはずだ。ゲゼンについたら、ちゃんとした食事をだせるから」

ヨーリ船長のことばにタバンは目をむいた。

「失礼、いまさっきなんと……？」

「ゲゼンに行く　と言ったつもりだけど、それがなにか？」

「わしらはてつきりマッソの町へむかうものと思って……」

タバンはへどもどと言いつをした。

「マッソの町にはこの飛行船を係留する設備がないから着陸できないの。ゲゼンについたらそこからあなたがたはマッソの町へ帰ればいいわ」

なるほど、とタバンとかれの部下は納得してスプーンをつかってもくもくと食事をつめこめはじめた。そんなタバンたちをヨーリはじつと見つめ、話しかけた。

「ねえ、タバン船長。相談んだけど、あなたがた船をなくして困っているのでしょうか？」

かちやり、と食器をおいてタバンは顔をあげた。

「まあ……そうですが……」

「わがゲゼン神聖王国では魔王と戦うために兵士を募集しています。あなたがたが募集に応じてくれれば、わがゲゼン神聖王国飛行師団

は歓迎しますよ。あなたは長い間船長をつとめていたから、飛行船の一隻をあたえ、船長としてむかえることもあたしの一存で決定できるんです」

「なんですと……」

タバンはあつけにとられていた。いつもは青白い顔色が、このときばかりは紅潮している。部下たちも食事の手をとめ、じっとタバンのほうを見つめていた。

ヨーリはにっこりと笑いかけた。

「まあ、いきなりの話しなので返事は急ぎません。ゲゼンへ到着するまで考えてください」

タバンはうなずき、目の前の食器を見つめ考え込みはじめた。

ヨーリはふたたび三村に顔をむけた。

「さて……のこったあなたがたですが、いったいあなたがたの目的はなんですか？ タバン船長の船に乗ってマッソをめざしているのはなぜ？」

三村はゆっくりと答えた。

「僕たちの目的はあなたがたと同じです」

ヨーリの瞳がおおきく見開かれた。

「僕らは魔王を倒すため旅をしているんです」

そうして三村はドラン公国のコーラ姫が魔王にさらわれてからのことを要領よく説明していった。もちろん、現実世界からこの世界へ転移したことはふせている。何度もさまざまな場面で説明をくりかえしているのです、その説明は滑らかだった。

三村が説明をおえると、ヨーリの瞳はきらきらと輝いていた。ほぼはピンクにそまり、あきらかに感銘をうけている様子だった。

「すばらしいわ！ 魔王と戦っているのはわたしだけだと思っていたのだけど、こんな勇者のみなさんが参戦してくれるとは！ ぜひあなたがたはわがゲゼンへいらしてください、法皇さまにお会いしてもらわないと！」

「はあ？」

三村のくちがぽかんと開いた。ヨーリは興奮していた。

「法皇さまはわがゲゼンで魔王の魔力を封じるちからの持ち主なのです。しかしさすがの法皇さまもちかごろは寄る年波には勝てず、その法力もよわまるいっぽうなのです。このままでは魔王の魔力に圧倒されるかもしれないと案じていました。ですからあなたがたの助力が必要なのです」

両手を机におき、ヨーリは立ち上がった。

「お願い！　ぜひ法皇さまに会ってください！」

「妙なことになったなあ」

市川は嘆息した。

食事がすみ、四人は飛行船の中に部屋をあてがわれた。山田と市川、洋子とエレンはそれぞれ一部屋で、ベッドがふたつある部屋で、三村だけひとり部屋だった。どういうわけか三村のことをこの世界の人々は高貴な身分の人間と思い込む傾向がある。したがっているような場面で特別あつかいをされるのだが、ほかの三人はそれになれてきていた。

「まさかこの飛行船の船長が、エレンの妹だとはなあ！」

山田が市川の言葉に合いの手をいれる。

そのエレンはこの部屋にいない。

船長室にヨーリと向かっている。たぶん、姉妹で積もる話しに夢中になっているのだろう。

市川は肩をすくめ口を開いた。

「まったく。しかしどう考えても都合のよすぎる話じゃないか？　難破して、そこで助けられた相手の船長が妹だなんて」

山田はぶつ、とふきだした。

「木戸さんの、ストーリーづくりの下手さが露呈したって感じだな……。こんなご都合主義、最近じゃライトノベルでも珍しいんじゃないか？」

「ちよっと、木戸監督のことはどうでもいいでしょ！　とにかく設

定よ！ あんたら、家へ帰りたくないの？」

無駄口をかわしていた市川と山田は洋子に叱られ首をすくめた。

三村、市川、洋子、山田の四人はその三村にあてがわれた部屋にあつまり、これからのことを相談しようということになったのである。

「ともかくゲゼンという町の設定を描かなきゃなあ」

山田は窓際にちかいところに椅子をおいてすわりこんでつぶやいた。

「ああ、おれもゲゼンの法皇さま？ とかいうキャラの設定をしなきゃ…… そうしないと、この飛行船はどこにもつかないことになるちまう」

市川がそれに同意した。

洋子は首をかしげた。

「それにしても聞いたことのない設定がずっとつぎ出てくるわねえ。ゲゼン、なんて町の名前いままで出たっけ？」

山田はうなずいた。

「企画書のなかじゃなかったな。 もっとも企画書も魔王とたたかう最終場面についてかなりあいまいな書き方をしていたから、監督の頭のなかにあったかどうか疑問だよ。 でもこれでいよいよ魔王とのたたかいが現実のものとなってきたみたいじゃないか！ これがすめば、おれたちもこの世界に帰ることができるんだ」

山田がはればれとした表情をしているのにたいし、市川はややうかない顔色だった。

「どうだかねえ……これが全員ハッピー・エンドになるって思っているのか？」

え？ と、ほかの三人が市川の顔を見つめた。市川は言葉をついで説明した。

「いや……、もしも監督の頭のなかに登場人物のだれかを犠牲にしよう……なんてことがあったらどうする？ ほら、たいていこういうファンタジーじゃ、最期の決戦で仲間をすくうためだれかが犠牲

「なって死ぬ……なんて場面が出てくるじゃないか」

市川の言葉にみな凝然となって声をうしなっていた。

洋子は首をふった。

「木戸さんがあたしたちのだれかを殺そうと考えているっていうの？ そんなこと信じられないわ。いくら作品のためだって、あたしたち仲間だったじゃない」

「うん、現実世界ではね。でも木戸さんがおれたちがこの世界に放り込まれて冒険をしているってこと、承知しているかどうかどうしてわかる？」

「ああ……」

洋子はうなずいた。

「そうよね……、あれから木戸さんはあたしたちの前から姿を消しているし、たぶんなんらかのかたちでこの世界のストーリーづくりに関わっているんでしょうけど、あたしたちがこんな苦労していることなんて想像しているかどうかね……」

「そうさ。この四人のなかじゃ、いちばん死ぬ可能性のたかいのはおれだよ。」

三村くんはどうやらこの物語の主役らしいから最期まで死ぬことはないだろう。山田さんも準主役っぽいから最期まで登場するんじゃないかな。洋子ちゃんだってこの物語のヒロインだ。

となると、いちばん死にそうな役割はおれだってことになる。ほら、たいていの冒険物語で最期に死ぬのはおれみたいなタイプだろう？ それまでは地味な役割に甘んじているが、最後の最後で派手な死に方をして視聴者の記憶にきざみこまれる……そんな役割だ」

山田は笑顔になった。

「おいおい……それをいうならおれたち四人、だれをとっても最期に仲間の犠牲になって死ぬ可能性はあるぜ。」

三村くんが主役だっていうが、もしかしたら主役は市川くんのほうかもしれないじゃないか。おれだって役割の地味さからいうとどっこいどっこいだ。洋子くんだって、木戸監督がここはヒロインの

死が必要だ……なんて考えるかもしれないじゃないか」

「やめてよ縁起でもない！」

洋子はさげんだ。

市川はふいに乾いた笑い声をあげた。

「はははは……どうも考えすぎちゃったみたいだ……悪い！ 変なこと口走ったみたいだ……」

山田は立ち上がった。

「ともかくおれたち設定書を描こうじゃないか。はやくこの冒険を終わらせたいよ」

市川もうなずいた。

「わかった……、とにかく仕事をすませようや」

夜中になって市川は目をさました。

壁をつたわって飛行船のエンジンの振動が「ごうん、ごうん」と響いてくる。なぜ目が覚めたのだろうと天井を見上げていると膀胱が尿意ではりさけそうになっていた。

トイレにいかなきゃ……、とベッドから身をおこすと部屋のすみがあかるい。

なんだとそちらを見ると、この部屋に用意されている机に蠟燭がともされ、その前に同部屋の山田が背中をまるめ、なにかを描いている。

まだやってる……、と思いつつ尿意にうながされ市川は部屋を出て廊下をあるいた。すぐさがトイレになっている。トイレの便器は開放式で、底から夜の海面がはるかにのぞける。つまり垂れ流しなのだ。

ようやく膀胱をからにして市川は部屋にもどった。

あいかわらず山田は机にむかい、せつせと手を動かして用紙にむかっていた。

「まだやってんですか山田さん」

声をかけると山田はうん、とうなずいたが返事もせず鉛筆を動か

し続けた。市川は好奇心にかられ山田の背中越しに設定書をのぞきこんだ。

そこには険阻な山脈にそびえたつ奇妙なかたちの城があった。用紙の右上に「魔王の城」とタイトルがある。

「魔王の城の設定すか？」

ああ、と山田はつぶやいた。

市川は山田の机にほかにも設定書があるのに気づいた。みな魔王の城の設定で、城の詳細な構造や階段、門、廊下などがこまごまとした描写で描かれている。

「これ、魔王の城の内部……」

市川は一枚の設定画を手にとった。そこに描かれているのは城の内部である。石組みであるところは、苦悶の表情をうかべた無数の人体がはめこまれている。

「人間が壁になっっているんだ」

山田はうなずいた。

「うん、木戸さんと魔王の城について打ち合わせしてたからね。なんでもものをうけた人間が彫刻になって城をつくっているんだそうだ」

市川は不安になった。

「あのう……これ、背景でやるんでしょう？」

いやあ、と山田は嘆息した。

「まさか……、これは作画の担当だよ。背景マンが、キャラを描けるわけないじゃないか！」

いやいや……、と市川は手をふった。

「そんな！ セル描きなんて作画だってやりませんよ。だってこれ、どう見ても背景の担当ですよ！」

しばし山田と市川はにらみあった。ふつと目をそらし、山田は肩をすくめた。

くくく……。

山田はしのび笑いをした。市川も苦笑いをうかべ口を開いた。

「ずいぶんがんばるなあ。魔王の城にいくのはまださきだろうに……」

市川にそう言われ、山田はつぶやいた。

「なんだかこうして仕事をすませておけば、はやく家に帰れるんじゃないかと思ってるね」

市川はひそかに恥じ入った。

そそくさと山田のもとを辞して外へ出る。

目はすっかり覚めてしまっていた。

ちよつと散歩しようかとあるきだす市川は、三村の姿を見た。

かれは廊下から、外の景色を窓から眺めているようだった。

あいつが三村か……。

市川は制作進行の変貌振りに驚いていた。

スタジオの中で、所在無げにうろついていたあの制作進行マンの姿はいまはない。ひょろりとした瘦身は、いまでは堂々たるヨーロッパの王子様、といった姿だし、マントを羽織ったその横顔はまるで別人である。

かれは市川に気づき、顔を向けるとかすかに会釈した。

思わず膝まづいてしまいそうになる衝動を市川は抑えた。それほどいまの三村は貴族的とっていい容貌を持っている。

「お前さんも眠れねえのかい？」

市川はしいてぎっかけない口調で話しかけることで三村の影響を脱しようとしていた。

三村はかすかにうなずいた。

「ねえ市川さん、ここに来る前の生活思い出しますか？」

「当たり前だろう！ 夢に見るくらいだ。おれのアパートには限定物のフィギアが並べているんだ。おれが帰るまで、無事でいるかひやひやしてんだ」

「そうですね……。だけどぼく、なにも思い出せないんです」

なにを言い出すのか、と市川は三村の顔を見つめた。三村はなにか思い悩んでいるようだった。

「ここへ来る前、ぼくアパートで暮らしていたはずなんですが、そのアパートの名前が思い出せないでいるんです。それに……」
「それに？」

三村は眉を寄せた。

「じつは両親の顔も思い浮かべることができないんです……！ 思い浮かべることの出来るのは、こっちに来てからのことばかりで……ねえ、市川さん。ぼく、三村ですよ。制作進行の」

市川はうなずいた。

「当たり前だろう！　なんでそんなこと思うんだ？」

三村はふたたび窓の外に視線をもどした。

「その、たびたびじぶんの名前が三村なのかパツクなのかわからなくなってくるんです。急速にじぶんが変わっていくようで……。なんだかこっちのじぶんが本当のことみたいで……」

市川は首をふった。

「そりやお前さん、思い過ぎだよ。考えてみるよ。この世界は、木戸監督の頭のなかで出来上がった世界だぜ。少々、ファンタジーとしては月並みな道具立てだけだな」

市川の軽口に、三村はうつすらと笑いをうかべた。

「そうですね……」

「寝ろよ。あすは早いっていうぜ」

「おやすみなさい、と三村は返事をしてじぶんの部屋へもどっていった。」

その後ろ姿をながめ、市川はこれからあいつどうなっちまうんだろうと心配だった。

三村が一番、この世界に来て影響をうけているようだった。

魔王（前書き）

いよいよ魔王がその姿を現す！

魔王

「まだ三村さまはこないの！ あたし、いつまで待てばいいのよっ！」

いらいらした女の声があたりに響いた。

豪華な装飾にかざられた大広間である。壁にはすきまなく名画がかけられ、床には足首までうまりそうな絨毯がしきつめられている。まるで家ほどもありそうな巨大な暖炉にはあたたかなオレンジ色のほのおがゆらめき、そのまえには重厚な長いす、テーブルがおかれ、いすにはコーラ姫がだらりと横になっていた。彼女のまわりには数人のメイドがはべり、あるものは姫の髪をとかし、あるものは姫の爪の手入れをしていた。ひとりが銀の盆に山盛りのフルーツをもってきてひざまづいた。コーラ姫はものうげにそのなかのひとつをとって、口にもっていった。

かりつ、と前歯でかむと果汁があふれ、唇からたれる。それをメイドのひとりがすばやく絹のハンカチでやわらかい手つきでふきとった。

「ねえ、なんとか言ってよ。あんた、ずーっと黙ってばかりじゃない……」

コーラ姫は虚空にむかつてさげんだ。まわりのメイドは聞こえないふりをしている。

あの”声”はふつつりと姫に話しかけるのをやめていた。姫のさまざまな要求をかなえてから、もう彼女のことは関心がなくなっただけのようだった。

豪華な家具、そして贅沢な料理、忠実な召し使いにかこまれ姫は孤独だった。彼女の要求したこれらはつぎつぎとかなえられたが、姫の世話をしてくれる召し使いは彼女がなにを話しかけてもあいまいな返事しかせず、まるで生きている人形のようだった。

コーラ姫は立ち上がるとのろのろと歩き出した。彼女のすまいは

故郷のドラン公国の城にくらべはるかに豪華だった。おそろしく高い天井にはいくつものシャンデリアがさがり、あたりをまばゆく照らしている。

ここに数ヶ月くらしているがいまだに彼女はこのすまいの全体像をとらえきれていなかった。ちよつとあるただけで彼女はすぐ迷子になった。しかし姫がひと声命令すればすぐにどこともなく召し使いの一団があらわれて帰り道を教えてくれるから心配はしていなかった。

また迷った。

あたりは暗い。

手をのばしてみるとざらざらした石の面にふれる。彼女のいつも暮らしているエリアはつるつるした大理石ばかりなので、このような感触ははじめてだった。

どこかしら……。

姫はいつものように召し使いをよぼうと思ったが気をかえてそのまま歩き出した。

いいではないか。迷子の気分もわるくはない。

ほの暗い廊下を姫は後ろ手にくみながらぶらぶらと歩き出していた。暗いとはいってもほのかなあかりが満ちている。

天井近くの壁面にはなにやら見慣れぬ彫刻がぎざまれている。

人間の彫刻と思ったがよく見ると頭には角がはえ、背中からは蝙蝠のような翼がはえた魔物の彫刻である。反対側には竜の浮き彫りがある。

気がつくとも空気がひやりとしたものに変わっていた。壁面もまたじつとりとした空気のせいでわずかに濡れているようだ。

あたりの彫刻もまた気味の悪いものに変わってきていた。ぞわぞわと姫の背中にさむけが這いのぼりはじめた。

くるりときびすをかえすと、いま来た道を引き返そうと歩き出す。が、姫の歩みはとまった。

真つ暗な闇があたりをつつんでいる。いつのまにか、じぶんの指

先も見えないほどの暗闇に姫は立っていた。

「だれか……」

姫の声は真つ暗な闇にすいこまれた。反響もなく、いまじぶんがどんな空間にいるかもわからない。

！

なにかの気配に姫はぞつとなつた。

なにかいる！

圧倒的な存在感が闇のむこうから漂ってくる。それはなんと形容していいのかわからないが、たしかな感覚がつたわってくる。

……

……

……

なにかものがうごめく気配。

かちかちという音に姫はぎくりとなつた。それはじぶんの歯が細かくふるえてかち合っている音だった。

「だ、だれ……だれかいるの」

やっとの思いで姫は声をふりしぼった。

くくく……。

闇の向こうにしのび笑いがもれた。

「ドラン公国のコーラ姫よ……」

その声は闇の中からひくく響いてきた。その声がまるでじぶんの耳のすぐそばで聞こえてくるような気がして彼女は飛び上がった。

だしぬけにあたりにながみちた。

それは蝋燭のわずかなあかりであつたが、闇にしずんでいた姫にとっては真昼のひかりのようで痛みになえにた明るさに彼女は目をしばたかせた。

姫は総毛だった。

そこにそれはいた！

「魔王……」

姫はつぶやいた。

たしかにそれは魔王だった。それがいい、言いようはない。

巨大な、それじたい家ほどもありそうな石造りの椅子に魔王は腰をおろしていた。魔王の体もまたとほうもなく巨大だった。

皮膚は甲虫の甲羅をおもわせる光沢のある緑色で、蠟燭のゆらめきにつれさまざまな色に反射する。

顔はひきのばされた骸骨のようで、くちもとはは姫の腕のふとさほどもありそうな牙が上下にむきだしている。

魔王の瞳に射すくめられ姫は凍りついた。

まるで瞳そのものの内側にほのおが燃えているかのようにルビー色に輝いている。魔王は目の前の姫をじっと見つめていた。姫はその視線をはずそうとしたが、まるで命令されているかのようにすすことすらできないでいる。

魔王はにたりと笑みをうかべた。

その顔のつくりから笑いをうかべることなどできないと思われたが、まるで部品を組み合わせるかのように関節が変形して笑いの表情をつくったのだ。

「なるほど……たしかに美しい……。わが魔王の花嫁としてもうしぶんない……」

「花嫁……？ わたしが？」

魔王のことばに姫はぽかんと口をあけた。あまりに意外なことだったからだ。

「そうだ。わしはずーっと考えていた。わが子孫をつくることを……。さまざまな手段をつくってさがしてきたが、わが花嫁にふさわしいのはおまえしかおらんとわかった」

魔王は石造りの椅子から立ち上がった。ずしり、と片足をふみだす。そしてもういっぽうの足もまた前へつきだされた。

ずしり、ずしり、と重々しい足音をたて、魔王はゆったりと姫にむかってきた。姫は凍りついたように動けなかった。

無造作に魔王は腕をのびし、姫を手のひらにつつまこんだ。ふわりと、と姫の体がうきあがる。姫の体は魔王の手のひらにすっぽりと

おさまるほどだった。魔王は姫を自分の顔にちかづけるとしげしげとのぞきこんだ。

「わが花嫁になるのだ……コーラ姫！」
姫は気をうしなった。

聖都（前書き）

一行は聖都ゲゼンに到着する。そこでかれらは魔王を倒すための聖なる装備の情報をえる。その装備を手に入れるにはある試練をうけなければならないが……。

聖都

「これでキャラ設定ぜんぶおわりだな」

市川はつぶやくと鉛筆をおいた。目の前には恐ろしげな魔王のキャラ設定書がある。

ここは聖都ゲゼンの城のなかに用意された四人の部屋のひとつである。ヨーリ船長に飛行船ではこばれた四人は、ゲゼン側の歓迎を受け宿泊施設をあたらえたのだ。落ち着いたかれらはいまのうちに残った設定をおわらせておこうということになり、仕事をすませたというわけだ。

三村にできあがったキャラ設定をわたすと、いつものように空中にまいあがり消えてしまう。

「設定がおわった、ということは、この世界に魔王が実在することになったということですね」

三村のことは山田はうなずいた。

「そういうことだ。つまりおれたちがいつか市川くんが描いた魔王と戦わなくてはならないってことだ……。なあ、このストーリー本当にハッピー・エンドになるんだろうなあ？」

魔王との対決がまじかに迫ったのを感じ、山田は不安そうだった。山田はふと窓の外を見やった。からりと晴れ上がった空に、遠くかすむように山脈がそびえている。山脈にはどすぐろい雲がかかり、陰鬱な雰囲気をはっしていた。

あれが魔王のすむ岩山か……。

山田はようやく魔王の住処を間近に見るところまでやってきて、つめたい恐怖がこみあげてくるのを感じていた。あの岩山のどこかに、魔王の城があるのだ。

「そう思うようにしようぜ。とにかく、おれたちがもとの世界に戻るには、このお話しをおわらせなきゃならない……。おい、もともとこれは山田さんの言い出したことじゃないか。いまさらあんたがそ

んなこと言い出すなんてどういうことだい？」

市川に言われ、山田は首を振った。

「そりやそうだが……なにしろすべておれの推測だからなあ」

洋子は肩をすくめた。

「まったくあんたらいつまでくよくよ考えているのよ。とにかくこうなったら、やるしかないのよ！」

と、部屋の外、廊下から複数の足音が近づいてくると、ドアをノックする音が響く。三村は答えた。

「どうぞ」

ドアを開けたのはヨーリ船長だった。背後に兵士をしたがえている。

「みなさん、法皇さまが面会なさります。謁見室へおいでねがいますか？」

彼女のことはに四人は立ち上がった。聖都ゲゼンに到着していよいよこの国の支配者との面会なのだ。

船長は全員が立ち上がったのを確認すると廊下を歩き出した。そろそろ彼女のあとをついていく一行のうしろから兵士がついていく。

聖都ゲゼンは壮麗な城壁をもつ城砦都市である。幾重にもとりまぐ城壁のなかには市街があり、市民の食料を確保するための農地や牛や馬を飼うための家畜小屋がたちならんでいる。城砦の中心には岩山がそびえ、その岩山をかかえるように宮殿が建てられていた。

宮殿の裏手からはもうもうと蒸気がたちのぼっていた。

そこは工場地帯である。

ゲゼンはもともと炭鉱であった。その炭鉱から石炭をほりだし、燃料として製鉄所を運営し、さまざまな工業製品をつくりだしていた。この都市ではあらゆるものが自給自足されていた。食料から武器まで、さまざまなものが生産されている。

廊下をゆく一行の前にエレンがあらわれた。彼女のそばにも数名の兵士が従っている。彼女は四人を目にするとにやりと笑いかけた。

「あんたならも法皇さまに会いに行くの？」

「きみもか」

三村がこたえたとエレンはうなずいた。

「まあね、あたしは法皇さまなんかには用はないんだけど、どうしても言うからしかたないじゃない？」

エレンのことばにヨーリはむっとしたようだった。

「お姉ちゃん、法皇さまと面会するときは礼儀をわきまえていてね！」

わかった、わかった、というようにエレンは肩をすくめた。

ヨーリはことさら肩をそびやかすように歩をすすめた。

市川はふと窓の外に目をやった。

ぬけるような青空にときおりぱりぱりと閃光がはしり、網目のような模様がうかびあがる。

「雷にしちゃ、妙だな」

そのつぶやきに、ヨーリは市川をふりかえった。

「魔王の攻撃です。魔力でこのゲゼンを攻撃しているのです。法皇さまの法力によって結界がはられているので、あのように見えているのです」

「へえ……」

市川は肩をすくめた。ヨーリのくちぶりから、こういったことは日常茶飯事らしい。常時、魔王の攻撃をうけているということは想像もつかないことだった。四人の目には、聖都ゲゼンは平和で、みちたりたように見えていたからである。

「こちらです……謁見の間です」

ようやくかれらは謁見の間にたどりついた。

そこはいままで見た中でもっともひろびろとした場所だった。天井は丸屋根で見上げると首がいたくなるほど高く、巨大なシャンドリアが垂れ下がっている。壁も床も、すべて大理石でできていてこまかな彫刻がほどこされていた。どこことなくローマ帝国の議事堂という雰囲気である。

床には青色の絨毯がしきつめられ、一段高くなっている場所に玉座があった。一同が揃っている場所から玉座まではおよそ百メートルはあった。

山田は壁にほどこされた彫刻を見回し思った。おれの描いた設定画がこんなふうに現実のものになるとはなあ……ラフで描いた設定画がきちんと形になっているのを確認するとちよつとうれしくなってくる。

床の絨毯の毛足はながく、四人の足音をすっかり吸いとってしまふ。

謁見の間には静寂が支配していた。

玉座に近づいてようやくこの部屋のあるじのすがたがはつきりとしてきた。

法皇である。

それは十才足らずの少女であつた。

巨大な大理石でできている玉座にくらべ、彼女のすがたはあまりに幼かった。ちょこんとすわった両足は床につかなくてぶらぶらとたれている。まっかな法衣をまとい、あたまにはおなじまっかな帽子をかぶっている。法衣にも、帽子にも金の縫いとりで複雑な紋章が描かれていた。彼女の髪の毛はながく、腰のあたりまで伸びた金髪で、まるで本物の金の細糸をたばねたようだった。肌はぬけるようにしろく、瞳はうすいブルーである。彼女は四人がちかづくのをみとめ、かすかにうなずいたようだった。

まわりには彼女をまもるかのように幾人もの衛兵が武器をかまえ立ち並んでいた。全員豪華な紋章を浮き彫りにした鎧兜を身にまとい、身長の数倍ほどもありそうな長い槍を手にしている。

ヨーリは法皇のまえにすすみでると、さつとばかりに膝まづいた。あわてて四人とエレンもそれにならう。ここにくるまでヨーリは口うるさく謁見の儀式を教えていた。

「法皇さま。ここに魔王と戦おうという勇者たちをお連れしました。ねがわくば、お言葉をたまわりたくぞんじます」

少女はかるくうなずく。とん、とかるく足を踏みだし、椅子からおりと歩き出した。

「みなのもの、この世界を滅びにみちびこうとする魔王と戦おうという決意、まことに大儀である。わらわはこの聖都ゲゼンで魔王の魔力をくいとめているが、いつまで続けることができるかこころもとない。おぬしらが魔王を倒すことをねがってやみませぬ」

彼女の声は年相応にほそく、おさなかつたが、凜としたひびきがあった。口調ははっきりとしていて、まるでおとなそのものだった。少女のくちもとがにつこりと笑みのかたちになり、あどけないとっていい表情になった。

「しかしそなたたちがいくら勇者とはいえ、いまから魔王の城へのりこむのは無謀というもの。わらわがそなたたちにちからをかすことにします。この聖都にはふるくから勇者があらわれたとき、その手にわたるようにいくつかの聖なる武器、防具が所蔵されています。まことの勇者なら手にすることができでしょう」

三村は顔をあげた。

「それはどういう意味なのでしょう？」

少女はこたえた。

「宝物を手にするには試練をくぐりぬけなければなりません。いままで何人も勇者が試練にたちむかいましたが、残念なことにだれも成功したものはおりませぬ。あなたがたがまことに魔王と戦うだけの資格があるかはその試練にたえなければなりません」

そんなこつたるうと思つた……。山田は胸のうちでつぶやいていた。そうそう簡単に魔王と戦えるわけないよ……。

が、三村はまっすぐ法皇の目を見つめ口を開いた。

「その試練とはどのようなものでしょう」

「城の地下深く、かつて魔王が生を受けた魔窟が存在します。この聖都はその魔窟のちからを封ずるために建てられたもの。ゲゼンがここにあるうちは魔王の魔力は完全なものとはならず、魔王が世界を征服することを阻止しております。しかし邪悪なちからはいまだ

に魔窟にみちております。かつて魔窟の力を封ずるために幾人かの聖者がなかに踏み込み、魔窟にすくう魔物と壮絶なたたかいを繰り広げました。しかし魔窟にはふたたび魔物が巢食い、危険な場所になっております。それらの魔物を倒し、まことの勇者であることをしめせば、聖なる宝をさしあげます」

三村は決然と宣言した。

「それならわれわれがその宝物を手に入れましょう！」

少女はうなずいた。

「よくおっしゃいました！ わらわはあなたがたが首尾よく魔窟より生還し、まことの勇者であることをしめすことを祈っております」

「まったく信じられないよ、三村くんがあんなこと言うとはなあ」
一同が部屋にもどると市川が感心したように口を開いた。三村は市川の言葉に恥じ入ったように首をすくめた。

「すいません、どういうわけかじぶんでも意識しないうちにあんなこと言ってしまった……」

エレンもまた四人にくつついておなじ部屋にきていた。彼女は首を振った。

四人が注目すると彼女は口を開いた。

「あんたら、ほんとうにわけがわからないよ。いったい法皇さまの前でその三村とかいうひとが誓ったときと、いまのあんたはまるで別人だ。それなのに、あんたらはまるで気にしていないみたいだ。いったいあんたらは何者なんだい？」

くすり、と洋子がわらった。エレンはきつとなって洋子をにらんだ。

「なんだい、なにがおかしいんだい！」

「ごめんなさい……、あたしたちと会う人みんなあんたとおなじこ
と言うからおかしくなってるね。この三村くん、どう見てもどこかの王子様って格好だけど、とんでもない。あたしたちだって戦士なんてがらじゃないし、そもそもこんな冒険にまきこまれたのもあたし

たちの本意じゃないのよ。まあ、あたしたちと一緒にくるなら気にしないことね」

エレンはわけがわからない、といった表情になった。彼女の理解のそとなのだろう。

「聖なる武器、防具かあ……」

山田がつぶやいた。

「どうしてもそいつを取りにいかなきゃならぬらしいな」

市川がこたえた。山田はうなずいた。

「うん、それがあれば魔王と戦えるらしいからな。まあ、なんともなるだろ」

エレンは立ち上がり、ドアに近寄ると、四人にむけて口をひらいた。

「あんたら、そんな軽い気持ちで魔窟にはいるなんて信じられないわ！ 言つとくけど、あたしを頼らないでね。危なくなったらあたしはさつさと逃げることにするから覚えておいて！」

市川は顔をあげた。

「おいおい……、あんたも魔窟へもぐろうつてのか？」

エレンはふつと笑った。

「あたりまえじゃない！ 宝物と聞いて黙っていられるわけないわよ」

さつと身を翻し、彼女は部屋を出て行った。

四人は顔を見合わせた。

「どうすんだ？ あの女盗賊、ついてくる気だぜ」

市川の言葉に洋子は肩をすくめた。

「いいじゃない、ついて来たいというなら勝手にさせましょうよ。それよりあんたら、やつとくことがあるんじゃない？」

え？ と山田がぽかんと口をあけた。

洋子は言葉をつづけた。

「魔窟の設定よ！ それに宝物の設定に、魔物のキャラクター設定！ わすれたの？」

ちえ、と市川は舌打ちをした。

「そうかあ、それがあつたかあ！ あーあ、面倒くさいなあ。まったく自分で設定した魔物と戦うんだから世話ないよなあ」

山田はにやにやと笑いながら答えた。

「しょうがないよ。まあ今夜中に仕上げておこつや」

ふたりは机に紙をひろげ、筆記具を手を取った。

試練（前書き）

聖なる装備を手に入れるため、かれらは試練に挑戦する。

試練

魔窟の入り口はゲゼンの鉾山の坑道の奥深くにあった。

坑道は地上から数百メートル下がったところであり、ここまできると空気はじつとりと湿り、ごつごつとしたむきだしの岩盤からはばたばたとしずくがたれていた。

坑道を照らすのは蝋燭の明かりで、ほのおがゆれると影もまた不気味に蠢くのだった。

入り口にはどっしりとした青銅製の扉が立ちふさがり、扉には見るからに身の毛もよだつような怪異な装飾がほどこされている。浮き彫りにされているのは蜥蜴や蛇をモチーフにした怪物であり、よほど古い時代のもものなのか、表面にはびっしりと苔が生えている。

「これがそうなのか……」

山田はつぶやいた。かれの声はせまい坑道の壁に反響してはねかえり、かれは思わずぎよっとなつてあたりを見回した。扉からはひどく邪悪な気配がただよって、それはまるで目に見えるようだった。洋子はぶるつとかるく震え、両腕で胸をかかえるようなしぐさをした。

「寒いわ……」

たしかに寒かった。坑道の奥深く、地下のこの部分の気温は地上より数度気温がひくいようだった。だが洋子のとなりに立つエレンはまるで平気な様子だった。洋子よりさらに露出のおおきなコスチウムにかかわらず、彼女はまるで寒さを感じていないようだった。エレンは洋子に話しかけてきた。

「寒いってどういうこと？」

「え？」

洋子はエレンの顔をまじまじと見つめた。そして合点した。そうか、彼女の語彙のなかに寒さに相当するものはないのだ。だからこんな肌をおもいきり露出した衣装にかかわらず寒そうな顔ひとつし

ないでいられるということである。つまりファンタジーの登場人物に寒さの感覚はあたえられていないというわけである。そうではなくては、こんな衣装を身にまとってられないではないか。

「それでは封印をときます」

それまで一番うしろにいたヨーリが全員の前に進み出てきた。ポケットからちいさな鍵をとりだす。鍵は黄金色にかがやいて、表面にはこまかな装飾が浮き彫りになっている。彼女はその鍵の先端を扉の中心のあたりに近づけた。

鍵穴に鍵がすいこまれる。

と、扉の浮き彫りがいつせいにぞわぞわと蠢きだした。

ぎいぎいぎい……。

ぎいぎいぎい……。

それまで彫刻とおもわれた扉の装飾はまるで生きているかのような動きで這い回った。そして彫刻たちはいっせいに地面に落ちた。あとにはぼつかりと洞窟の入り口が残っているだけだった。蜥蜴や蛇のかたちの彫刻たちがからみあい、扉のかたちをつくっていたのだった。

ヨーリは地面に残った鍵を拾い、四人に振り返った。

「これで魔窟への入り口がひらきました。どうぞご武運を」

四人とエレンはヨーリに見送られ、魔窟の入り口へ進んでいった。かれらが全員はいるとヨーリは口を開いた。

「それではこれをつかって扉を封印してください。ここから魔物が出てきてはけませんから」

そういうと三村は鍵をわたす。

三村は鍵を手にヨーリにもの問いたげな表情になった。

「鍵をかけるだけでいいのです」

言われた三村は鍵を宙にかざした。

するとそれまで地面で這い回っていたトカゲや蛇の彫刻がざわざわと集まりだし、鍵を中心に扉のかたちになっていった。エレンの姿は扉のむこうに見えなくなった。

「と、いうわけか」

ほっと山田はため息をついた。あたりは真っ暗である。このときのためにポケットから火打石をとりだした。マッチがあればいいのに……、と思った。どうやらこの世界にはマッチは発明されていないようだ。

かちかちと火打石をつかって火花をとばし、たつぷりと油をすった松明に火をうつす。ぼつ、と明かりがとまりあかるくなった。そして全員の手に持った松明にほのおを移していった。

「行こうか」

市川がつぶやき、全員その言葉にうなずいた。歩き出す。みな、神経をぴりぴりとはりつめさせていた。

松明のあかりにうかびあがる洞窟は、鉱山とはちがって自然にできあがったもののようなだった。鉱山には強度をたかめるための木材の梁やつつかえ棒があったのに、ここではむきだしの岩がごつごつとしているだけだった。どこかで水滴がぴちやぴちやと音をたてている。地下水がしみだしているのか。

「おれ、よくダンジョンタイプのRPGをやってたんだが、実際にぶんでダンジョンにもぐるとはおもっていなかったな」

市川はしいて陽気な声をあげた。

それをうけて三村が問いかけた。

「ダンジョンRPG？ ウィザードリイかい？」

「ああ、これでもシリーズ全部やってるんだ」

「なるほどね」

「もう……！ これはゲームじゃないのよ、ふたりともまじめになりなさいよ！」

洋子がいらいらしながらつぶやいた。

エレンは三村に聞いた。

「ゲームって、なんなの？」

三村は肩をすくめた。

「コンピューター・ゲームのことさ」

エレンは首をふった。まったく三村の言葉が理解できないという表情である。

一行はどんどん魔窟を進んでいった。みんなの口は重くなり、黙りこくっていた。

ふいに道はひろびろとした場所にでた。

「すげえ……」

市川は声をあげ、松明をかざした。

ほう……、と全員がため息をついた。

「きれいなえ」

洋子が思わず感想をもらす。

鍾乳洞だった。

巨大な空洞の壁面にさまざまなおおきさの鍾乳石がたれさがり、それらは松明のあかりをうけぬれぬれとした光沢をはなっていた。なによりその鍾乳洞はしぜんのだームをかたちづくり、どこか聖堂のようなかたちになっている。

「お客さまかね……」

うつろな声が洞窟に反響し、全員驚きにとびあがった。

「だれだ！」

市川がするどくさげふ。

ひっひっひっひっ……、と笑い声が暗闇のむこうから聞こえてくる。

ずるっ、べたっ、というようななにかをひきずるような足音が近づいてくる。へっぴり腰で山田は松明をかざした。

「！」

松明のあかりにうかびあがったのは、ぼろぼろのマントを身にまとった老人だった。片手にはつえをついていた。

「五人か……。また宝をさがしに馬鹿ものどもがやってきおったな」

「あ、あんた、だれだ！」

市川は声をふりしぼって質問した。老人はかすかに頭をふると、顔をおおっているフードをはねあげた。

したからあらわれたのはまつしろな髪の毛をせなかまで伸ばし、胸元までたれさがった髭をはやした老人だった。肌のいろは黒人のようにまっくろで、ふさふさとした眉のしたからぎらぎらとした両目があたりをねめまわしている。

「わしは案内人じゃよ。ここに冒険者がやってくると、魔窟のおくにひそむ怪物のもとへ案内する役目をおっておる……。あんたら、宝をさがしておるのじゃろ？」

そういうと老人はにっ、と笑った。口のなかに残っている数本の歯が黄色くひかった。

五人はうなずいた。

老人は片手をあげ、洞窟の奥を指差した。

「それならあっちじゃ！ さあ、わしについてくるんじゃ。わしの案内がなければ、あんたら迷うてしまうからの……。さあさあ、急いだ、急いだ！ はやくせぬと日が暮れてしまうからな！」

五人はしかたなく老人のあとについて歩き出した。老人はつえについているのに、ひどく足がはやかった。見かけは百歳をこしている。遅れがちな五人を、老人はいまいましたに何度も振り返った。

「急がんかい！ なにをばやばやしておるんじゃ！ ああ、もう！ そんなのんべんだらりとおっては、宝も手に入れることなどできんぞ！」

息をきらしつつ、山田は質問した。

「あ、あのう……なぜ急がなければならぬんです……。ええと、あなたの名前は？」

「わしの名前などくだらん質問じゃ！ わしもあんたらの名前など聞く気はないからな。そらそら、走らんかい！ 日が暮れてしまうぞ！ なぜ急ぐのかって？ ひひひひ……、どうせおつ死ぬんだつたら、はやいほうがええじゃろ？」

市川はむっとしてさげんだ。

「なんでおれたちが死ぬことになっているんだ？」

市川の言葉に老人はけけけと甲高い笑い声をあげた。

「なんと、これまでこの魔窟に挑戦して生きて帰った勇者はひとりもおらんのを知らんのか？ 魔王を倒すための武器、防具をもとめていままで何人も冒険者がやってきては、あわれ魔窟の怪物たちの獲物となってしまうておったわい！ みなひとかどの武芸者ばかりじゃったが、見たところあんたらとても怪物とわたりあえるような感じではないのう……、どうじゃここで引き返すというのは？ いまなら道はまっすぐじゃ。わしの案内がなくとも帰れるよ」

そついうと老人は立ち止まった。

山田と市川はほつと息をついて、あたりを見回した。

広々とした場所に、無数の穴があいている。老人はにやにやと笑って、無数にあいている穴をゆびさした。

「さあ、ここからはあんたらひとりひとりあの穴に飛び込むんじゃ。穴の向こうの試練をくぐりぬければ、あんたらひとりひとりに必要なものが手に入ることになっておる！ さあ、どうするね？ 引き返すか、それともこのまま進むか？」

みな、おし黙った。

岩壁にうがたれている穴は、どれもおなじくらいのおおきさで、どれだけ深いのか黒々とした闇がつづいている。

おたがい目配せをする。

おい、だれが最初にいくんだ？

と、それまでだまっていた三村が一步、足を踏み出した。

「僕が行きます！」

ひやつ、ひやつ、ひやつ、と齒の抜けた口をあけ、老人は陽気な笑い声をあげた。

「よう言つた！ さあ、どれでもよい。好きな穴にはいるんじゃ！ 試練を乗り越えれば、またこの広間にもどれる。おっと、その松明はおいていくんじゃぞ。それがきまりじゃからな」

三村はうなずくと松明を地面に残し、大股に歩き出した。

まっすぐ目の前にある穴に進むと、ためらいもなく入っていく。

すぐその全身が暗闇につつまれて見えなくなってしまった。

「あつ！」

残りの四人はちいさく声をあげた。

「消えちゃった」

市川はぼうぜんとつぶやいた。

三村がはいりこんだ穴は、かれが暗闇に姿を消すと消えてしまったのである。あとにはのっぺりとした岩壁が残っているだけだった。市川はするどく老人をふりかえった。

「じいさん！　いつたい、ありやどうということだ？　三村はどうなつちまつたんだ？」

老人は首をふった。

「知らんよ。試練の穴は、試練をうけようとする人間を受け入れると消えてしまう。ただ、あのなかの試練を乗り越えたものだけがもとのところへ戻れるんじゃない」

「失敗すれば？」

「ふたたび穴がひらく。次の犠牲者が穴にはいる……。そのくりかえしさ。さあ、あんたらはどうするんだね？　はいるのか、はいらんのか？」

山田、市川、洋子、エレンの四人はおたがいの顔を見合わせた。

エレンは肩をすくめた。

「あたしはやめとくよ。お宝はほしいけど、命もおしいからね」

山田はぐつと唇を噛みしめ、ほつと息をはいてつぶやいた。

「しかたない……。これもストーリーの一部なんだろう……」

斧をにぎりしめると一番ちかくにある穴へはいつていく。すぐその姿が闇にのみこまれ、穴は消えた。

洋子はたまらなくなつて市川の肘をつかんでさげんだ。

「ねえ、どうするの。あんたまで入る気なの？」

市川は首をふりながらこたえた。

「そつだな……。木戸監督がおれたちを殺す気はないと信じるしかないよ。とにかくストーリーは進めない」と

そつと洋子の手をふりほどくと市川は剣を片手に進んでいった。
そのうしろ姿が闇にのみこまれ、穴は消えた。

残った穴はひとつだけ。

洋子はうなずいた。

「もう！ 馬鹿みたい！」

さけぶと彼女はやけっぱちになって駆け出した。その姿が消え、
穴も消えてしまった。

あとに残されたのはエレンと老人だけだった。

「なんじゃ、あやつら。妙なことばかり話しておったな」

エレンはうなずいた。

「そうなのよ。あいつら、ときどきわかんないこと言うのよねえ…

…」

ふん、と老人はひとりうなずく。

「まあよい。穴はふさがれた。あんたは入る気はないようじゃから、
あやつらが戻るまでここで待つんじゃない。あるいはあやつらが死ぬ
まで……」

「いつそれがわかるの？」

「さあ……はやければ一時間もかからん。ながいときは数日、ある
いは数ヶ月……。わしの知っている冒険者では、五年間も穴がふさ
がったままのがおったな」

エレンは目を見開いた。

「ちよつ、ちよつと、冗談じゃないわ。そんな長い間、こんな暗闇
で待つてろつていうの？ そのあいだどうやって暮らしていくのよ
！」

「なに、なんとかなるわさ。なにしろわしはこの魔窟の番をはじめ
で、三十年になるが、いちども外にでたことはないよ。食い物や水
は手に入る方法を知っておるから、あんたに教えてやろう」

「いやよ！ あたし帰る！」

老人はにたりと笑いかけた。

「扉の鍵がなくてもかね？」

あつ、とエレンは思い出した。そういえば、あの扉を開く鍵は三村が持ったままだった。

「もつ……、最悪！」

へなへなと彼女は座り込んでしまった。

13

ひたひたひた……。

暗闇のなか、じぶんの足音だけがひびいている。

三村はまったくの暗闇を大股で歩いていく。

ふつつ、こういう暗闇のなかを人間が進むと、本能的になにかにぶつからないかと疑心暗鬼になってへっぴり腰になり、数歩進むのも時間がかかるものだが、かれはまったく恐れもなく歩いていった。ときおりかれに訪れるあの奇妙な状態におちいつていたのである。こうなるとまったく恐怖など感じなくなり、ただ目の前の試練をやりとげなくては、という義務感がかれの背を押している。

妙だな……。

三村はそんなじぶんのこころの状態を客観的に観察する余裕すらもっていた。いつもは仲間に話しかけるのさえおずおずとしかできないのに、こうなるといつもの怖気などまったくなくなってしまう。どうしてそうなんだろう？

このこころの状態になると、三村はこの世界とじぶんのあいだにしつくりくる感じを覚えていた。

まるでじぶんにとって本当の世界はこっちで、あの制作会社で制作進行をやっていたのは夢の世界のような気になってくる。

暗闇のなか、三村はコーラ姫の面影を思い浮かべていた。

たった一日しか顔をあわせていないにかかわらず、彼女の顔の形、おもぎしははつきりと思い浮かべることができる。

彼女の顔を思い浮かべるたび、かれのこころに勇気がわいてくるのだった。

これは恋ってやつかな……。そう思うと三村は苦笑した。まさか、アニメの登場人物だぜ……。ふと三村は歩みをとめた。前方があかるい……。かれは緊張した。そつと腰の剣に手をのばす。柄をにぎり、身構えた。だんだんに目が慣れてきて、前方の景色というものがわかってきた。

水音が聞こえる。

三村は進んだ。

噴水だ。

石組みの噴水がいきおいよく水流をほとばしらせている。

これは……。

三村はここがあのドラン城の内庭であることに気づいた。

コーラ姫を最後に見た場所である。

噴水の石組みの縁にひとりの女性が腰かけている。

女性はこちらをふりかえった。

まさか！

三村はじぶんの目をうたがった。

コーラ姫だった。

「三村さま……！」

彼女はゆっくりと立ち上がり、三村に近づいた。

山田は暗闇のなかつき進んでいた。

齒を食いしばり、背をまるめていた。

くるなら来い！

おれは家に帰らなければならんだ。家のローンは残っているし、ふたりの子供はまだ中学と小学生だ。おれには家族があるんだ！　こんなアニメの世界で遊んでいるわけにはいかないんだ！

前方があかるい。

山田は斧をにぎりしめた。

敵か？

いや、なんだかあの明かりはずいぶん見覚えがあるような……。見覚えがあるのも道理、それは山田の自宅のあかりだった。

郊外の一軒家。

かれが一大決心をして購入した建売住宅である。木造モルタルの二階建てで、中古住宅ではあるが、かれの持ち家だ。その玄関のあかりが見えているのだ。

山田は仰天した。

帰ってきた！

「おおおい！」

かれは思わず大声をあげ、駆け足になった。玄関に駆け込むと、ふるえる指先でドアのノブをつかむ。

かちやり……。とかすかな音がしてノッチがはずれドアが開いた。暖かな空気が山田の全身をつつむ。

「パパ！ お帰り！」

ばたばたと足音がして小学生の次女が出迎えた。山田に似て、まるまっつい体つきの少女である。

彼女の顔を見て山田の両目に涙があふれてきた。かれは次女に近づくとものも言わずに抱きしめた。

「パパ……。どうしたの？」

次女は山田の顔をのぞきこみ、首をかしげた。山田は首をふり口を開いた。

「いや……。なんでもないんだ。パパは帰ってきたんだ……。おい、ママはどこだい」

「台所」

彼女の返事を聞くと山田は家のなかに飛び込みキッチンへ突進した。

「あら？」

そこには妻がいた。食器を洗っている最中だった。

山田は立ちすくんだ。

「今日のはやいのね」

「う、うん」

胸がいつぱいになり、山田はもじもじとしていた。妻はどうしたの？ というような笑みをうかべる。その顔を見て山田は妻の体をだきしめた。

「ちょ、ちよつと、やめてよ！ 洗い物してるのよ」

妻は笑いながら山田の体を押しつけた。

山田はうなずいた。

「すまん……」

「変な人ねえ。どうかしたの？」

「いや……」

山田はいままでの冒険を説明しようとしたがあきらめた。いったいあれはなんだったのか、かれ自身説明できないからだ。

「お食事は？」

「そうだな……」

そこで山田はじぶんが腹がへっっていることに気づいた。

「おビール、おつけします」

「ああ、たのむよ」

山田は食卓についた。妻がかれに食事の用意をする。次女がここにこしながら、おぼつかない手つきでかれにビールをついでくれた。そこへ中学生の長女がやってきた。

「パパ、お帰りなさい！ ねえ、ママ、あたしもご飯！」

はいはいと妻はこたえ、食事の用意をつづけた。

家族団らんがもどってきた。

「市川くん？」

「洋子さん？」

市川と洋子はおたがいの顔をみとめびっくりして立ち止まった。

ふたりとも暗闇をめぐらめつぽう歩き続け、前方に足音を聞きつけたのだ。敵があらわれたのかと思ったのだが、目にしたのはおたがいの姿であった。

「どういうこと？ あなた、あの穴にはいつていったんでしょ」

「うん、ずっとまっすぐ歩いていったらと思ったんだけど……。たぶん、どこかでふたつの穴はつながっていたんだろう」

ふたりはあたりを見回した。あいかわらずあたりは真っ暗である。洋子はあることに気づいた。

「ねえ、どうしてこんなに真っ暗なのにあたしたちの姿は見えるの？ どこからあかりがきているのよ！」

「そっぴや、そうだ」

指摘され、市川はうえをふりあおいだ。うえを見上げててもまっくらな空間がひろがっているだけでふたりを照らしているあかりは見えない。

「敵はどこにいろのよ！」

洋子は唇を噛んだ。

市川もあたりを油断なく見回す。

「ここにはおれたちふたりだけだ……」

そこまでつぶやき市川は目を見開いた。むくむくと黒い疑惑が胸にみちる。ふいに目の前の洋子の姿が彼の目にはよそよそしいものになった。まるではじめて見るような気分である。

「おれたちふたり……まさか？」

洋子は市川をふりかえった。

「まさか……、ってどういうこと？」

市川は洋子の全身をじろじろと見つめていた。

「な、なによ」

「あんた、ほんとうに洋子さんなのか」

「どういうことよ」

「もしかしたら試練とはこういうことなのかもしれないな……」

市川はつぶやくと剣をすらりと抜き放った。

「市川くん！」

洋子はさげんだ。

そこで彼女はさとった。彼女のこころにも疑念がわいてきた。敵という言葉が彼女の脳裏にうかぶ。

「そう……そうかもしれないわね。もしかしたら、あんたほんとうの市川くんじゃないのかも……」

洋子もまた剣をぬいた。

ふたりは暗闇のなかにらみあった。

「きみはほんとうのコーラ姫じゃない」

三村は姫の体をひきはなした。唇にはまだ彼女の熱烈なキスの感触がのこっている。彼女は三村の姿をみとめると抱きついてキスをもとめてきたのである。三村は無我夢中でそれにこたえたのだが、頭のすみにちりちりとした危険をしらせる予感がして、彼女の体をおしのけたのだ。

「なにをおっしゃるのです？　姫はこうしてあなたさまのことをずっとお慕いもうしておりました」

「よせ！」

三村は彼女から飛びのき剣をかまえた。

「お前はまぼろしだ！　姫はいきなりばくにキスをもとめたりしない！」

彼女はぼうぜんと立ちつくした。その表情はわけがわからない、といったものだった。

が、ふいに彼女の唇がにゅっと歪むと、両端がくいつ、とつりあがり冷酷な笑みをうかべた。

「くくくく……おいしいね……。あのままだまされていたら、なにもわからず死ねたのに……」

ぐーっ、と姫の姿がひきのばされ彼女の肌に爬虫類のうろこがあらわれた。びりびりと衣装がやぶけ、そのしたから現れたのは上半身が女で下半身が蛇の怪物だった。

しゃーっ、と女の唇がぱくつと割れ、二股に分かれた舌がへろへろと空中で踊った。

三村は剣をかまえ怪物めがけ突進した。

「お前たち、おれの家族のふりをするのはもうやめる！」

山田は絶望のなか、家族が見守るなか手にした斧をふりかぶった。
「パパ！」

ふたりの娘が悲鳴をあげた。妻は娘をかばうようにして恐怖の表情をうかべている。

「あなた、どうしたの？」

山田はあはあと荒い息をつき妻とふたりの娘をにらみつけた。

「なにが家族団らんだ！ こんな家庭はおれにはなかった。これはおれの夢なんだ！ 娘たちはおれとは家でくちもきかないし、妻とのなかはとうに冷え切っている！ おれはずっと暖かい家庭にならないか悩んでいたんだ！ それを……それを、お前らおれの夢をしゃあしゃあと演じやがって……」

山田の両目に涙があふれた。

「くそおつ！ くそおつ！」

わめきつつむちゃくちやに斧をふりまわす。斧が家の壁につきささり、ぼろぼろと破片がとんだ。どこかと山田はじぶんの家を破壊していった。

「やめて……やめて……」

妻はひっしに懇願する。

が、山田が家を破壊つづけるのを見て、その表情が変わった。

「そう、やめないのね……」

彼女のふたつの瞳があやしい光をはなちはじめた。ぎよっとなつて山田は手をとめた。

「お前ら……」

妻とふたりの娘の瞳にうかんだ非人間的なひかりに山田の全身に震えがはしった。

見る見る親子の姿が変化し、それはおぞましい怪物となった。妻は人間からぬるぬるする粘液のかたまりとなり、ふたりの娘もその粘液のかたまりにのみこまれた。ぬちゃ、べちゃ、と音をたて、粘液のかたまりはするすると山田へにじりよった。

「く、くるな！」

悲鳴をあげ、山田はあとじさった。

どん、と背中がなにか固いものにぶつかり、かれはふりむいた。岩壁がせまっている。

あたりを見回すといつのまにか山田は洞穴のなかにいた。自宅は消えていた。

ぐろろろろ……

粘液の怪物は奇妙な叫び声をあげ、山田めがけて襲いかかる。本能的に山田は手をかざしていた。

ばりばりばり……！

山田の手のひらから紫電が放出された。オゾンのきついにおいがあたりにみちる。

きえーっ！

怪物は悲鳴をあげた。

あの海の怪物をたおした魔力がふたたび山田の身のうちにもどってきていた。山田は歯をくいしばると身内にみちた魔力をふたたび怪物めがけてなげつけた。

「死ね！」

怒号とともに山田からはなたれた放電は怪物の全身をつつみこんだ。

怪物は苦痛に身もだえ、ぶるぶると震えている。山田はさらにちからを放出した。

おおおーんん……

泣き叫ぶような声をあげ、怪物はどさりと身をなげだした。ひくひくと全身が奮え、煙につつまれている。ふつつと皮膚が焼け、髪の毛を焼いたようないやなおいがあたりに充満した。

ふうーっ、と山田はため息をついた。

ぎいーん……！

ちゃりーん！

金属が打ち合う音とともに、火花が刀身を照らした。

洋子と市川のふたりが暗闇のなか凄絶な切りあいを演じている。必殺の気合があたりにみち、目にもとまらぬすばやい動きでふたりは戦っていた。

ひゅっ、と市川の剣が水平になぎ払われ、その剣を洋子はぎりぎりで避けた。髪の毛がふわっとひろがり、市川の剣が頭髪を数本、空中で切り裂いた。洋子は身をしずめた勢いで飛び上がり、剣を背中にふりかぶると市川めがけて切りかかった。がつんっ！

洋子の剣先が床にあたり、市川は紙一重でそれをよけた。

市川は洋子の体勢の崩れに乗じて撃ちかかる。えたりや応と洋子は片手で剣をかざし、かれの剣を受け止めた。

ぎゃりん！

いやな音をたて剣はふたつに折れた！

洋子の表情に絶望があらわれた。まんなかから二つに割れた剣ののりを手に、それでも彼女はひっしに応戦する。市川は勝利を確信してさらにせまった。

ばきいーんっ！

なんと市川の剣もふたつに折れてしまった。信じられない、という表情がかれの顔にうかぶ。

「くそっ！」

市川は手にした剣を投げ棄て、どっかりとその場で胡坐をかいた。「ちくしょう、もう、どうにでもしろ！」

ぼたり、と洋子の手からも剣が落ちた。

「どうにでもしろって、どうすればいいのよ」

市川は顔をあげた。

「なんだ、それ？ お前はおれの命をうばつつもりだったんだろ？」

「それはあんたのほうじゃない！」

「なんだって……」

わけがわからず、市川は立ち上がった。

「それじゃ、君……本当の洋子さんか？」

ぽかん、と洋子も口をあけた。

「あなたはやっぱり本当の市川くん？」

ふたりはぼうぜんとおたがいの顔を見つめていた。

「どういうことだい。おれはてつきり……君が敵の化けたものだと思つて」

「それはあたしもおなじだわ……」

くしゃくしゃと市川は髪の毛をかきむしった。

「あのとき、おれは君の姿がなんだか化け物に見えたんだ……。まるでだれかに命令されていたような感じだったな」

「うん、それはあたしも感じた」

ふたりはまた見詰め合った。

ぷーっ、と市川はふきだした。

げらげらげら……、と笑い出す。くくくく……、と洋子もこらえきれなくなつて笑いにくわわった。

しばらく暗闇のなか、ふたりの笑いが交錯した。

はあはあはあ、と笑いつかれた市川はふと顔をあげ、ぎよっとなつた。

彼女がいらない！

ふたたび市川は暗闇にひとりぼっちになっていた。

と、前方が明るい。

市川はその明かりにむけ歩き出した。

「けっこう食えるじゃない、これ」

「そうじゃろう。わしはここでこれだけを食つて生きておる。どういわけか、飽きるということもないな」

岩の広間のなか、エレンと老人は床にすわってもくもくと茸を食べていた。茸はさまざまな形、色合いをもっていてどれひとつとっても味や風味がちがっていた。茸は洞窟の岩壁にどこでも生えていた。

と、足音にエレンは顔をあげた。

「！」

なんと岩壁にふたたたび穴が黒々とした口をあけている。

足音が近づき、そこから人影が見えてきた。

三村だった。

かれは洞窟から出ると、あたりをうかがった。エレンと老人のふたりに気づき、ほっとしたような顔になった。

「やあ……」

エレンは三村の様子に立ち上がった。

「あんた、血だらけだよ」

そう言われ、はじめて三村はじぶんの体を見下ろした。エレンの言うとおり、かれの頭から足元までべっとりと血液が付着していた。血はほとんど固まって、黒く凝結している。

「ああ、怪物を倒したときの返り血だ。ぼくには怪我はないよ」

「で、宝は？」

「宝？」

エレンの問いに三村はきょとした表情になった。

「そんなもの、なかったよ」

「なんだって……」

ふたたたび足音。

ふりかえると今度は山田が姿をあらわした。かれはやつれきつたような様子だった。よろよろと広間にたどりつくと、力が抜けたようにすわりこんだ。ふうふうとあらい息をついている。

「山田さん、無事だったんですね」

三村に話しかけられ、山田は顔をあげた。言葉もなくうん、とうなずく。

つぎに市川と洋子ももどってきた。ふたりは広間で顔をあわせる
と、なぜかぎよつとしたような顔になった。どうしたわけか、ふた
りとも剣をなくしている。

「ねえ、どうしたっていうのよ。お宝はどうしたのよっ!」

エレンはいらいらして叫んだ。

全員、そんなものは手にしていない。

老人はそんなエレンをなだめるように手をあげた。

「まあまあ、そんなことよりあんたがたはたしかに勇者の試練をく
ぐりぬけた。それが大事なことじゃ。さあ、地上にもどる時間じゃ
ないのか?」

「ああ、そうだな」

山田はぐつたりと腰をおろしていたのをよっころしょとかけ声を
かけて立ち上がった。

「さあ、行こうか」

老人の案内で全員洞窟を戻っていく。こんどは老人はみんなをせ
きたてることなく、普通の歩度で案内した。

帰り道は全員、むつつりと黙り込んでエレンはしきりになにがあ
ったか聞き出そうとしたのだが無駄だった。

やがてあの青銅の扉のあたりまで来ると、老人は立ち止まった。

「ここからは、あんただけで行けるじゃろ? わしはここで戻る
ことにする」

三村は振り返った。

「どうしてです? なんであなたはこんな真つ暗な洞窟で……」
かれは口をつぐんだ。

いつのまにか老人の姿は消えていた。足音もなく、立ち去ってい
たのである。五人は顔を見合わせた。

山田は肩をすくめた。

「まあ、あの老人のことはいいだろう。とにかく外へ出ようや」
三村はうなずいてあの鍵をとりだした。扉の鍵穴にさしこむと、
ざわざわと扉の無数の彫刻がうごめき、外の世界への扉が開く。

全員が鉾山へ出ると、がちやがちやと金属が触れ合う音がして、ゲゼンの衛兵が数人小走りに駆け寄ってきた。

「戻ってきたのですね！」

隊長が声をかけて敬礼をした。

三村はうなずく。

「ではこちらへ。法皇さまがお待ちかねでございます」

五人は顔を見合わせた。

市川が口を開く。

「どうということだい？」

隊長の顔がほころんだ。

「さきほど法皇さまよりお告げがありました。あなたがたがみごと試練をくぐりぬけ、まことの勇者であることを証明なさったというものでした」

山田はにやりと笑い、市川の背中をどしんとたたいた。

「どうやらお見通しのようだな。おい！　とうとうお宝をもらえるんじゃないのか？」

あつ、と市川は口を開けた。

「そうだよ！　あんなあぶない目にあつたんだからただじゃ帰れねえな！」

謁見の間に案内された五人は、ふたたび法皇と面会した。

法皇はこんどは白い衣装でかれらを出迎えた。長い髪の毛は三つ編みにして頭のまわりに結び上げている。

少女はにつこりと晴れやかな笑みをうかべ、かすかに頭をさげた。「ようこそお戻りになりました。やはりあなたがたはまことの勇者でありました！　さあ、聖者の宝をさしあげましょう」

彼女が手をあげ合図すると扉が開き、数人の男女があらわれた。剣と盾、兜などをささげもっている。男女は五人の前に進み出ると、おのおのに宝物を手渡す。

三村には白銀色にかがやく盾とおなじく剣が。

山田には宝石がかざられた杖が。

市川と洋子には鋭い剣とマントだった。

エレンは鼻をならした。

「あたしにはないの？」

法皇はちよつとエレンを見つめた。エレンは顔をあかくすると目をそらした。

「わかつてるよう……あたしは試練の穴にはいらなかったよ！ ちえっ！」

法皇はふたたび柔和な笑みをうかべた。

「それらの武器、防具はたしかに城の宝物でございますが、それらは真の宝とはいえませんが。あなたがたは試練をくぐりぬけたとき、真の宝を手に入れました」

三村は顔をあげた。

「どういうことでしょうか？」

法皇は三村の顔を見つめた。

「あなたはいとしいひとに化けた敵を見破りましたね。その体験があれば、敵のさまざまな策略を見破ることができるでしょう。魔王はずるがしこい敵です。心眼をもつてすれば、策略を見破ることができます。それがあなたの宝です」

そして山田を見つめた。

「あなたもまたおなじように敵の策略をみやぶりました。そして魔力をもつて倒しました。あなたには強力な魔力があるのですが、いままでそのちからを使いこなせなかったのでしょうか？ しいまはあなたは強力な魔法使いとしてここにいます。魔王との戦いにおいて、そのちからは必要です」

さいごに市川と洋子を見る。

「あなたがたも魔王との戦いに必要な経験がえられましたね。どんな名刀を手にしたとしても、それをふるう腕が凡手なら棒切れも当然です。あなたがたはその腕を戦いによってまなびとったのです」

「それが宝……」

三村がつぶやいた。

法皇はまたエレンを見た。

「あなたはやはり魔王の城へむかうつもりなのですか？」

エレンはうつとつまった。

「あなたの宝は魔王の城で見出せるでしょう」

エレンの顔がぱつとかがやいた。

「本当？」

法皇はうなづく。

「ええ、あなたの旅に幸あらんことを祈っております」

三村は問いかけた。

「それで……あの魔窟で出会った老人はいつたいなぜあんなところで生活しているんですか？」

「老人？」

少女はかすかに眉をよせた。三村は魔窟で出会った老人の風体を説明した。少女の顔に笑みがうかんだ。

「それは伝説の聖者さまです。きつとあなたがたを案内するため、現れたのでしょう。聖者はあの魔窟で怪物を倒しましたが、命をおとされたと伝承されています。しかしその魂はあそこにとどまっているのかもしれませんが」

彼女は椅子から立ち上がった。

「さあ、準備は整いました。魔王を倒し、この世界に平和と希望をとりもどしてくださいよう、お願いいたします」

魔城（前書き）

ついに魔王の城へ到達した四人。ここでの戦いはさらに激しく……。

魔城

飛行船はゲゼンの都をとびたち、魔王の居城のある山脈をめざしている。船長のヨーリは操舵室ですどい目で前方の雲をにらんでいた。そのうしろには三村、山田、市川、洋子、そしてエレンの五人が神妙にひかえていた。

飛行船の進路前方には、雲というにはあまりに異様な霧のようなものが漂っていた。どういう光の加減なのか、その霧は全体にオレンジ色にそまっている。もくもくとわいている積乱雲にもその色がそまり、雲というよりは空中にうかんだ岩山のように見える。

「これからは魔王の支配下にある領域です。あの山脈が見えますか？」

ヨーリは一同に窓の外を指差した。そこにはねつとりとねばりつくような雲につきだした山脈が見えていた。

「この飛行船がいけるのは、あの山頂までです。これ以上進むことはできません。なにしろ船の浮力そのものがきかなくなるのですから。理由はわかりませんが、とにかくあの山脈をこえようと、飛行船の飛行能力がいちじるしく落ちるのです」

市川は窓ガラスに鼻をおしつけるようにして下界をのぞきこんだ。
「なんだろう……、小屋のようなものが見えるけど……」

「魔王の軍勢を見張っている、見張り小屋です。あそこには常時、何人かの兵士が常駐してなにかあった場合、烽火でゲゼンに知らせるようになっています」

飛行船は鼻面をさげ、降下し始めた。山脈の山頂の地面に飛行船の影がくつきりと落ちている。見張り小屋から数人の兵士がわらわらと飛び出し、口々に叫び交わして飛行船を見上げ、指さしている。飛行船の先端からロープがなげられ、地上の兵士たちはそのロープに飛びついた。ロープのさがが繫留塔に結び付けられ、飛行船はゆつたりと地面に着陸した。

飛行船からヨーリ船長が降り立つと、兵士たちはたちまちその前に整列し、さつと敬礼をした。ヨーリは答礼して五人を手招きした。「ここからは地上車でこの兵士たちがご案内します」

見張り小屋の兵士のうち、隊長とおぼしき男が進み出てにやりと笑いかけた。日焼けした顔に、髭が一面に密生している。

「ようこそ見張り小屋へ！ 聞いておりますぞ。あなたがたが魔王と戦う勇者どのでありますな！」

隊長はひゅっ、と口笛をふいた。すると部下たちは見張り小屋に隣接している倉庫のような建物の扉を押し開いた。なかからあらわれたものを見て市川は驚きの声をあげた。

「あれは……戦車じゃないか！」

その通りだった。

がらがらと騒々しい音をたて、キャタピラが地面を噛み轍のあとを残して現れたのは鋼鉄の外板をもつ戦車であつた。

「わがゲゼン軍のほこる地上車です」

ヨーリは誇らしげに宣言した。

市川は肩をすくめた。

「やれやれ、思いつきで描いた設定なんだけど、木戸さんは使い切るつもりなんだ」

ヨーリが不審な表情になったのを見て、市川はあわてて手を振った。

「いや、なんでもない！ 忘れてくれ」

ヨーリはなんとか立ち直ったようだった。

「はあ……、とにかくここからの道筋はこのデイン隊長がご案内します」

名前が出てデイン隊長は髭面をほころばせた。

「よろこんで！ さあ、みなさん。乗ってください」

戦車のうしろがわのおおきなハッチが開き、なかは数人がかけられる座席になっている。全員が乗り込むと、デインは部下とともに操縦席に乗り込んだ。

ヨーリはエレンを見つめ声をかけた。

「お姉ちゃん、やっぱり行くのね」

エレンはうなずいた。

「うん。どうしても見つけたいものがあるからね」

「気をつけてね」

エレンはふつと目をそらした。ハッチが閉じ、ヨーリの姿が見えなくなった。

「ぐおおおん……」。

戦車のエンジンが咆哮し、がくと蹴飛ばされるようなショックがあつて走り出す。

乗り心地は最低だった。がくがくと車内はゆれるし、騒音もひどい。山田は車体にちいさくあけられたのぞき窓に目を押し当てた。前方に雲が見える。戦車はその雲のなかに突っ込んでいった。

「いよいよ魔王と戦おうという勇者どのがあらわれましたなあ！魔王がこの山脈に居城を築いてからというもの、わがゲゼン軍はなんとか倒そうと奮戦してきたのですが、魔王のちからは強く、そのちからをゲゼンの結界で封印するのがやっとでした」

騒音のなかでもデイン隊長の声はよく通った。指揮官の才能のなかでも、よく通る声というのは重要である。山田は身をのりだし、戦車の騒音にまけまいと声をはりあげた。

「いままで魔王の城をめざした人間はいないのですか？」

隊長は首をふった。

「そりゃ、いましたよ。しかし城に近づくことさえできないのです。ある程度まで近づくと……、いや、これは実際に体験しなければわかりません」

そういうと隊長はなぞめいた表情になった。

戦車は凹凸のおおい地面をそのキヤタピラで踏破していった。すでにすっかり戦車のまわりにはオレンジ色の霧がおおっていた。

「なんだろう、この霧の色は……。夕方でもないのに」

市川はくんと鼻をきかした。色がついているほかはおいも

なく、ふつつの霧に見えた。

しばらく行くうち、隊長の様子が変わっていった。あきらかに緊張をしている。

「みなさん、もうここからは魔王の領地といっていい地域です。用心してくださいよ」

洋子は唇をかんだ。

「なんだかいやな予感……」

いいかけ、彼女はのぞき窓を見て目をまるくした。

まるでスーパのようにこい霧のむこう、なにかがうごめいている。

ずし……

ずしん……

なにか重々しいものが近づく気配がする。

みな戦車ののぞき窓に額をあつめ、外をうかがった。霧のむこうになにかのシルエットが見えた。

ふいにそれがたちこめる霧をわって姿をあらわにした。

「サイクロプス！」

市川がさげんだ。

それはギリシア神話に登場するサイクロプスであった。一つ目の巨人である。すっぱだかで、片手に巨大な棍棒をにぎっている。身長はかるく五、六メートルはあるだろう。

ぎろり、とひとつしかない巨眼を動かし、サイクロプスは戦車を見下ろした。ぐあつ、と巨人はあかい口を開き咆哮した。ナイフのような鋭い犬歯がむきだされる。片手に握った棍棒をふりかぶり、全身のちからをこめてふりおろす。

ぎやりりりりん！

戦車のキャタピラが逆転し、あやういところでサイクロプスの棍棒をさけた。棍棒のふとさはメートルはありそうで、その重さだけでも相当なダメージがありそうだ。いくら戦車の外板が鋼鉄でも、まともにくればただではすまないだろう。

「主砲砲撃用意！」

デイン隊長がさげび、部下がはしごをのぼって砲塔へ移動する。
気違いじみたいいきおいでハンドルをまわし、戦車の砲塔を回転させ、
主砲のねらいをつける。

「撃て！」

隊長の命令で部下は砲撃した。

反動で車内はずしん、とゆれる。

わあ、と五人は悲鳴をあげた。

ずばああん！

砲弾がサイクロプスの胸に命中し爆発した。

ぐおおおおおっ……

サイクロプスは苦痛に悲鳴をあげた。煙がおさまると胸からはま
つかな血がだらだらとながれている。怪物はじぶんの胸を見下ろし、
あいている片手で傷をなげた。まっかにそまった手のひらを口にも
つてきて、それをぺろりとなめる。

「！」

サイクロプスの顔に怒りの表情がうかんだ。さっきとはくらべも
のにならない咆哮が怪物の口からはなたれる。

びりびりと戦車の車内が振動した。

洋子は耳をおさえ、悲鳴をあげた。

どすん、どすんとサイクロプスは大股に戦車に近づくと棍棒を振
り下ろした。

ぐわあああん！

ものすごい轟音が戦車のなかに響いた。べこりと戦車の鋼鉄の外
板がそこからへこむ。怪物は二度、三度と棍棒をふりおろし、戦車
を打ち据えた。そのうち衝撃で戦車のフレームそのものが歪んだの
か、エンジンから異音が発しはじめた。

ぐけけけけ……

きゅるるるん……

エンジンは咳き込みはじめた。そのうちキャタピラが止まってし
まう。

「いかん！ 逃げ出さなければ！」

隊長はまっさおになって叫んだ。後部ハッチにとりつくと、あわてて開いた。

「さあ、逃げて！」

五人と隊長の部下は戦車からとびおりた。巨人は風車のように腕をまわして戦車に攻撃を繰り返している。見る見る戦車の外形はへこみ、とうとうぺしゃんこになってしまった。

「なんてやつだ……」

市川はあきれてつぶやいた。

ぐるる……

怪物はぎよろりと一つ目を一行にむけた。ぐわっ、と大口をあけたらだらと唾液をたらし憎悪の表情になる。

「やばい、くるぞ！」

ひゃあっ、と部下たちは算を乱して逃げ出した。どすどすと足を踏み鳴らし、サイクロプスは突進した。

「ど、どうする？」

市川は真っ青になった。

三村はすらりと聖都ゲゼンで受け取った剣をぬきはなった。

それをみて市川も決心がついたようだった。鞘から剣をぬき、構える。

「畜生、どうにでもなれ……」

うおおおっ！

三村は剣をかまえ絶叫した。ただだっ、と怪物に駆け寄るととんと飛び上がった。

「すげえ……！」

市川は歓声を上げた。三村はかるく十メートルは跳躍したのである。くるくると空中で回転すると、怪物の頭上を舞い、その背中に飛び降り、ぐさりと剣をつきさした。

ぐわあああっ！

苦痛にサイクロプスは絶叫した。

「いくぞ！」

市川は洋子と山田に声をかけ、走り出した。ふたりは市川とともに怪物に突進する。

「どうなつてんの？」

エレンはぼうぜんとつぶやいた。あんな怪物に立ち向かうなんて、なんて連中だろう！

市川と洋子はサイクロプスの両側にまわりこむと、三村と同じように跳躍した。どちらも人間業とは思えないほどの跳躍力である。楽々と怪物の頭上高く飛び上がると、両肩に飛び降り、サイクロプスの顔めがけて切りかかった。サイクロプスはこの攻撃をなんとかふりはらおうと棍棒を投げ出すと三人をつかもうと両腕をあげた。ぶすり！ と、三村は怪物の頭のうえからその一つ目を突き刺した。

ぎゃあああああつ！

怪物は苦痛に身もだえた。その勢いで三人はふりおとされる。

山田は怪物を見上げ、宝石が装飾されている杖をふりあげた。じつと怪物をにらむ。

びしいつ！

杖の先端から青白い閃光が飛び、怪物にぶち当たった。

うぎゃああああつ！

全身に電光をあび、怪物は痙攣しながらあおむけに倒れていく。

ずっしいいいいん！

地面を振動させ、サイクロプスは倒れこんだ。ぶすぶすと皮膚は焼けこげ、あちこちまだらになっていた。

ずるり……と怪物の皮膚は抜け落ち、その骨格があらわになった。じゅうじゅうといやな匂いをまきちらし、サイクロプスの遺体は消滅していった。

「お見事！」

デイン隊長が嘆声をあげた。部下たちも賛嘆の表情になっていた。「あなたがたの技は、とても人間わざとはおもえませんか……、

あの怪物の頭の上へ飛び上がったときは、羽根がはえているのかと思いましたぞ」

それを聞いて三村は複雑な表情になった。

「いや、無我夢中でした」

市川は口を開いた。

「それより魔王の城へはやくいこうや。これから歩きだから、急がないと日が暮れら」

みな市川の意見に賛成した。隊長は一行の前に進み出ると歩き出した。

「こちらです。このさきに魔王の城があるのです」

全員、オレンジ色の霧の中をそろそろと歩き出した。

山田が市川のそばにならび、話しかけた。

「なあ、いまの跳躍、すげえもんだったなあ。かるく十メートルは飛んだみたいだ」

市川はうなずいた。

「ああ、おれも信じられない。三村のやつが最初に飛んだのを見ておれもできるんじゃないかと思ったんだが、とにかく体が勝手に動いちまったんだ……」

「それだ！」

山田の声に市川は「え？」となった。

「なにが、それなんだい」

「いや、言つと気を悪くするから……」

「なんだよ、言ってくれよ」

「そのう、ますますここがアニメの世界だなあ、と思ってね」
「？」

妙な顔になる市川に山田は説明した。

「あの跳躍、とても普通の人間では無理だ。十メートルを飛び上がるなんて、オリンピックの選手だって不可能だ。しかしアニメの表現ではしばしばあいうことはやるだろう。ようするにキャラクターの能力の表現として信じられないほどの高さに跳躍する、なんて

ことはあたりまえだ」

「ていうことは、おれたち木戸さんの絵コンテそのままに動いているってわけかい？」

市川の表情がけわしくなった。だれだって自分の行動が他人の思いのままに動いているということになればいい気はしないだろう。山田はあわてて否定した。

「いや、そういうことじゃないよ。木戸さんが怪物を倒す絵コンテを描いておれたちがそのままに動いたのか、もしかしたらおれたちの行動がどこかで木戸さんのインスピレーションに影響して、そういう絵コンテを描くことになったのかもしれない」

市川は舌打ちをした。

「ちえ、まったく馬鹿馬鹿しい話だ。はやく、この気違いじみた世界から抜け出したいよ」

山田はうなずいた。

「おれもそう思う」

デインは一行を振り返った。

「みなさん、あれが魔王の城です！」

なんだかかれの口調は観光ガイドのようである。全員、かれの指差す方向を見上げた。

オレンジ色の濃霧のなか、無数の尖塔をもった城がシルエットになっ
て見えている。

「あれが、そうか……」

三村は背をのびし、するどい目つきで城を見つめている。

「行こうか……」

一歩、踏み出す。

じやりじやりと靴底に荒地の小石が音をたてた。

異様な気配があたりにみちていた。

全員の神経がぴりぴりと緊張している。

濃霧はさらに濃くなっていく。

あまりの濃霧に一瞬、城の全景が視界から消えた。

「や！ 城はどこだ！」

山田は驚きでうろたえ、あたりをきょろきょろと見回した。いまのいままで前方にそびえたっていた魔王の城が消えている。うしろを振り返った一同はぽかんと口をあけた。なんと城はかれらの背後にあった。

三村は眉をよせた。

「おかしいな、進む方向を間違ったかな」

ふたたび城を目指して歩き出す。

が、こんども見失った。

かなりの距離を歩いたと思っていたが、いつのまにか全員もとの場所にもどっていた。

「わかったでしょう。なんともわれわれは魔王の城に近づこうとしたのですが、結局はもとのところへ戻ってしまうのです」

すまなそうな表情でデインは説明した。

ふうん、と山田は髭をなげた。

「どうやら空間がゆがんでいるみたいだな」

市川は山田に話しかけた。

「わかるのかい？」

山田はうん、とうなずく。

「ああ、SFなんかじゃ古典的な手法だよ。近づこうとしてももとの場所に戻る、っていう場面はこういうファンタジーやSFなんかじゃおなじみさ」

「じゃ、解決の方法はあるのか？」

「そりゃ、おれの読んだSF小説じゃいろいろあるよ。そのなかで、どの方法がこの場面にふさわしいか……だが」

髭をしごきながら山田は一心に考えている。やがて決意の表情がうかんだ。

「ようし、これはファンタジーの世界だ。それならファンタジーの方法論でいくしかないか……」

かれは一同をふりかえった。

「みんな、目をつぶれ！ 城を見ていると幻惑される。いいか、かならず城にたどりつくと思じて歩くんだ！」

みな山田の命令に眼をつぶった。

「進め！」

そのまま眼を閉じたまま歩き出す。

ざく、ざく、ざく、と荒地を歩く足音だけが聞こえている。

そのまましばらく進んだ。

「もういいかな……」

山田はそうつぶやくと目を開けた。

にんまりとした笑みがうかぶ。

城はすぐ目の前にあった。

「やったぜ……」

ほこらしげに振り返ると、驚きの声をあげた。

「あれっ、どういうこった？」

城の前にそろっているのは五人だけだった。山田以下、三村、市川、洋子、エレンの五人である。デイン隊長と部下たちは遠くに霧のなかでうろうろとしていた。

「おおーい！」

山田は声をあげた。デインたちは山田たちに気づいてこっちへ走りよった。

「あれ？」

市川は頓狂な声をあげた。

デインと部下は懸命にこっちへこようとして夢中になってかけているのだが、一向に近づけない。足を交互に踏み出しているのだが、その場で一步も前に進んでいないのだ。そのうち疲れたのか、全員そのばでへたりこんでしまった。

「こりゃ、おいていくしかないなあ。おい、山田さん。どういふことなんだろ？ あんたならわかるだろ？」

山田はうなずいた。

「うん……。おそらく、この城にはいれるのはおれたちだけなんだ。

たぶん、ストーリーのクライマックスが近づいているから、余計なキヤラは邪魔になるのさ」

洋子は目をまるくした。

「クライマックス？　じゃ、ついにあたしたち、魔王と戦うのね」

「そうにちがいない」

エレンは地団太を踏んでさげんだ。

「なにあんたたち、わけがわからないこと言っているのよ！　ねえ、城にはいるの？　はいらないの？」

彼女に言われて全員われにかえり、目の前にそびえる魔王の城をみあげた。

城はのしかかるような圧倒的な迫力でそびえたっている。正面には十メートルはあるうかという巨大な扉が見えていた。

三村は一步前へすすんだ。

「行きましよう。魔王を倒すんです」

みな、扉に近づいた。

「どうやってこいつを開けるんだ？」

市川が不安そうにつばやいた。

が、その疑問は扉に近づくと解消された。なんと一同が近づくと、扉は勝手に開きはじめたのだった。

「ぐうぐうぐうぐう……」

重々しい音をたて、扉は左右におおきく開け放たれた。

「ぐくり……、と山田はつばをのんだ。恐怖が下半身から胸へとこみあがる。かれはぎゅっと杖をにぎりしめた。

「行くぞ」

かけ声をかけて内部へ足を踏み入れる。

ひやり、と冷たい空気が顔をなぶる。

全員、ぴりぴりと緊張して城の内部へ進む。

見上げると何本もの石の柱が天井をささえ、溶け出したような石のつららが垂れ下がっている。

「！」

洋子はぎくりと足をとめた。

「ね、見て……」

壁を見つめたまま後ろ手で市川の袖をひっぱった。

「なんだよ……？」

洋子の指差す方向を見て市川もぎくりと身をこわばらせた。

「これは……」

ふたりの様子にのこりの三人も洋子が見ている場所を注目した。

全員、その正体を知って眼を丸くした。

「人間だ……」

山田がつぶやいた。

洋子の見つめる壁には無数の人体が埋め込まれていたのである。

みな苦悶の表情を浮かべ、空中にさしのべられた両手はたすけを求めるかのように差し出されている。

洋子はおそろおそろ近づくと、その人体の指先にふれてみた。触れると同時にびくつ、とひっこめる。

「つめたい……。それに石のように硬くなってる！」

「その通りよ」

だしぬけにエレンが発言し、洋子は飛び上がった。

「な、なによ。いきなり！」

「みな石になっっているのよ」

「あんた、なにか知っているの？」

「ええ、あたしがまだ子供のころ、魔王が城を築くため世界中の人間を狩り立てことがあったわ。あたしの両親もそのなかにいたの。

あたしはこの眼でみたのよ。魔物が村をおそって、人々を石にしてさらっていくのを」

「それじゃ、あんた……」

エレンはうなずいた。その両目に涙があふれてくる。

「ええ、そうよ。あたしのさがしているのは両親の体……。魔王は城を築くため、人々を永遠の恐怖にとじこめ、その力でこの城を築いたの」

そこまで言うのと、彼女はだしぬけに刀をふりあげ、石像にされた人間にきりかかった。おもわず洋子は剣をとってそのエレンの攻撃をうけとめた。

「ぎゃりいいーん！」

「なにをするのよっ！ あなたの言うとおりだとすれば、この石像はまだ生きているということになるのよ！」

「そうよ！ だから壊してやるの！ 永遠の苦痛と恐怖にとらえられた生から、この人たちを救ってやるのよ！」

「やめろっ！」

市川はふたりに割って入った。エレンと洋子は飛び下がり、ものすごい剣幕でにらみあった。

「エレン、あんたの言うとおりだとしても、まだかれらを救う道はないわけじゃない。魔王がかれらを石像にしたなら、魔王を倒せばその呪いがとけるんじゃないのか？」

市川の言葉にエレンははっとなった。

「本当？ 本当にあんた、そう思う？」

ああ、と市川はうなずき、山田を見た。

「山田さん、あんたどう思う？」

山田はうなずいた。

「考えられることだな。たいていファンタジーの定石なら、呪いをかけた大元が倒れれば、その呪いもとけるのが普通だ」

剣をかまえていたエレンは、ふっと力をぬいておさめた。

「そうならいいんだけど……」

三村は声をかけた。

「行きましょう。とにかく魔王を倒すのがなにより先決です」

そう言うのと背をのびし、大股に歩き出す。みな、そんな三村をぽかんとして見つめる。市川は肩をすくめた。

「そうだな……。行こうや」

三村のあとにつづいて歩き出した。市川は山田のそばに近づいた。「おい、山田さん。あんたの設定画とおりの城じゃないか。どう感

じてる」

「どうって……」

山田は当惑していた。

「そんなことより市川くん。きみの描いた魔王のキャラ設定のほうが気になるよ。おれたち、あんな怪物と戦うことになるんだぜ」

「そうなんだよなあ」

市川は嘆息した。

魔王のキャラ設定していたときは、いかに魔王らしく恐ろしい外見を一心に考えていたのだが、実際こうして対決をひかえて恐ろしさが身にしみる。

あたりをきよきよと見回していた山田は、城の内部のある場所を見て足をとめた。

「待った！」

山田の声にみなとまる。山田は奥のほうをゆびさした。

「あつちだ！ おれの設定では、あの階段を降りれば魔王の潜む場所へたどりつけるはずだ」

全員、山田の案内で階段をおりはじめた。階段は石造りで、まわり階段になっていた。階段の両側の壁も、また無数の石像にされた人体がうめこまれている。みな無念の表情をつかべ、全身で苦痛を表現していた。そんな石像を見ると恐怖がきりきりと胃をしめあげてきそうであった。

階段を降りるにつれ、あたりにはじつとりとした湿気がみちてきた。あしもとの石造りの階段はぬるぬるする苔におおわれ、うつかりすると足を滑らせそうになる。

「臭え……」

市川が顔をしかめた。

かれの言うとおり、あたりに瘴気としかいようのない腐敗臭がみちていた。その臭氣にみな口だけで呼吸しようとはあはあと荒い息をついていた。

ついに階段はつき、通路に行き着いた。通路はすべて石造りで、

この場所にはうめこまれた石像はなかったが、こんどはあらゆるところに色とりどりの苔や、黴。そして菌糸類がはびこっていた。鼻が曲がりそうな臭気は、その菌糸類から発生しているらしかった。壁にべつとりと付着している苔が青白く発光していて、あたりはほの明るい。

「発光苔ね……」

エレンは手近の壁に手をのばした。ちよつとつついてみる。

と、苔の表面からぶしゅーっ、と茶色い胞子がふきだし、エレンはあわてて顔をぬぐった。

「わっ！」

山田は首を振り、声をかけた。

「気をつけてくれよ、エレンさん。ここは魔王の城なんだから、なにがおきるかわからないんだから」

「わかつてるわよ！」

彼女はほほをぷっ、とふくらませた。

みな通路の奥へすすむ。

地下にいるということからか、あたりには奇妙な圧迫感があった。通路はどこまで続くのかさっぱりさきが見えない。一本道だから道にまようことはないが、どこまで歩いても同じような景色が続いているだけだった。

と、先頭を歩く三村が足をとめた。

声をかけようとする市川にしっ、と唇に指をあてて制止する。

そのまま立ち止まっていると、通路のおくからずるっ、べちゃっ

……というような、なにか引きずるような足音が聞こえてくる。

「出た」

市川はつぶやいた。

通路のおくからあらわれたのは数人の人間だった。それらは兵士の格好をしていた。が、その兵士の防具につつまれている体からはばたばたと腐汁につつまれた肉片が滴り落ちている。

「ゾンビだ……」

市川はつぶやいた。

その通りだった。あらわれたのはゾンビ兵の集団だった。全員腐り落ちた骨がむきだしになった体で、剣や槍、盾などをかまえている。

奇妙にゆったりとした動きでゾンビ兵たちは五人に襲いかかった。わあ！ と、恐怖のさけびをあげ、洋子はその攻撃を受け止めた。ぎりぎりぎり……

ゾンビ兵はちからまかせに洋子に剣を押し付けてくる。洋子は必死にその攻撃を押しつけようとふんばっていた。

ぐあああ……、とゾンビ兵は口を開けた。その口からどぼどぼと腐った肉汁がほとぼしる。

「いやああああっ！」

洋子は首をふり、ちからをこめてゾンビ兵をはねとばした。

どしゃ、とゾンビ兵は地面に倒れこんだ。どぶどぶと全身から腐った汁をたらしつつ、ふたたびのったりと立ち上がる。

「なによ……」

洋子は泣きそうな顔になってじぶんの体を見下ろした。首から下がべつとりとゾンビ兵の放出した汁にまみれている。

「洋子さん！ 油断するな！」

山田に言われ、彼女は顔をあげた。見るとゾンビ兵がふたたび剣をふりあげ襲いかかってくる。

ぎいぎいいん！ ちゃりいん！ と、あちこちでゾンビ兵と五人の切りあい音が通路にひびいた。ゾンビ兵の動きはのろく、その攻撃は楽々と受け止めることができるのだが、なにしろ切るうが突こうが、まるつきり相手にダメージをあたえることができない。みなゾンビ兵の腐った体を一寸刻みに切りつけるほかなかった。洋子もまた必死になってゾンビの体に何度も剣を突き刺し、剣をもつ腕の肉や骨を削り取るようにして戦った。

ようやく戦いが終わったとき、みな疲労困憊のきわみにあった。あたりには切り刻まれたゾンビ兵の体のばらばら肢体がちらばり、

床にはいやな匂いはなつ肉汁が水溜りをつくっている。しかしそれでもばらばらにされたゾンビ兵の肉片はひくひくと蠢いて、完全には死んではいないようだ。

「みな、無事ですか」

はあはあと息をつき、三村は全員に声をかけた。あちこちから「ああ」とか、「うう」とかいう返事がある。

ぐちゃ……

ぬちゃ……

足音にみな新手がきたのかと緊張した。

「エレン……」

どうしたのか、と山田は立ち上がった。

見るとエレンがふらふらとさ迷うような動きで歩いている。

「近づかないで……」

エレンは山田に声をかけた。彼女の声はごぼごぼと沼からふきあがるメタンの泡がこもったような声になっていた。山田はぎくりと足を止めた。

見るとエレンのふたつの瞳にはうすく膜のようなものがかかっていた。

ぐえええ……！ と、エレンは身をおりまげうずくまった。その口から臭い匂いの腐汁がどぼどぼとほとほとはしる。

「エレンさん！」

驚愕に山田は身をこわばらせた。

「あたし……あの苔の粉をかぶったあと……気分が悪くて……。でも、いまわかった。あれは人間をゾンビにしてしまう粉なんだわ……」

エレンは顔をあげた。すっかりふたつの瞳には白い膜がかかり、完全に白目になっている。顔には汗というより肉汁のような黄色い粘液がまとわりつき、顔色はすっかり死人のそれになっていた。

「あたし、もうすぐゾンビになってしまう……、そうになったらもう、あなたがたを殺すことしか考えられなくなる……。お願い、いまの

うち逃げて！」

ぐえええ……。

ふたたびエレンは腐汁を吐き出した。

市川がつぶやいた。

「すげえ……ほんとの腐女子だ……！」

「馬鹿なこと言つてないで！」

洋子がかつとなって叫んだ。

山田は決意の表情になった。

「わかった！ おれたちはなんとしてでも魔王を倒す。そうすれば、あんたも元の人間に戻るに違いない！」

ぶるぶると震えつつ、エレンはひっしになって笑顔らしきものをうかべた。

四人はエレンを一瞥すると、くるりときびすを返して走り出した。うおおおお……、と、エレンの叫びが通路にこだました。それは四人をとりにかしたことになる無念のさけびか、それともゾンビになっってしまうじぶんを必死に押しとどめようとする叫びなのかわからなかった。

幕間く木戸く

「困ったなあ……。どうしよう」

動画机を前にして木戸は頭をかかえていた。コンテはすでに二十六話ぶんにのぼり、ついに四人が最後の決戦にのぞむクライマックスの場面にさしかかっていた。あと半パート、描けばついにおわるはずだった。

が、どうにも終わらせることができなくなっていた。

肝心のことをわすれていたのである。

木戸はメガネをはずし、ごしごしと鼻のつけねをこすった。

「弱ったなあ。ここまで描いていて、こんなことに気づくなんて……」

「どないしはってん？」

え？ と、木戸は顔をあげた。

あの”声”だった。

ひさしぶりに”声”は木戸に話しかけてきたのだった。

「もうちよいとで終わりはるんやろ？ ちゃっちゃんとやりなはれ！」

「それがそうもいかないんだよ」

「なんでや？」

「肝心のことを忘れていたんだ」

「なんですのん。肝心のことって？」

「名前だよ」

「名前？」

「そつだ。魔王の名前だ」

沈黙がその場を支配した。

やがて”声”はふたたび木戸におずおず、といった調子で話しかけた。

「それがどうしてそんな問題になりはるんですか？ 魔王は魔王でええのと違いますのんか？」

「そうはいかないよ。かんじんの戦いの場面で主人公が叫ぶ。「お前を倒す！」ってね……そんなとき魔王の名前を叫ばないわけはないだろ？　ただ魔王じゃ格好つかないからな」

「魔王の名前はあるんでつか？」

「ああ、あるよ。ここにね」

そう言つて木戸はじぶんのこめかみを指さした。

「ちゃんと考えてあつたんだ。しかしうつかりしたことに、いままで登場したキャラに魔王の名前を主人公たちに教える場面を作つてなかったんだ。だから主人公はいまだに魔王の名前を知らないままだ」

「なんちゅう……」

”声”はため息をついた。

木戸も腕組みをして考え込んだ。

「どうすりゃいいんだ……」

ふといままでのキャラ表を手にする。

いままでのキャラクターのひとりひとりにじつと視線を落とした。まるでそれらのキャラがかれに知恵をつけてくれる、というようにやがてかれはひとりうなずいた。

「よし、この方法で行こう！」

つぶやくと木戸はふたたび鉛筆を手にとり、あらたなコンテ用紙をひろげた。

背をまるめるとかりかりと音をたてて鉛筆を走らせはじめた。

決戦（前書き）

ついに魔王との最後の戦い！

四人はもとの世界へ帰れるのだろうか？

決戦

ようやく最深部についたな……。山田はあたりを見回した。このあたりにくると、もはや地下室という雰囲気はなく、なにか生物の体内にもぐっているような感じである。あらゆるところが溶け合ったような状態になり、ぶよぶよとした質感になっている。足元も一歩踏み出すごとに、ぐねり……。とやわらかく沈み込む。壁面を見ると無数の血管が浮きあがりどきん、どきんとかすかに脈動していた。空気は重く、湿っぽい。

「やばいな」

市川はつぶやいた。

ぼたり！ と、天井からなにかがしたたりおち、首筋を直撃した。うひゃ！ と、市川はとびあがった。

が、すぐに驚愕の表情になった。

「いてててて！」

ばたばたと首筋をたたく。

「どうしたっ！」

山田がちかより、市川の首筋をのぞきこんだ。かれの首筋は真っ赤に腫れあがっていた。

くくくく……。と市川は苦痛にうずくまっていた。

「どうやらこいつは胃液みたいだな。消化液がしたたっているんだ

……」

みな山田の言葉に顔を見合わせた。

「はやく抜けましょう！」

顔をあおくさせ洋子がさげんだ。全員うなずくと足をはやめた。ぶにゅん、ぶにゅん、と足元の床はやわらかく沈み込みまわりつく。

「くそ！」

三村は歯を食いしばると剣を抜き放った。手近の壁に剣をつきさ

す。ぐさ！ と剣は壁にすいこまれた。

ぶじゅうつうつ……！

切り裂かれた壁からどつ、とばかりに血液と粘液がほとばしった。
ぎええええ……

通路内に怪物の悲鳴のような音が充満した。

「わ！ どうなってるんだ！」

山田はさげんだ。

ぐにやぐにやと通路の壁が蠕動し、ひくひくと動いている。全員
足をはやめる。

どこまで走ったのか、全員立ち止まった。

「行き止まりだ！」

市川が悲鳴をあげた。

かれの言うとおり、通路は行き止まりになっていた。あともどり
しようかと振り返った一同はうつ、とたたらをふんだ。

なんといままで進んでいた通路もふさがっていたのである。

ぼたぼた……

ぼたぼた……

天井からは大量の消化液が滴ってくる。消化液は見る見る床にた
まり、あしもとをひたした。

三村はふたたび剣をつきさした。

山田は三村にふりかえった。

「おい、三村くん！ なにをしようっていうんだ？」

三村はこたえず、一心不乱に壁に切りつけていた。剣をつきさす
ごとに大量の血液と粘液がふきだしてくる。

「そつか！」

市川はさげぶと三村のそばにかけよると一緒になって剣をつきさ
しはじめた。

ぐさ！

ぐさ！

ぐさ！

ついにふたりが隠れるほど穴はおおきくひろがった。

「みんな、通れるぞ！」

三村がさけぶ。洋子と山田はふたりが切り開いた穴にとびこんだ。ぬちゃぬちゃする体液がふたりの手足にからまり、動きづらかったが、それでも必死になって足を動かす。夢中になって前へすすむと、ようやく広々としたところへ出たのを感じた。

「ふいーっ！」

山田はおおきく口をあけ、空気をすいこんだ。あの壁を通り抜けるときは、大量にしたたりおちる粘液やら、血液やら、体液で口や鼻をふさがれ、息ができなかったのである。目をふさいでいるべつとりとした粘液をふりはらいあたりを見回すと、ほかの三人が地面にへたりこみ、肩で息をしていた。

市川は山田に気づいてにやりと笑いかけてきた。

「ひ……ひどい目に……あつたな！」

「まいったくだ！」

山田はうなずいた。ふりかえると巨大な大腸のようなものが見える。そこにさけめがあり、ごぼごぼと血液がふきだしていた。大腸のようなものはしばらく蠕動をくりかえしていたが、やがて切り裂かれた傷がとじはじめぴったりとあわさると傷口が消えてしまった。ずるり、べたり、と巨大な腸管は尺取虫のような動きで遠ざかり、闇に消えた。

「なんなの、あれ……」

洋子は頭をふった。市川はよっこらしょつと立ち上がり、それにこたえた。

「木戸さんは、けっこうスプラッタものが好きなんだ。たぶん、木戸さんのアイディアだろうね」

「いやだ……。あのゾンビのときだって、さっきのあれだって、あたしべとべとになっちゃってさ！ ああ、気持ちがわるい！ ねえ、どうせならシャワーくらいどこかにないのかな？」

「すぐに乾くさ」

市川のこたえに洋子は憤然となった。

「もう！ いったいここはどこ？」

洋子がさげんだそのときであった。

ぐおつぐおつぐおつ……

闇の中に響き渡る笑い声。

四人はぎよつとなつて天井を振り仰いだ。

！

だしぬけに上方からオレンジ色の光がとり、まぶしさに四人は目をしばたいた。

「よく来た……勇者たちよ……」

ごろごろと響く石臼のような声に四人はぞつとなつた。その声はあきらかに人間のものではなかった。

そこにそれはいた。

「魔王……」

三村はつぶやいた。

そう、たしかに魔王であった。

身長十メートルはあろうかという巨体。まるで黒曜石を刻んだかのようなどっしりとした体つき。魔王は玉座にどっかりと座っていた。その顔は無数の岩盤を組み合わせたようなごつごつとした外見をもち、ふたつの瞳は内部からのほのおでめらめらと燃えているかのように輝いている。魔王はにやりと笑った。

魔王を見つめていた三村は、その膝に目をとめ叫んだ。

「姫！」

コーラ姫が魔王の膝もとにすわっていたのである。魔王の巨体にくらべコーラ姫のほっそりとした肢体はあまりにたよりなく、ほんのすこし魔王が身動きしただけでつぶされそうであった。彼女はぐったりと魔王の膝もとに横になり、あおじろい顔でぴくりとも動かない。死んでいるのだろうか？ いや、その胸はかすかに上下しているようだ。意識をうしなっているだけらしい。

「おまえら、この姫を救出しにきたのであるう……？ しかし姫を

取り戻したくば、わしを倒さなくてはならぬ。おまえたちにわしを倒せるのかな？」

三村は声をはりあげた。

「あたりまえだ！ 今日こそ魔王、おまえの最後の日となるのだ！」

「よく言った……では、わが手にかかって死ぬがよい！」

ゆらり、と魔王は立ち上がった。姫の体は魔王の膝からころげおち、地面でころころところがってとまった。

わああああーっ！ と、三村は剣をふりかざし絶叫して駆け出した。

たたたた……と全力で駆けると、魔王の手前でーん、と跳ね上がる。ひととびで魔王の胸まで跳躍すると、ぐさり、と剣先をその体の岩のような皮膚のすきまにつきさす。つきさした剣につかまり、三村は魔王の体をよじのぼった。肩のあたりまでよじのぼると三村は剣をふりあげ、魔王の顔めがけて切りかかった。

ぐわっ！ と、魔王はその口をおおきく開き、鋼鉄のような牙で三村の剣を噛んだ。

ぎりぎりぎり……

魔王は三村の剣をがっちりとかわえ離さない。三村は脂汗をながし、くわえられた剣をひきぬこうとちからをこめる。

ゆうゆうと魔王は右手をあげると肩にとまった三村を、まるで蚊がとまったかのように指先でびしり、とはじいた。

「うわあああ！」

たった一本の指先ではじかれただけなのに、三村の体は宙にういてそのまま地面へまっさかさまに落ちていく。

どさり、とかれは地面に落下し、激痛に身をそらせた。

うむむむむ……、と三村は苦痛に顔をゆがめた。

魔王は口にくわえた三村の剣をぶい、と吐き出した。剣はがちゃーん、とはでな音をたて地面にはねかえった。

「三村くん！」

山田はさげんだ。

「くそお！」

市川はさけぶと剣をもって走り出す。

「まちなさいっ、あんたひとりじゃ……」

洋子も市川につづいた。

市川は剣をめちゃくちゃに魔王の足めがけてふりおろした。

魔王はそんな市川をつるさそうに片足をあげ蹴り飛ばした。

ひゅー、と市川は弧をえがいて宙をとび、どすんとばかりに地面に背中をうちつけた。

「ぐ！」

市川は白目をむき、苦痛のあまり身動きもできないでいる。洋子がかれに駆け寄った。

どうしよう、どうすればいいんだ……

山田はおろおろとあたりを見回した。

魔王の圧倒的な強さに、四人はまるでなすすべもなかった。

と、コーラ姫がさっきのさわぎで意識をとりもどしたのか、地面に横たわっている三村めざして這いよっている。

「姫！」

山田は姫だけでも救おうと駆け寄った。

「姫、立てますか？」

彼女の腕をとると、姫は山田の顔をのぞきこんだ。

「ああ、あなたは？」

「三村の友人です。救出しにまいりました！」

姫はいいややをするように首をふった。

「無駄です。魔王はあまりに強大……、人間にはかなうわけありません。あなたがたはここから逃げて！　せめて三村さまだけでも助けて……」

姫の絶望的な口調に、山田はふいに怒りがこみあげてくるのを感じた。

「なんですと！　そんな馬鹿なことよく言えますね。われわれはあなたを助けるためどんな苦勞をしてきたのか知っているのですか！

ねえ、魔王の弱点を知りませんか？　ここを攻撃すれば魔王を倒せるという」

「そんなものあるわけありません」

姫は駄々っ子のように首を振る。

どうすりゃいいんだ。

山田は顔をあげた。

魔王は三村を踏み殺そうとその足をあげ、ゆっくりと踏み込んでいるところだった。

ずしり、と魔王の片足が三村の体にのしかかる。三村はぐ、と息をはきだし、必死になってのがれようとじたばたと手足を暴れさせている。

と、山田はポケットになにか動くものを感じた。なんだろうと手をやると、まるいものがふれる。

あの「賢者の石」だ！

いそいで石をつかむと目の前にかざした。

石は山田の手の中で青緑色に発光していた。

なんだろう？　賢者の石はおれになにかを伝えようとしているのだろうか？

石のなかになにか動くものが……。

じっと目を凝らすと、それはひとりの人間の姿になった。

「やあ、また会ったな」

それはあの魔窟で出会った老人だった。ぼろぼろだったマントはいまは真っ白に光り輝くローブにかわりその顔は神々しいといつていいほどのものになっている。賢者そのものの姿だった。

「あなたは……」

賢者はうなずいた。

「そうじゃ。わしはかつて魔王の魔力を封じようと魔窟で戦った。なんとか魔窟の魔力は封じることができたが、魔王のちからそのものは封じることができなかった。わしはみずからを霊体としてあそこにとどまり、チャンスをまった……。そしていま、そのチャンス

がめぐつてきたのだ！」

「魔王を倒してくれるのですか？」

「いいや、魔王を倒すのはあんたらの仕事だ。まず、魔王の強大な魔力を封じなければならぬ。その方法を教えてやる」

山田は狂喜した。

「教えてください、その方法を！」

「魔王の真の名を知ることじゃ……。名を支配すれば、その力も封じることができる」

「魔王の名前……。そんなもの知りませんよ」

「その娘が知っておる」

「え？」

山田はコーラ姫に振り返った。姫は大きな瞳でまじまじと山田を見つめている。

「姫、魔王の名前を知っているのですか？ それなら教えてくださーい！」

とたんに姫はうるたえた。

「し、知りません！ そのようなこと」

あわてて山田から逃げようとする。

山田は姫の手をつかんだ。

「なぜです！ なぜ逃げようとするのです！ 教えてください、さあ、いますぐ！」

石の中の賢者は首を振った。

「あわれ……。その娘は魔王の花嫁となった。婚儀のとき、娘は魔王の真の名を知ったのじゃ」

「なんですって！」

うとうとう……。とコーラ姫はつつぶし肩をふるわせた。

「死なせて！ あたしは魔王の呪いで花嫁となってしまった！」

山田は唇を噛んだ。

「それがどうしたってんだ！ おれたちは魔王を倒すため、ここまで来たんだ！ それを無駄にさせるわけにはいかんぞ！ さあ、言

え！ 名前を言え！」

かつとなつて姫のむなぐらをとりがくがくとゆさぶる。手荒にあつかわれたコーラ姫は怒りに山田の手をふりはらった。

「なにをするのです！ 下郎が……わらわは姫ですよ！」

「だったら姫らしくしろつてんだ！ あれを見ろ！ 仲間がやられそうになつてんだ！ さあ、魔王の本名を教えろ！」

山田はさつと三村と市川を指差した。三村は胸に魔王の足のしかかりじたばたしている。市川には魔王が片手をのばし、その体を握りつぶそうとしていた。洋子はひっしになつて剣をふりかざし、その腕に切りかかつていたが、ひとすじたりとも傷をつけることができないでいる。うるさくかんじたのか、魔王は市川をつかんだままの腕をぶるん、と横になぎはらった。洋子は魔王の手の甲にはねとばされ、床にしりもちをついてしまう。

コーラ姫は山田を見上げ立ち上がった。

「教えましょう。魔王の名前は……」

山田は姫からそれを聞くとうなずいた。

「よし！」

魔王のほうに振り向くと大股で歩み寄った。ぐつと全身にちからをこめると、両手でメガホンをつくつて怒鳴る。

「魔王ダーゼン！」

山田の声は魔王の間全体に響き渡った。

その声を聞いた魔王はぎくりと動きを止めた。

首をねじまげ、山田を見下ろす。

「なんと言った？」

山田はふたたび声をはりあげた。

「おまえの名前はダーゼンだな！ それがおまえの本名だろう！」
ぐぐぐぐぐ……

魔王は全身をふるわせた。

「おのれ……その名を口にするな！ わが名を口にするものは許さぬ！」

山田はさつと杖をふりかぶった。

「ダーゼン！」

かれのやりとりを聞いていた三村も、市川も息をふきかえした。山田が魔王の名を連呼するたび、からだに力が蘇るようだった。

さつと立ち上がるとふたりとも力をふりしぼり、大声でさけんだ。

「ダーゼン！」

「ダーゼン！」

洋子もまたさけぶ。

「ダーゼン！」

全員、声をあわせて魔王の名を呼んだ。

魔王は耳をふさぎ全身を震わせた。

山田は杖をかざした。

と、山田の右手にあった賢者の石がふわりと宙に浮かび上がると、

杖の先端にすいこまれていく。すると杖にかざられた色とりどりの宝石が発光していくではないか。

なにがおきるのだ？

山田は目をまるくして見守った。

ぶっぶん……

杖は振動し始めた。

ぶっぶん……

ぶっぶん……

杖の振動ははげしくなり、山田は必死になって両手でつかんだ。

ちよつとでもちからをぬくと、あつという間にもつていかれそうだったからだ。そうしている間にも、杖の先端のひかりはますます強まった。

先端の光のかたまりがまっすぐ魔王の額へとすいこまれた。

「ぐおおおっ！」

魔王は両手で額をおさえた。

ばりばりばり……！ と、魔王の全身を青白い放電がつつんだ。

ぐあああああつ！

魔王は苦痛のためのたうちまわった。どすん、ばたんとあちこち体をぶつけ、壁には無数のひびがはいっていく。

やがて顔をおさえた両手がだりとしたにさがった。

「！」

魔王の顔を見た四人はあぜんとなった。

魔王の顔がすっかり面変わりしていたからだ。さきほどまでの岩をけずりだしたような表情は一変し、こんどは血も肉もありそうな魔物の顔に変わっていたのである。ぼろぼろと全身をおおっていた甲殻のような皮膚がはがれおち、なかからはまっしろな皮膚の肉体があらわれた。

「おまえら……」

魔王の表情は怒りに満ちていた。ぶるぶると全身のちからをこめる。ふつふつとその顔に、そして筋肉に血管が浮き出した。

ぐあああああつ！

魔王は咆哮し、くわつとばかりに大口を開いた。

ごおおおつ！

魔王の口からはまっかなほのおが一直線にふきだし、あたりをなめた。四人はあやうくその攻撃をさけた。

三村はさげんだ。

「いまだ！ 魔王の魔力は封じられている！」

市川と洋子は三村のさげびに勇気付けられ、剣をふるってたちむかった。

ずばり！

ちからをこめてふりおろすと、魔王の腹に横一直線に傷がはしった。なんと魔王の体も半分くらいに縮んでいたのである。

魔王はじぶんの腹についた傷を認めてぎよつとなった。

三人は剣をかざし、魔王に切りかかった。

ぐさ！ ばさ！ どすん！

めったやたらに切りつける。魔王は必死になって両手両足をふりまわし、その爪で応戦しているが多勢に無勢、しだいに全身から無

数の傷跡をつけられ、そこからは滝のように血液がほとばしった。

三村は両手で剣をささげもった。

ぽ……、とかれの剣の刀身にあおじろいかすみのような光がまといついた。魔王の表情にはじめて恐怖がうかぶ。

むん！ と、三村は魔王の目の前で剣をふりかぶった。

と、その両手から剣が宙にとび、魔王の胸にすいこまれた。

ぎゃああああ……

魔王の悲痛な悲鳴がこだました。

じゅうじゅうと魔王の胸につきささった剣からしろい蒸気がほとばしり、魔王は苦痛にのたうちまわった。両手を天にさしのべるような格好になると、ぱくぱくと口を開く。

どお、と魔王は仰向けにたおれこんだ。

じゅうじゅう……

魔王の体からは蒸気がとどめなくふきあがり、その体はじょじょに縮まっていった。ぼろり、はらり、と魔王の体はばらばらになり、ついには骨だけとなった。その骨もかさかさにひびわれ、さいごにはかすかな風で四散しあとかたもなくなった。

「やったな……」

市川はふう、と息をはいた。

三村はコーラ姫に目を留めた。姫はうつむいて床にすわりこんでいる。つかつかと歩み寄ると、その手をつかんで立たせる。

「姫、ご無事でなによりです」

「三村さま……」

彼女はいやいやをするようにかぶりをふった。

「どうしたのです。お国へ帰れるのですよ」

「わたしは帰れません……。さっき聞いたでしょう。魔王の呪力でわたしは婚儀を受け入れてしまったのです。わたしはこの魔王の城で死にます。どうか、お父さまには娘は魔王の手にかかって死んだとお伝えください」

「そんなこと、忘れることです。しよせん、邪悪なくらみにかか

ったのですから」

「できません。だいいち、魔王の花嫁になったわたしを、どこのだれが結婚相手として受け入れるでしょうか」

「ぼくがあなたに結婚を申し込んではいけないでしょうか？」

はっ、と姫は顔をあげた。三村は真剣な表情で彼女の顔をのぞきこんでいる。

「おい、三村くん？」

市川は声をかけた。

三村は市川をむいた。

どうするんだよ……というように市川が唇を動かす。三村はにっこりと笑って首を左右に動かした。

「まさか、きみ？」

そのとき、ごごごご……と、城の内部に振動がはしった。

かれらはあたりを見回した。

びしっ、びしびしっ！

壁に無数の亀裂がはしる。ぼろぼろと破片が剥落した。

「やばいっ！ 逃げろ！」

市川がさげんだ。

全員、無我夢中で走り出した。

どかん、どん！ どすん！

すさまじい振動で城はゆれた。あちこちで崩壊がはじまっている。全員は揺れる床のうえをこけつまろびつ、必死になって脱出している。

「急げ！ 出口だ！」

一同を市川は先導して走った。かれの言うとおり、目の前に城の出口が見えてきた。五人が通りすぎると城はもうもうたる土煙のなか崩壊していった。

どすどすどす……

ついに魔王の城はあとかたもなく崩れ去ってしまった。五人はぼ

うぜんとしてそれを見詰めていた。

「終わったな……」

山田がつぶやいた。市川がうなずく。

「うん」

がらり……と、つもった瓦礫が動いた。はっとなった市川は剣をかまえた。

ずばり、とほこりのなかから手がつきだされた。その手はしばらくあたりをさぐっていたが、やがてそのしたから肩が、そして上半身があらわれた。

「ふうーっ、いったい、なにがあつたの？」

ほこりにまみれてあらわれたのはエレンだった。その顔はすっかりもとにもどっている。

「やあ、無事だったか」

市川は声をかけた。エレンはかれの顔を認め目をまるくした。

「あたし、もどってる！」

そろそろとじぶんの顔をさわる。と、いきなり全身に手をはわせ、さわっていった。

「もどってるわ！」

山田はうなずいた。

「魔王ののろいがとけたんだ」

「それじゃ、あんたたち、ほんとうに魔王を倒したのね！」

がらがら……、とエレンの背後で瓦礫が崩れる音がした。彼女がふりかえると何人かの人影がほこりのむこうからさ迷い出てくるところだった。みな、ふつうの村人ばかりである。

それらの村人をじっと見つめていたエレンの顔がぱっとかがやいた。

「父さん！ 母さん！」

無我夢中に立ち上がり駆け出した。数人の村人のなかにとびこむと、ふたりの男女のもとへ走っていった。ふたりはだしぬけにあらわれた若い女性に戸惑った様子だったが、エレンの説明にじよじよ

に理解していったようだった。やがて三人は城の廃墟のなかでかたぐだきあった。

「よかったよかった。これでめでたし、めでたしってわけか」

山田がそう言うと、洋子は首をふった。

「たしかにね……、でも、あたしたちにとってはそうでもないわ。いったいあたしたち、いつもこの世界へ帰れるのかしら」

洋子の言葉にこたえるようにあの”声”がとどいた。

「ご苦労はん。あんたらのおかげで魔王はほろび、大団円ちゅうわけや」

四人ははつと顔をあげた。

「おれたち、帰れるのか？」

山田はさげんだ。

「そうや、これからあんたらをもとの場所へ返してやるさかい、前へ出なはれ」

”声”がすると、かれらの目の前にふつ、とまるい窓が空中に開いた。窓をのぞいた一同はぽかん、と口をあけた。

「木戸さん……」

窓のむこうに見えるのはあの演出部屋だった。動画機があり、木戸監督が背をまるめて机にむかっている。かれは四人の声にぎくりとなって顔をあげた。

「やあ、みんな……」

にやり、と照れ笑いをうかべる。かれの顔はすっかり無精ひげにおおわれ、目は疲労のためおちくぼんでいた。

と、かれの目がおおきく見開かれ、驚きの表情が顔にのぼった。

「みんな、その格好はなんだい？ コスプレでもやっているのか？」

「ちえ！ あんたもおなじこと言うのか。それもこれも、みんなあなたのせいだぞ！」

市川は憤然として肩をすくめる。

なんのことかわからず、ぼう然とする木戸に、山田はこれまでの出来事を説明した。

かれらが「パツクの冒険」の世界で、木戸のキャラクターとなつて魔王を滅ぼすための旅を続けていたこと、キャラや美術の設定書を描いていたことを。

「そんな、まさか……」

木戸は戸惑いの表情になつて唇を噛みしめた。

そのとき木戸の手に握られているものを見て、市川が声をかけた。

「木戸さん、それ、もしかして？」

木戸はおずおずとそれを差し出した。

コンテだった。

木戸の背後の動画机には、コンテが何冊も山となつてつまれている。

「木戸さん、コンテ描き終わったのか！」

市川は木戸からコンテを受け取り、なかをばらばらとめくつて読み始めた。

顔をあげる。

その顔はなんとも奇妙な表情になっていた。

山田にコンテを渡す。

山田もまたコンテを読み始め、おなじような表情をうかべた。

洋子、三村もおなじだった。

「まるでおなじだ、おれたちがやってきたことがそのままこのコンテに……」

山田はぼう然としてつぶやいた。

木戸のコンテに描かれていたことは、いままでの四人の冒険そのままだった。

四人全員、木戸を注目した。

「ああ……なんとか描き終わったよ……。しかし……」

木戸はそう言うとおぼしげな顔になった。

「いままで一枚も描けなかったんだが、このおかげですらすら描けた。こういうことだ……。もしかして、あんたらが冒険していることと関係しているのか？ おれのコンテはおれのアイディアなんかじ

やなくて、あんたらが冒険したことをそのまま引き写したってことも……」

洋子は首をふった。

「それはあたしたちも同じこと考えてた。あたしたち冒険して、いろいろなことをしたけど、結局木戸さんのコンテのままに動いていた人形じゃなかったかって思ってた」

そのとき”声”がした。

「あんたらなにつまらんこと、ぐじゅぐじゅ悩んではるんや？ どっちでもええやないか。」

あんたらの冒険も、木戸はんのコンテも、どっちも精一杯頭をふりしぼって、じぶんの考えで行動した結果やないか！

どっちの考えがどっちのほうに影響したなんてこと関係あらへん！

みんな自分の責任を果たした、それでええやないか？」

”声”に山田はゆつくりとうなずいた。

「そうか、それでいいのかもしれない」

市川、洋子、山田の順で窓をくぐってなかへはいつていく。三村は外にとどまったままだった。

山田は三村にふりむいた。

「三村くん……。きみはこないのか？」

穴の向こうで三村はコーラ姫の肩をだき、うなずいた。

「ええ、ぼくはこちらにとどまります」

ひし、と姫は三村にしがみついた。目にはいっぱいに涙がたまっていた。

そうか、と山田はうなずいた。

なんとなく、こうなるんじゃないかと思っていたのだ。

”声”が聞こえてくる。

「これですべて終わったんや。三村はんは残るっちゅうことやが、あんたらは家に帰ることになる。」

ついでやが、あんたらがやった冒険の記憶は消させてもらうで」

全員、抗議した。

「なんで？」

「そんなひどい……」

「あんたにそんな権利があるのか？」

”声” はかれらの抗議を無視した。

「権利も何も、あんたらにこのことを覚えていられるとこまったことになるさかい、しゃあないわな……。さあ、これであんたらは元通りや……ほなご苦労はん……」

穴の向こうから強烈な光がさした。光のなかに穴の向こうの景色は溶けていく。だきあつてこちらを見つめている三村とコーラ姫の姿も白く消えていった。

その光に市川、洋子、山田、木戸の四人は意識をうしなった。

エピソード（前書き）

ついにこの連載も終了です。

最初から読み通していただいたかた、ありがとうございました。

エピソード

だんだんだん……！

だんだんだん……！

市川は夢中になってドアをたたいていた。

アニメ制作会社「タップ」の演出部屋である。今日中に「パックの冒険」の第一話の打ち合わせを済ませなければならないのだが、監督の木戸がこの部屋にこもったきり出てこないのである。

「木戸さん！ なにやってんすかあ？ 打ち合わせはどうなってるの？」

「がちゃ……、とドアがかすかに開いた。市川ははつとばかりに飛び下がった。」

ドアが細めに開いて、そこから木戸監督の憔悴した顔がのぞく。

「市川くんか……」

「がらつ、と市川はドアを引き開いた。なかからむつとばかりに数日分のこもったにおいがはなたれた。市川はうっ、とひるんだ。」

「木戸さん、コンテはどうしたんです？」

「山田は木戸につめよった。」

「山田はあいまいにうなずいた。」

「ああ、できているよ……」

「洋子は反応した。」

「できてる……？ 本当に？」

「ああ、そこに積んである」

「え？」

市川は一步、部屋に歩み寄ると木戸の動画機のそばに積みまわっている紙の束に気がついた。そのひとつを手にとるとぱらぱらとめくっていく。

「本当だ……、しかも二十六話ぶん、できてら……！」

意外な成り行きに全員顔を見合わせた。

そして半年後……

都内某所の居酒屋で「タップ」のスタッフ全員が集合していた。

「乾杯！」

木戸監督の音頭で全員コップをささげもち乾杯をかわす。

アニメシリーズ「パックの冒険」の終了打ち上げ会であった。なんとかかんとか無事シリーズが終了したので慰労会をしようということになったのである。こういう慰労会はあまりやらないのが普通だが、今回は特別だった。

やあやあやあ、とおたがいコップにビールを注ぎおのおののペースで飲み始めた。

「やあ、それにしても市川さんと洋子ちゃんが結婚するなんてなあ……」

山田は顔をまっかにしてにこにここと笑い崩れていた。この慰労会はふたりの結婚披露宴のかわりでもあった。

山田の正面にはその市川と洋子のふたりが仲良く肩をならべてすわっている。そのふたりにスタッフがいれかわり、たちかわりやってきてつぎつぎと献杯していった。ふたりはそれをつぎつぎと受け、はやくもゆだったような顔色になっていた。

「山田さんも一杯……」

言われて山田は顔をあげた。このシリーズの担当制作進行がビールをささげていた。山田はうなずいてコップをあげた。

「ああ、ありがとう。三村くんも飲んだらどうだい」

言われて制作進行は妙な顔になった。

「また三村ですか？　ぼく、木村ですよ」

あれっ、と山田は首をすくめた。

「ああ、そうか……。すまん、すまん。つい間違えた……」

「山田さん！」

となりの木戸監督が山田の肩をたたいた。

「あんた、よく木村くんを三村くんと言い間違えるなあ。いったい、

その三村という苗字になにかあるのかい？」

さあ、と山田は首をひねった。

まあいいさ。山田はひとりうなずいた。とにかく「パツクの冒険」はシリーズを終了したのだ。

山田は木戸にむきなおった。

「しかし木戸さん。あんときはびっくりしたなあ」

ん？ と、木戸は鎌首をあげた。

「なにしろ数日、演出部屋にこもっていたと思ったら、全二十六話ぶんのコンテ、ぜんぶ描きあげていたんだから。あのせいで、このシリーズは順調に終わったようなものだ」

その山田の言葉にそうそうそう、と市川は同調した。

「おれもそう思った。おれたち、てつきり木戸さんが部屋から出てこないんで、コンテ一枚もできてないんじゃないか、なんて思ってたんだぜ」

木戸はうわははは……、と高笑いをあげた。その木戸に、番組プロデューサーが近づいてきた。

「木戸さん、半年間おつかれさまでした」

うん、と木戸はうなずいた。プロデューサーは木戸の隣にむりやり尻を落着けると、話しかけてきた。

「木戸さん。いい話があるんですよ」

「なに？」

「番組のスポンサーがシリーズのできに大変満足してましてね、それでぜひ続編をやりたい、と言っているんです」

へえ……、と木戸は目をきらめかせた。

「そりやいいですねえ。ばくも、あのシリーズの続編は考えていたんですよ」

ぞくり、となぜか山田はふたりの会話を聞いて寒気を感じていた。ふと前の市川と洋子のふたりを見ると、ふたりともいっぺんに酔いがさめたような表情になっている。

なんか、とてもヤバイことになっているんじゃないか……？ こ

の状況にはなんだか覚えがありそうな……。

プロデューサーは続けた。

「こんども監督が全話数のコンテ、描いてくれるって……」

「ああ、もちろん！」

木戸はおおきくうなずく。

山田は顔をあげた。

「なんだかどこかで」声」が聞こえたような気がしたからだ。

「堪忍や……」

「そんな」声」がどこからか聞こえたようだった。

エピソード（後書き）

感想、評価などぜひお願いします。これからの励みになりますので
……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7465c/>

アニメのお仕事

2010年10月8日14時07分発行